山形県埋蔵文化財センター調査報告書第217集

田向遺跡第1・2次発掘調査報告書

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

田向遺跡

第１・２次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 217 集

２０１５

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

田向遺跡（たむかい）

第１・２次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 217 集

平成 27 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

A 区完掘状況全景（南から）

B・C 区完掘状況全景（北西から）

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、田向遺跡の調査成果をまとめたものです。

田向遺跡は、山形県村山市に所在します。村山市は、山形盆地（村山盆地）の北端に位置し、県内のほぼ中央に位置しています。東には奥羽山脈、西には出羽丘陵に囲まれ、さらに市内中央を最上川が蛇行しながら北流し日本海に注いでいます。また、市内には数多くの遺跡が分布し、現在までに 150 以上の遺跡が登録されています。時代は旧石器時代から中・近世と多岐にわたっています。

この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、田向遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、主に平安時代の土師器・須恵器、近世・近代と考えられる陶磁器、瓦質土器、銭貨、石製品などが出土しています。遺構は柱穴、土坑、溝跡などが確認され多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　菅野　滋

凡　　例

1　本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に係る「田向遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が実施した。

4　本書の執筆は、安部将平、渡邉安奈が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、斉藤敏行、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

　第Ⅰ章　安部将平、渡邉安奈

　第Ⅱ章　安部将平

　第Ⅲ章　安部将平

　第Ⅳ章　パリノ・サーヴェイ株式会社

　第Ⅴ章　安部将平

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

　SP…柱穴　　SK…土坑・倒木痕　　SD…溝跡　　SG…池跡

　SX…性格不明遺構　　RP…登録土器

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

10　遺物観察表において括弧内の数値は、図上復元による推定値を示している。

調 査 要 項

遺跡名	田向（たむかい）遺跡		
遺跡番号	208-132		
所在地	山形県村山市大字名取（なとり）字田向（たむかい）		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 22・23 年度）		
	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 25・26 年度）		
受託期間	平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日		
	平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日		
	平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日		
	平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日		
現地調査	平成 22 年 5 月 17 日～ 8 月 24 日、10 月 26 日～ 11 月 29 日		
	平成 23 年 5 月 16 日～ 6 月 13 日		
調査担当者	平成 22 年度	調査課長	阿部明彦
		課長補佐	伊藤邦弘
		主任調査研究員	髙橋敏（調査主任）
		調査研究員	三浦勝美
		調査員	佐藤智幸
	平成 23 年度	調査課長	安部実
		考古主幹	伊藤邦弘
		調査研究員	大場正善（調査主任）
		調査員	板橋龍
	平成 25 年度	整理課長	黒坂雅人
		調査員	渡邉安奈（整理主任）
	平成 26 年度	整理課長	伊藤邦弘
		調査員	安部将平（整理主任）
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 22・23 年度）		
	山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25・26 年度）		
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所		
	村山市教育委員会		
	山形県教育庁村山教育事務所		
	村山東根土地改良区		
業務委託	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務　国際航業株式会社（平成 22・23 年度）		
	基準点測量業務　国際航業株式会社（平成 22 年度）		
	株式会社三和技建（平成 23 年度）		
	理化学分析業務　パリノ・サーヴェイ株式会社（平成 22・25 年度）		
発掘作業員	五十嵐洋子　井上正三郎　志賀昭夫　海老名則子　奥山洋子　柿崎次男　加藤道子		

	木村石美	今野啓治郎	佐々木幸治	斉藤敦子	齋藤弘治	斉藤繁一	斯波久一郎
	佐藤孝子	笹原武司	須藤喜志雄	竹井均	縄正治	掘雄一	松坂英勝
	松田大樹	結城孝子	（五十音順）				
整理作業員	鏡　幸枝	小林美喜	渡部真紀	（五十音順）			

目　次

Ⅰ　調査の経緯
1　調査に至る経過……1
2　調査の経過と方法……1
3　グリッド設定……2
4　整理作業の経過……2
Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　地理的環境……4
2　歴史的環境……4
Ⅲ　調査の成果
1　調査の概要……10
2　A 区の遺構……10
3　B 区の遺構……11
4　C 区の遺構……11
5　出土遺物……12
Ⅳ　理化学分析
1　土壌理化学分析（1）……38
2　土壌理化学分析（2）……39
Ⅴ　総括
1　調査のまとめ……42
2　SD114・149・235 について……42

報告書抄録……巻末

表

表 1　調査工程表……2
表 2　遺跡地名表……7
表 3　柱穴観察表……32
表 4　土師器・須恵器観察表……36
表 5　陶磁器観察表……36
表 6　陶磁器観察表……37
表 7　金属製品観察表……37
表 8　石製品観察表……37
表 9　土壌理化学分析結果（1）……38
表 10　土壌理化学分析結果（2）……40

図　版

第 1 図　調査区概要図 …… 3
第 2 図　地形分類図 …… 5
第 3 図　遺跡位置図 …… 6
第 4 図　調査区全体図（1） …… 14
第 5 図　調査区全体図（2） …… 15
第 6 図　A 区遺構配置詳細図（1） …… 16
第 7 図　A 区遺構配置詳細図（2） …… 17
第 8 図　A 区遺構配置詳細図（3） …… 18
第 9 図　A 区遺構配置詳細図（4） …… 19
第 10 図　B・C 区遺構配置詳細図（1） …… 20
第 11 図　B・C 区遺構配置詳細図（2） …… 21
第 12 図　基本層序位置図 …… 22
第 13 図　A ～ C 区基本層序 …… 22
第 14 図　SD10・11・12 溝跡、SP25 柱穴 …… 23
第 15 図　SD113・114・172 溝跡、SP115 ～ 118・131・208・209 柱穴 …… 24
第 16 図　SD149・187・228・235 溝跡、SP229・232・236 柱穴 …… 25
第 17 図　SP34・35・37・38・41・44・45・47 ～ 49・58 柱穴 …… 26
第 18 図　SP59・63・64・69・87・91 ～ 93・97・110・121 柱穴 …… 27
第 19 図　SP122・128・138・142・147・148・192・197 柱穴 …… 28
第 20 図　SP203 ～ 205・233・240・244・245・248・265・268 柱穴 …… 29
第 21 図　SK1002・1058・1065・1073・1075 土坑 …… 30
第 22 図　SP1005・1006・1013・1016・1028・1031 柱穴、SK1079 倒木痕 …… 31
第 23 図　SK1080 倒木痕 …… 33
第 24 図　A 区出土遺物 …… 34
第 25 図　A・B 区出土遺物 …… 35
第 26 図　B・C 区出土遺物 …… 36
第 27 図　SD114・149・235 道路跡想定図（古段階） …… 43
第 28 図　SD114・149・235 道路跡想定図（新段階） …… 43
第 29 図　道路跡想定ライン図 …… 44
第 30 図　明治 34 年測量地形図 …… 44
第 31 図　明治 34 年測量昭和 40 年修正地形図 …… 44

写 真 図 版

巻頭写真 1　A 区完掘状況全景
巻頭写真 2　B・C 区完掘状況全景
写真図版 1　A 区調査前全景、A 区北壁基本層序、A 区東側遺構検出状況、A 区西側遺構検出状況、A 区完掘状況
写真図版 2　SD10 ～ 12 検出・完掘状況、SD149・187・228・235 検出・完掘状況
写真図版 3　SD 113・114 検出状況、SD114・SP118 断面 SD149・187・228 断面、SP128・131・142 断面
写真図版 4　SP147・192・197・203・204・205・240・244 断面
写真図版 5　SP245・248・268 断面、B 区東壁基本層序 B 区北側遺構検出状況、B 区完掘全景
写真図版 6　SK1002・1058・1065・1073 断面・完掘状況
写真図版 7　SK1075 断面・完掘状況、SK1058・1065・1073・1075 完掘状況、SP1005・1006・1013 断面
写真図版 8　SP1016・1028・1031 断面、C 区調査前全景 C 区南側基本層序（1）・（2）、SK1079・1080 断面
写真図版 9　C 区遺構検出状況、C 区完掘状況
写真図版 10　A 区出土遺物
写真図版 11　A・B 区出土遺物
写真図版 12　A・B・C 区出土遺物（1）
写真図版 13　A・B・C 区出土遺物（2）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

田向遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴う緊急発掘調査である。

平成８年に建設省東北地方建設局山形工事事務所（当時）により東北中央自動車道相馬尾花沢線東根尾花沢間（当時）が計画された。建設事業の内容は、東北内陸部の産業、経済、文化の広域的な交流・連携の促進はもとより、緊急時における代替および迂回等のネットワーク機能の強化を目的としている（国土交通省 2011）。これを受け山形県教育委員会は、平成 11 年４月に現地踏査を行い、同年に本遺跡を新規登録した。のち平成 21 年３月 25・26 日の２日間にわたって、事業予定地についての詳細分布調査（試掘調査）を実施し、1.5m×10 ～ 20m のトレンチ計 17 本（総面積約 300 ㎡）を設置した。その結果、遺構・遺物が確認できたトレンチは６本であった。遺構は地表面 30 ～ 40cm の深さから溝跡、土坑、柱穴を検出、また一部の地山面から十和田 a 火山灰が確認された。遺物は縄文土器片、須恵器片、陶器片が出土した（山形県教育委員会 2010）。

試掘調査の結果を受け、平成 21 年３月 30 日に山形県教育委員会から事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所に対し、本遺跡の詳細分布調査報告が行われた。その後、同事業関連で削平される範囲について記録保存のための緊急発掘調査を実施する運びとなり、財団法人山形県埋蔵文化財センター（当時）が国土交通省山形河川国道事務所から委託を受けて、発掘調査を実施する事となった。平成 22 年度に第１次調査、平成 23 年度に第２次調査を行った。なお、同じ東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴う発掘調査は現在（平成 26 年度）までに本遺跡を加え 19 遺跡を数える。

2　調査の経過と方法

第１次調査は、平成 22 年５月 17 日～８月 24 日、10月26日～11月29日までの延べ76日間で実施した。平成 21 年度の試掘調査の結果、事業範囲内の中央部は昭和 40 年代に行われたほ場整備により削平を受けていたため、調査対象範囲から除外された。調査区は南側（A 区）3,700 ㎡と、北側（B 区）800 ㎡の２地区に分け調査を実施した（第１図）。B 区の調査は、調査区東に設置されている農業用ビニールハウスの使用に伴い、B 区の中央から北側半分の範囲を農道として使用する予定であった為、先行して B 区南側を調査し、農道の使用が一時中断したのち、B 区北側の調査に着手した。

５月 17 日に調査事務所に器材搬入を行い、調査を開始した。調査区設定後に調査区外周に沿って線掘りを行い、５月 18 日～６月 11 日にかけて A 区・B 区南側を重機による表土除去を行い、表土除去終了区域から順次面整理及び遺構検出を実施した。またそれと並行して外部委託による基準点測量（グリッド杭打設）を行った。７月６日から遣り方・平板測量による平面図作成を実施、その後、平面図作成の進捗状況を確認しながら、順次遺構精査を B 区南側から A 区へと進めていった。その間、土層断面図作成、写真撮影などの記録作業を適宜行っていった。

８月 24 日には、外部委託による調査区（A 区から B 区南側の範囲）の空中写真測量を実施し、A 区・B 区南側の調査を終了した。また、９月 26 日には、現地で本遺跡を含めた３遺跡合同の調査説明会を実施、地元住民を中心とした 70 名の参加を得た。

10 月 26 日から農道直下である B 区北側の調査を開始した。前半の調査同様、重機による表土除去、遺構検出、遺構精査、記録作業の順で調査を進めた。

11 月 26 日には、外部委託による B 区を中心とする空中写真測量を実施した。11 月 29 日に B 区北側の農道取り付け及び補修を完了し、第１次調査を終了した。

第２次調査は、平成 23 年５月 16 日から６月 13 日までの延べ 20 日間で実施した。対象は第１次調査で調査した B 地区の北側 200 ㎡（C 区）について調査を実施した（第１図）。５月 16 日に調査事務所に器材搬入を行い、翌 17 日は重機による表土除去、外部委託によ

る基準点打設及び遺構検出作業を実施した。その後、調査区土層観察用のサブトレンチの設置及び掘り下げ、遺構精査を行い、進捗状況を確認しながら適宜、平断面図・等高線の作成、写真撮影などの記録作業を行った。

6月8日には、外部委託による空中写真撮影、6月10日には現地で事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所の担当者、山形県教育委員会ほか関係者向けに調査報告を行った。6月13日には、器材撤収を行い、第2次調査を終了した。

3　グリッド設定

調査区を区画するグリッドは、平面直角座標系第X系：X＝－26,000.000、Y＝－12,000.000を原点とし4m四方で設定した（第1図）。グリット設定基準は、まず山形県全域を囲むように南北をX軸、東西をY軸とし、X軸をA～E、Y軸をA～Cとし県全域を画した。このアルファベット表記を40km単位で大グリッド、その中を400mに区分する中グリッド、さらにその中を4m単位で区分する小グリッドを設定した。中・小グリットは、共に数字表記で南から北へ00～99、西から東へ00～99で表記し、「AA0000－0000」と位置を表記した。この表記方法は、当事業にかかる他の村山地区の遺跡にも共通に適用されている。

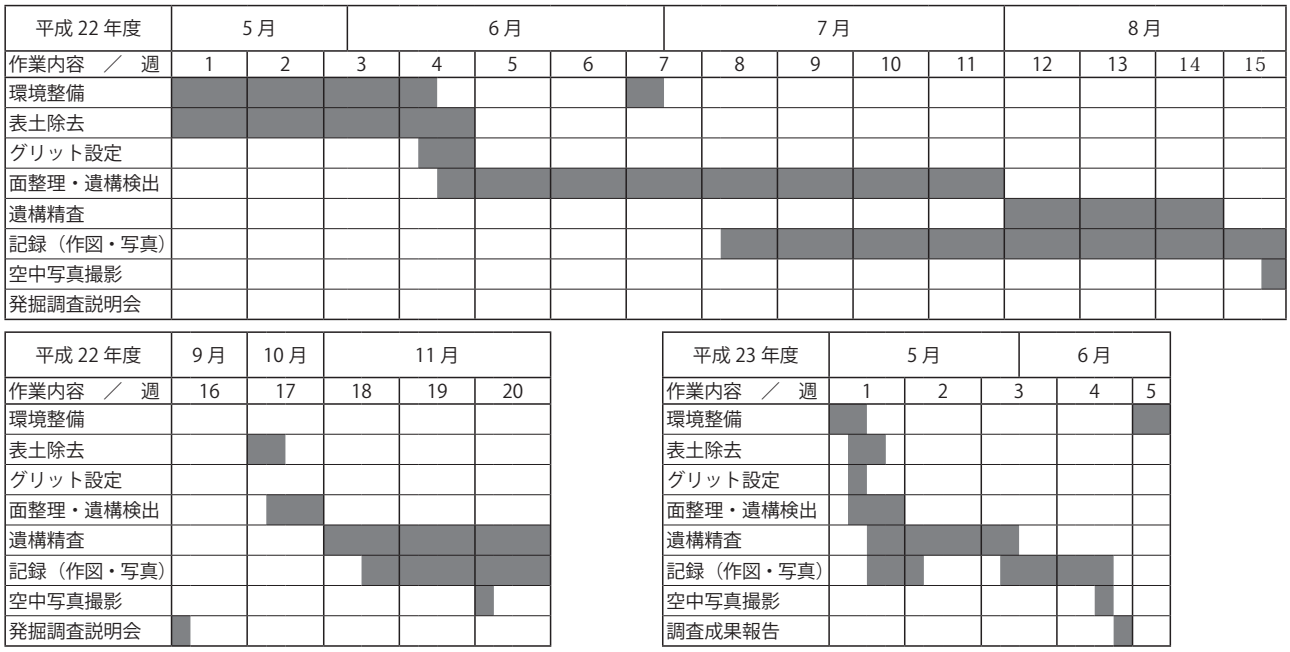
4　整理作業の経過

平成22・23年度の整理作業は、各調査の終了後から整理作業を開始した。出土遺物については洗浄、注記の基礎整理作業、また図面、写真、台帳などの記録類の整理を行い、平断面図のデジタルトレース作業を行った。

平成25・26年度は、第1・2次出土遺物の接合・復元、掲載遺物の実測図作成、実測図のデジタルトレース、遺構図版作成、版組み、遺物写真撮影、原稿執筆など報告書作成・編集作業を行った。理化学分析としては、第1次調査で検出した4基の土抗から採取した数点の土壌サンプルを外部委託し土壌分析を行った。その結果報告を第Ⅳ章に掲載している。

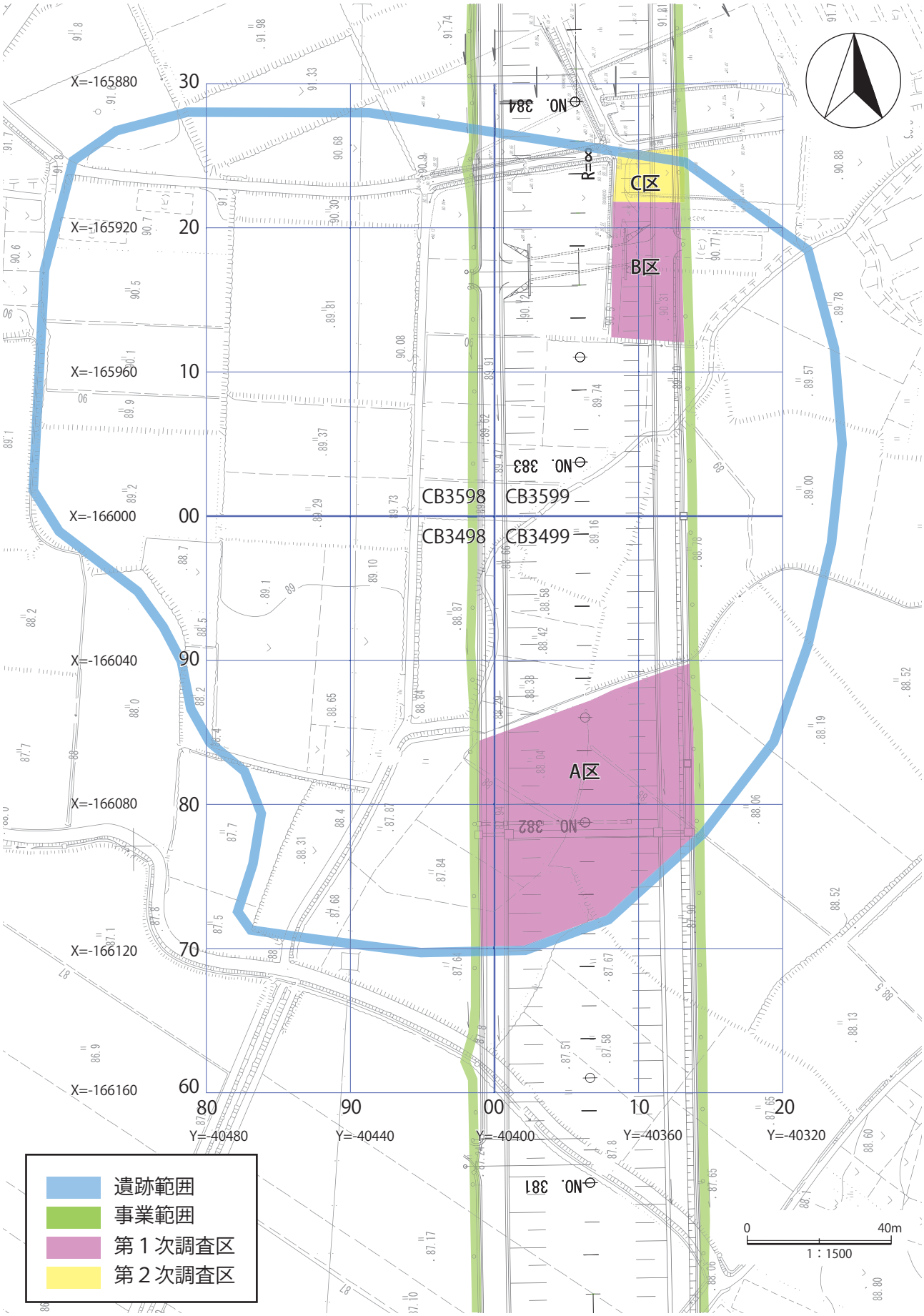
報告書作成後の出土遺物については、報告書に掲載したものと未掲載のものを別にして梱包・収納した。なお、本報告書掲載遺物については、追加で図番号を注記している。本遺跡の調査成果をまとめ、平成27年3月末日に本報告書を刊行した。

表1　調査工程表



引用・参考文献

国土交通省東北地方整備局　2011『道路事業再評価　東北中央自動車道東根～尾花沢』平成23年度事業評価監視委員会（第2回）資料
山形県教育委員会　2001『分布調査報告書（27）』山形県埋蔵文化財調査報告書第201集
山形県教育委員会　2011『分布調査報告書（36）』山形県埋蔵文化財調査報告書第214集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2011『年報　平成22年度』
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2012『年報　平成23年度』


X=-165880
X=-165920
X=-165960
X=-166000
X=-166040
X=-166080
X=-166120
X=-166160
30
20
10
00
90
80
70
60
80
90
00
10
20
Y=-40480
Y=-40440
Y=-40400
Y=-40360
Y=-40320
NO. 384
NO. 383
NO. 382
NO. 381
R=8
C区
B区
A区
CB3598
CB3599
CB3498
CB3499
遺跡範囲
事業範囲
第１次調査区
第２次調査区
0
40m
1：1500

第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

田向遺跡は、山形県村山市大字名取字田向（北緯 38 度 30 分 17 秒、東経 140 度 22 分 12 秒）に位置する。

本遺跡が位置する村山市は、山形盆地（別名村山盆地）の北端に位置し、山形県内のほぼ中央部に位置している。面積は、196.46km^2 を測り、県内 35 市町村の中でも、9 番目の広さを誇る。8 地区（大倉、袖崎、西郷、大久保、冨本、戸沢、大高根）から構成され、本遺跡は、西郷地区に位置する。東方には奥羽山脈の一主峰をなす甑岳、西方には出羽山地に属する葉山が画している。地形割合は、山地・火山地が 59.7% と半数以上を占め、丘陵地が 4.6%、台地・段地が 20.9%、低地が 14.8% となっている。地目別割合は、田が 15.9％、畑が 10.8％、山林・原野が 45.0％、宅地が 3.9％、その他 24.3％となっている（佐藤 2011）。

山形盆地は、南北 40km、東西 10 ～ 20km の舟底形で扇状地の発達の良い盆地と言われており、北側に隣接する尾花沢盆地とは河島山丘陵、南側に隣接する上山盆地とは蔵王火山の泥流堆積による挟搾部によって画される。盆地の東側には、北から乱川扇状地、立谷川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地等が並列し、北のものほど規模が大きく、開析が進み、段丘化している。西側には、比較的平坦な寒河江川扇状地が広がる。山々に囲まれた典型的な内陸型の盆地で寒暖の差が大きい。年間降水量は多くないものの、年間降雪量は多く、時には零下 15℃を下回ることもあるという。また、昼夜の温度差が大きいことから、果樹や農作物の栽培には適している。盆地中央には、吾妻山（米沢市）を水源とする流路延長 229km の最上川が蛇行しながら北流し、盆地両側の丘陵に源を発する中小河川がこれに合流し、日本海に注ぐ。流域には、肥沃な土地が開けている。

本遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地との境にある河島山段丘の南麓につながる標高約 90m の低地部に位置する。地目は水田、畑地にあたる。 地形分類図上では、最上川右岸の河間低地にあたる（第 2 図）。表層地質は、未固結の礫、砂および粘土からなる段丘堆積物である。最上川右岸の道六から大淀に至る丘陵には、厚さ 1 ～ 2m の中粒礫の上に 3m ほどの白色の粘土層及び厚さ 2m の細粒礫が堆積する。耕作土壌は、中粗粒灰色低地土壌（灰褐系）である。非固結堆積岩を母材とし、堆積様式は水積で河間低地、扇状地に分布し、水田として利用されている。土性は壌質で漏水しやすく、塩基、珪酸、有効窒素、及びマンガン、鉄の養分も少ない生産力の低い土壌が多い（山形県企画調整部土地対策課 1981）。

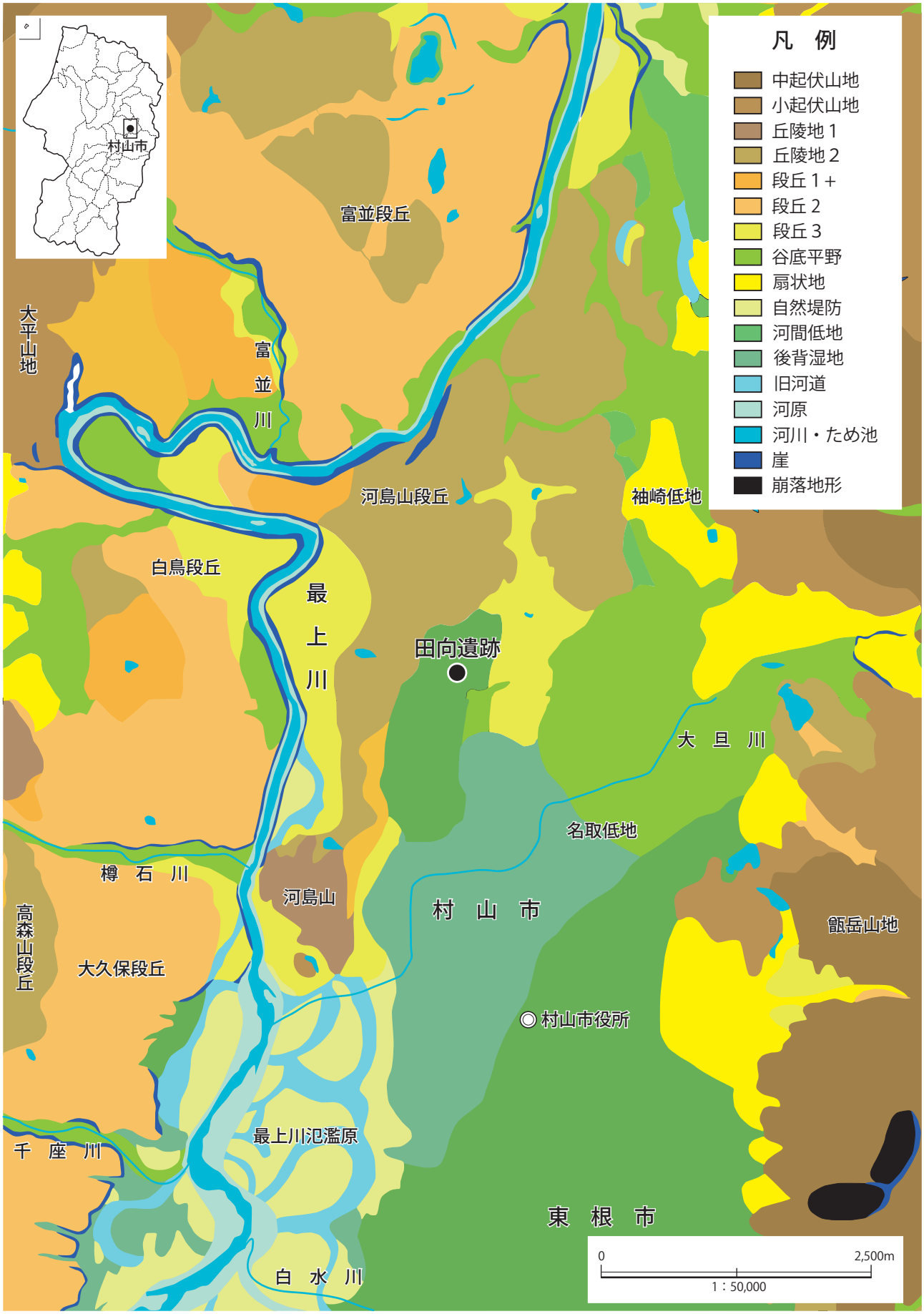
2　歴史的環境

村山市では、数多くの遺跡の分布・発掘調査が実施されている。現在までに 150 箇所以上の遺跡が確認されている。

田向遺跡は、最上川右岸の河島山丘陵南麓に広がる微高地に位置する平安時代の集落跡である。周囲には、多くの遺跡が分布し調査されている。第 3 図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「富並」、「延沢」、「谷地」、「楯岡」を編集し、本遺跡を中心とした図幅内に、周知されている 48 遺跡を掲載した。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡から北に約 1km 離れた清水西（しずにし）遺跡（7）と河島山遺跡（43）などが挙げられる。清水西遺跡は、平成 24 年度に当センターによる発掘調査が行われ、台形石器及び平坦打面で剥離された厚手石刃を素材にしたナイフ形石器群などが出土している（山形県埋文 2013a）。河島山遺跡は、最上川右岸に張り出した出羽丘陵の突端、河島山から南斜面に位置している。杉久保型ナイフ、石刃、彫刻刀、掻器などの石器群が出土している。また河島山は立地条件に恵まれていたと考えられており、旧石器時代をはじめ、縄文時代（早期～中期）、弥生時代、古墳時代及び中世などに属する各期の遺構・遺物が確認される複合遺跡である。また、昭和 26（1951）年 4 月 1 日に城館跡、1 号墳、板碑群が県指定史跡に指定された（村山市史編さん委員会編 1981）。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期に至るまで各時期の



※『土地分類基本調査　尾花沢・楯岡』山形県企画調整部土地対策課 1979・1981 の地形分類図に加筆

第２図　地形分類図

※国土地理院発行２万５千分の１地形図「富並」「延沢「谷地」「楯岡」に加筆

第３図　遺跡位置図

表２　遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	田向	散布地	縄文	25	袋	集落跡	縄文・奈良
2	田向２	集落跡	平安	26	川口Ａ（大慎）	集落跡	縄文・奈良
3	松橋	散布地	平安・中世	27	船橋	集落跡	縄文
4	蝉田	散布地	平安	28	鹿の子沢Ｃ	集落跡	縄文
5	経塚森	散布地	平安	29	後原（墳墓）	墳墓	中世
6	清水	散布地	縄文・平安	30	後原	集落跡	縄文・奈良
7	清水西	集落地	旧石器・縄文	31	後原（板碑）	集落跡	平安
8	小滝Ａ	集落跡	縄文	32	西原Ａ	散布地	縄文
9	大原口	集落跡	縄文	33	西原Ｂ	集落跡	平安
10	東熊野苗畑	集落跡	縄文	34	西原Ｃ	集落跡	縄文・奈良・平安
11	里向山Ｂ	集落跡	縄文	35	草伊賀Ｂ	集落跡	平安
12	里向山Ｃ	散布地	縄文	36	川口Ｂ（大慎）	集落跡	縄文
13	里向山Ｄ	散布地	縄文	37	後久保	集落跡	縄文・平安
14	川口	集落跡	縄文	38	河島山口Ａ	集落跡	縄文
15	早房Ａ	集落跡	縄文	39	河島山口Ｂ	集落跡	縄文
16	早房Ｂ	集落跡	縄文	40	河島山	城館跡	中世
17	早房Ｃ	集落跡	縄文	41	河島山古墳群	墳墓	古墳
18	早房Ｄ	集落跡	縄文・弥生	42	河島山	城館跡	中世
19	小坂	集落跡	縄文	43	河島山	集落跡	先史
20	浦	散布地	縄文	44	塩川前山	集落跡	弥生
21	清水北	散布地	縄文・平安	45	河島・丸森	集落跡	縄文
22	第二農場	集落跡	縄文	46	八反稲千原	散布地	縄文・平安
23	棚子	集落跡	縄文・平安	47	楯岡城	城館跡	中世
24	草伊賀	集落跡	縄文	48	羽黒神社西	集落跡	縄文

遺跡が確認されている。川口遺跡（14）では、竪穴住居跡 13 棟、墓壙 45 基（石組による石棺墓を含む）、集石遺構、立石遺構などが検出されている。（6 基確認されている）石棺墓は、その主軸方向に共通性があり、石組を有するタイプの墓壙として全体的にまとまりがあると指摘されている。立石遺構は、立石（石棒）はほぼ垂直状態で出土し、極めて稀少な事例である。出土遺物は、土器をはじめ多種多様なものが出土している。土器は堀之内２式・加曽利 B1 式に相当するものや東北地方北部の十腰内Ⅰ式系も出土している。石器は、日常の生業で使用されるものの他、石棒・石刀などが出土している。また、「パン状炭化物」・「アスファルト塊」が出土している（山形県教委 1990）。早房（はやぶさ）Ｄ遺跡（18）は、富並段丘の南端、最上川にむかって舌状に張り出した段丘上に位置する。遺物は、大洞Ｂ式の半精製深鉢が出土し、後期から晩期の遺跡と捉えられている（山形県教委 1988）。羽黒神社西遺跡（48）は、平成 26 年度に当センターによる発掘調査が行われ、盛土遺構、フラスコ状土坑、石囲い炉、土器敷き石囲い炉などを検出した。遺物は縄文中期中頃（大木 8b 式）の遺物（土器・土製品・石器・石製品など）が出土し、さらに少量ながらも縄文早期（押型文・条痕文・尖底土器）の土器片が出土している（山形県埋文 2014b）。

弥生時代の遺跡は、確認数は少ない。塩川前山遺跡（44）は、河島山の南東斜面に位置し、後期の天王山式に並行する土器とアメリカ式石鏃が出土している。遺跡位置図範囲外になるが、稲下（いなくだし）遺跡は、最上川左岸、本遺跡から南西に約 2.6km の地点で北側に最上川支流の樽石川が流れる河岸段丘状に位置する。遺構は被熱した集石遺構のみである。土器は包含層より中期～後期に属するものが出土しており、中でも中期中葉の高坏などが注目される（小関 1995）。

古墳時代の遺跡は、河島山古墳群（41）、 名取古墳が挙げられる。河島山古墳群は、河島山１号墳・２号墳からなる。１号墳は、河島山頂付近の東斜面に位置する。円墳で墳丘頂部は径約 8m、墳丘の底径は約 24m、高さ約 4m、墳丘周辺には幅約 4m の周溝を有している。凝灰岩製の箱型石棺で、副葬品は確認されておらず、また埴輪・葺石も確認されていない。２号墳は、同山の南西にある丸森山山頂付近に位置する。１号墳同様、円墳で周囲には周溝を有する。両古墳とも本格的な発掘調査は行われていない。名取古墳は、河島山から北に約３㎞、河島山に連なる丘陵の西側で最上川の自然堤防上に位置する。河島山１・２号墳と同様、円墳で墳丘頂部は径約

10m、墳丘の底径は約 36m、高さ約 2.4m、墳丘全周に周溝をめぐらす。日本海側で最北に位置する古墳として注目される（伊豆田 1990）。また、当センターで平成 22 年度に発掘調査を実施した東熊野苗畑遺跡（10）の河川跡から古墳時代前期と考えられる土師器甕片が出土している（山形県埋文 2011）。

奈良・平安時代の遺跡は、当センターが行った平成 22 ～ 25 年度の発掘調査によって、村山市の古代の様相がより明らかになりつつある。本遺跡（1）、田向 2 遺跡（2）、松橋遺跡（3）、蝉田遺跡（4）、経塚森遺跡（5）、清水遺跡（6）、西原 C 遺跡（34）などが挙げられる。田向 2 遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑などが検出され、中でも一部の溝跡、土坑から 10 世紀中葉から後葉に比定される土師器坏・皿が出土している。松橋遺跡では、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出され、遺物は土師器・須恵器・磁器で、9 世紀後半から 10 世紀前半頃を主体とする集落跡である。経塚森遺跡では、平安時代と考えられる掘立柱建物跡などを検出した（山形県埋文 2011）。蝉田遺跡では、掘立柱建物跡、河川跡などが検出され、出土遺物は土師器坏体部に「定」と書かれた墨書土器、木製の斎串、人形や鳥形などの祭祀儀礼に使われたと考えられる遺物などが出土している（山形県埋文 2013a）。清水遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが検出され、一部の竪穴住居跡、溝跡などの覆土から西暦 915 年に噴火した十和田火山のものと考えられる灰白色火山灰が確認されている。9 世紀代と考えられる区画溝に囲まれた掘立柱建物群が確認され、大きいもので 3 間 ×3 間で、倉庫群の可能性が高いと考えられている。また、これらの建物間で時期差は確認されないことから短期間に建て替えが行われたと考えられている。出土遺物は土師器・須恵器のほか、土師器底部に「縄」「刑」「太」「寺」と書かれた墨書土器、鉄製紡錘車、鉄滓、鞴の羽口などが出土している（山形県埋文 2011・2012・2013a）。西原 C 遺跡は、平成 7 年に村山市教育委員会よる発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出され、中でも掘立柱建物跡は広範囲にわたり 20 棟以上検出されている。出土遺物は、土師器・須恵器のほか、須恵器坏底部に「石」と書かれた墨書土器、土製紡錘車や砥石などの石製品が出土している（村山市教委 1996）。

中世は、河島山遺跡（40・42）、楯岡城（47）などが挙げられる。河島山遺跡は、山頂と東側の山腹と 2 箇所に分かれ、山頂はチャシ址一の丸と呼ばれる鉢巻式遺跡で、空堀と土塁に囲まれた円形の曲輪である。チャシ址二の丸は二重の空堀で曲輪は削平されず、自然地形のままである（山形県教委 1996）。両者の築城年代は異なる解釈が出されているが、詳細は不明である。また、河島山からは多数の板碑・五輪塔などが完形・破片を合わせ 70 基以上確認されている。同山を開墾した際に出土したとされているが、現在は山頂の一隅にまとめられている。板碑の石材は、凝灰岩で様式はいずれも成生型を呈し、大きいもので、約 90 ㎝を測る。明確な時期は不明であるが様式から室町時代末頃から桃山時代初めと考えられている。楯岡城は、村山市街地の北東に隣接する楯山に築かれた連郭式の山城で別名舞鶴城とも呼ばれている。南側の山裾に館があり、館を中心に城下町が開けていた。楯山は、甑岳の西側に伸びる台地で、その先端の西楯山・中楯山から構成される。西楯山は、標高約 209m で山腹は急斜面である。三方に伸びた尾根に大小の曲輪を段々と連続的に配置する。頂上の曲輪も平坦で、櫓などの建造物が築かれていたと考えられている。頂上からは近隣の市町村が一望できる。中楯山の頂上曲輪も平坦で南東部に建物跡が確認されているが、詳細は不明である。曲輪の東西は堀切で区切られており、楯岡城の沿革について『最上楯岡元祖記』には、承元 2 年（1208）に櫛山月楯に開城したが 4 代にして没落、弘長元年（1261）に奥州より里見氏が入部して楯岡に開城、本城と名付けたとあり、5 代 144 年間続いたとされる（山形県教委 1996）。室町時代に入り、山形城主斯波兼頼の孫、最上満直の四男最上伊代守満国が応永 13 年（1406）に入部、楯岡氏を名乗って満国以後 7 代約 190 年間続く。楯岡城は最上氏にとって北進における重要な拠点であったとされる。

7 代満茂・8 代光直が活躍した近世期に両楯山が城下と共に整備された。満茂は、秋田県南部攻略の中心となって活躍し、後に秋田湯沢城に移った。以後、楯岡城は最上家家臣が交代で勤番するが、元和 2 年（1616）、最上義光の実弟で最後の城主である楯岡光直が封じられた後は、最上氏家中でも重要な地位を築く。光直は 1 万 7 千石を拝領し、領地は楯岡・湯野沢（現湯沢）・櫛山及

び大石田・井出・深堀（現大石田町）の各村で、最上川を抑える要地であった（小関 1995）。元和 8 年（1622）に最上氏が改易になったことにより、楯岡城は廃城となった。また同年の名取村（現在の村山市名取・一部の楯岡地区）は、最上氏領から山形藩領になる。名取村は浮沼・中原・清水・境ノ目の枝郷がある。寛永20年（1643）からは幕府領、安政 2 年（1855）以降は松前藩領と移り変わり、明治期を迎える。

明治維新後の村山市は、行政区画の変遷に伴い旧幕府領は明治 2 年（1869）に酒田県、また翌年には山形県に編入された。近現代における名取村は、明治 11 年（1878）には北村山郡に属し、明治 22 年（1889）には名取・大淀・長島・河島が合併し、西郷村の大字となり、昭和 29 年から村山市の大字名となった（佐藤 2011）。

本遺跡の周辺には、先述した田向 2 遺跡、清水遺跡、松橋遺跡、蝉田遺跡などが位置している。

引用・参考文献

伊豆田忠悦　1990 「村山市」『山形県の地名　日本歴史地名大系 6』 p.475 ～ p.485　平凡社
小関広明　1995 「村山市」『角川　日本地名大辞典　6　山形県』 p.963 ～ p.969　角川書店
佐藤敏春　2011 『村山市再発見～その姿と心～』
村山市教育委員会　1996 『西原 C 遺跡発掘調査報告書』 村山市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
村山市史編さん委員会編　1981 『村山市史　別巻一　原始・古代』 村山市
村山市史編さん委員会編　1994 『村山市史　近世編』 村山市
山形県企画調整部土地対策課　1979 『土地分類基本調査　尾花沢　5 万分の 1　国土調査』
山形県企画調整部土地対策課　1981 『土地分類基本調査　楯岡　5 万分の 1　国土調査』
山形県教育委員会　1983 『農林事業関係遺跡（1）－発掘調査報告書－』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 63 集
山形県教育委員会　1988 『早房 D 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 131 集
山形県教育委員会　1990 『川口遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書 151 集
山形県教育委員会　1996 『山形県中世城館遺跡調査報告書』 第 2 集（村山地域）
山形県教育委員会　2001 『分布調査報告書（27）』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 201 集
山形県教育委員会　2011 『分布調査報告書（37）山形県内重要遺跡確認調査報告書（3）最上川関連遺跡確認調査報告書（4）押出遺跡確認調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 214 集
山形県教育委員会　2012 『分布調査報告書（38）』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 215 集
山形県教育委員会　2013 『分布調査報告書（39）山形県内重要遺跡確認調査報告書（5）押出遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 215 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2011 『年報　平成 22 年度』
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2012 『作野遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 205 集
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2012 『年報　平成 23 年度』
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2013a 『年報　平成 24 年度』
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2013b 『北原 2 遺跡第 1・2 次北原 4 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 207 集
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2014a 『森の原遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 211 集
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター　2014b 『羽黒神社西遺跡発掘調査説明会資料』
横山昭男・誉田慶信・伊藤清郎・渡辺　信　1998 『山形県の歴史』 県史 6　山川出版
横山昭男監修　2003 『図説　村山の歴史』 郷土出版社
横山昭男監修　2008 『決定版　村山ふるさと大百科』 郷土出版社

Ⅲ　調査の成果

1　調査の概要

本遺跡は、平成22年度に第1次調査、平成23年度に第2次調査を実施し、第1次調査は4,500㎡、第2次調査は200㎡で合わせて4,700㎡の範囲で調査を行った。A～C区で検出した遺構は、溝跡、土坑、柱穴などである。

なお、遺構を半截し堆積状況を確認した上で遺構の可能性が低いと判断したものについては遺構の位置や平断面図を掲載していない。また今回の調査で検出した遺構からの出土遺物は少量であり、遺構の時期特定には至っていない。掲載した遺物のほとんどは遺構外出土である。以下に調査区・遺構毎に詳細を述べる。

2　A区の遺構

A区の調査面積は3,700㎡である。遺構番号は、1～275を登録した。本調査で遺構の検出が多い地区で溝跡、柱穴などを検出した。また梅雨の降雨により調査区内は度々全面冠水し、遺構検出時には困難をきたした。

基本層序は、北壁と西壁の2面を記録した（第13図）。北壁の層序は、1～3層で設定した。1層は黒褐色シルトの耕作土である。2層は黒色シルトで、3層は黄褐色粘土で地山となる。西壁の層序は、1層は北壁同様、黒色シルトの耕作土で2層以下は黒色シルトを主体とし、7層は黄褐色砂質シルトの地山である。耕作土直下の黒色シルト層を遺構検出面とした。北壁と西壁とでは、高低差は30cmあり、南から北へなだらかに高くなっていく。

A　溝　　跡

検出した溝跡は、10条を数え、そのほとんどがA区西側からの検出である。土層は主に黒色シルトを基調とし、深さは5～20cmを測る。また、数条の溝は北西方向を主軸としている。

SD10・11・12溝跡（第14図）

SD10・11・12は、A区CB3499-7300～CB3499-7606の範囲に位置する。重複関係は、SD12がSD10・11に切られる関係を持つ。SD10は、検出長約12m、幅約0.3m、深さは6～10cmを測る。SD11は、検出長約9.5m、幅約0.2m、深さは6～10cmを測る。SD12は、検出長約7m、幅約0.9m、深さは6～10cmである。それぞれの土層はSD10・11は黒色シルトが主体の単層であるが、SD12は黒色シルトと暗オリーブ褐色の2層であり、土層の形状はそれぞれ浅いⅢ状を呈している。

SD113・114・172溝跡（第15図）

SD113・114・172はA区の中央部に位置する。SD113は検出長約12m、幅約0.3m、深さ6cm、SD114は検出長約25m、幅約0.4～0.6m、深さ10～14cm、SD172は検出長約34m、幅約0.3m、深さ8～18cmを測る。土層は、SD113・114は黒色シルトを主体とする単層または2層である。SD172は上層が黒色シルト、下層は地山由来の黄褐色粘質シルトである。

なお、SD113・172は、屈曲部分を境とし、番号を振り分けている。

SD149・187・228・235溝跡（第16図）

これらの4条の溝跡は、A区北西隅に位置する。CB3499-8000～CB3499-8503の範囲に位置する。重複関係は、SD228がSD149・187・235に切られる。SD149は検出長約21m、幅約0.2～0.6m、深さ6～10cmを測る。SD187は、検出長約8m、幅約0.3m、深さは8cmである。SD228は、検出長7.5m、幅約0.3～0.45m、深さ6～18cmを測る。SD235は、検出長約20m、幅約0.3～0.5m、深さ8～20cmを測る。

SD187・228の土層は黒色シルトの単層で、SD149は暗オリーブ褐色シルトと明黄褐色シルトの2層である。SD235は黒褐色土層を主体とし、上層はシルト層、下層は粘質シルト層である。

B　柱穴・ピット

検出した柱穴は、約60基である（第14～20図）。その中には、土層の堆積状況から柱痕跡を確認できるも

の、また柱穴と考えられるが判然としないピットが確認された。明確に柱痕跡と確認できるものは柱穴全体の約 10% 程度であり、掘立柱建物跡などの建物を構成するまでには至らなかった。柱穴の大きさは、約 25 ～ 40cm の値が大半を占め、大きいもので約 50 ～ 70cm の値を示す。深さは約 10cm ～ 20cm 程度であり、深いもので約 30cm の値を示す。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり逆台形を呈するもの、壁面がやや外傾するもの、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面が丸みを持つ U 字型を呈するものが確認できる。覆土は黒色シルト・黒褐色シルトが主体である。時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、柱穴の形状などから古代に帰属するとみなしたい。

柱穴の詳細については表 3 の柱穴観察表を参照されたい。

3　B 区の遺構

B 区は、A 区から北に約 90m 離れた調査区で、調査面積は 800 ㎡である。検出した遺構は、土坑、柱穴などで遺構番号は 1001 ～ 1078 を登録した。遺構の分布域は主に南側に集中している。

基本層序は、東壁を記録した（第 13 図）。層序は、1 ～ 5 層で設定し、土層は黒色シルト（1 ～ 3 層）・暗褐色シルト（4・5 層）が主体であり、A 区同様、5 層以下は黄褐色シルト層で地山である。

A　土　　坑

検出した土坑は、SK1002・1058・1065・1073・1075 の 5 基である（第 21 図）。平面形は、SK1002 は楕円形で長径 70cm、短径 60cm、深さは 12cm を測る。SK1058・1065・1073・1075 は長方形の土坑で、長径 2 ～ 4m、短径 0.6 ～ 1.6m、深さ 12 ～ 20cm を測る。覆土はそれぞれ黒色シルト・黒褐色シルトを基調としている。A 区同様、遺構から遺物が出土していないため遺構の時期特定には至っていない。

また、SK1058・1065・1073・1075 土坑は堆積状況から一気に埋められたと考えられ、墓壙の可能性が考えられることから、サンプルを採取し土壌理化学分析の業務委託を行った。その結果を第Ⅳ章に掲載しているので参照されたい。

B　柱穴・ピット

検出した柱穴・ピットは 6 基確認され、堆積状況を確認したところ柱痕跡を確認することはできなかった。平面形は、円形を呈し、長径 32 ～ 42cm、短径 26 ～ 40cm、深さ 8 ～ 16cm を測る。覆土は、黒色シルト・暗褐色シルトを基調としている。

A 区同様、柱穴の詳細については表 3 の柱穴観察表を参照されたい。

4　C 区の遺構

C 区は、平成 23 年度に第 2 次調査として調査を行った地区であり、B 区の北隣の調査区である。調査は、200 ㎡を対象に実施した。

基本層序は、南壁を記録した（第 13 図）。土層は、1 ～ 6 層で設定した。1 層は黒褐色細砂で耕作土で孔隙が多く壁面が崩れやすくなっており、軽度の撹乱が見受けられた。2 層は黒色細砂混じりシルト（黒ボク土）径 0.2 ～ 1mm 程度の褐鉄を多く含み、約 10mm 程度の孔隙が確認できる。下部は、グライ化していた。3 層は暗褐色細砂混じりシルトで漸移層である。4 層は明褐色細砂軽石混じり細砂シルトで層界で上部にグライ化した黒ボク土が混じり、部分的に褐鉄が集中する。5 層は明黄褐色シルトで褐鉄を斑状に含む。6 層は浅黄色細砂混じり粘土で 5 層の鉄が溶解し層界で混じり、下部に褐鉄を帯状に含む。

A　倒 木 痕

検出遺構は倒木痕 2 基（SK1079・1080）のみの検出であった（第 22・23 図）。長径は約 3.2 ～ 3.3m、短径約 2.7 ～ 3.2m、深さ 70 ～ 80cm を測る。覆土は黒色細砂シルト、褐色系細砂シルト、地山由来の黄橙色粘土を基調とする。堆積状況から共に西方へ倒木した事が確認され、また SK1080 からは瀬戸美濃の陶器小皿（26）が出土している。この事から樹木が倒木したのは中世と考えられる。SK1079 から遺物は出土していないため時期特定には至っていない。

5　出土遺物

A　概　　要

本遺跡から出土した遺物は、第1・2次調査合わせて2箱（文化財認定箱数）である。出土したその半数以上が近世・近現代陶磁器で、僅かながら土師器・須恵器、金属製品、石製品が出土している。

なお、31～49は写真図版のみの掲載となる。表4土師器・須恵器観察表、表5・6陶磁器観察表、写真図版13を参照されたい。

B　平安時代の遺物

当該期に比定される遺物は、A区のみの出土であり、一部遺構から出土しているが、大半は遺構外出土である（第24図、表4、写真図版10・13）。土師器・須恵器の出土は合わせて5点である。

1は、ロクロ成形による土師器坏の体部である。近現代のSG74池跡から出土した（第8図）。2は、須恵器坏の体部である。3は、須恵器甕体部下半にあたる。31は、土師器坏で32は土師器であるが小破片であるため、器種は不明である。

1～3・31・32の時期であるが、いずれも破片であるため時期特定が難しいが、平安時代と考えられる。

C　中近世の遺物

出土遺物は、瀬戸・美濃系陶器、肥前系磁器、生産地不明陶磁器、銭貨である。以下に生産地別にまとめて記述する。

(1) 瀬戸・美濃系陶器（第26図、表6、写真図版12）

出土数は、1点（26）のみである。器種は小皿で、灰釉を施す。時期は、中世と考えられる。

(2) 肥前系磁器（第25図、表6、写真図版10・11・13）

出土数は、10点である。器種は碗（10・11・12・19・39）、染付筒型碗（13・14）、皿（15・43・46）である。

10は、外面に草花文が施され、時期は17世紀後半から18世紀代と考えられる。11は、外面に雪輪梅木文が描かれるくらわんか碗で、時期は18世紀代と考えられる。12は、外面に文様を施し時期は18世紀と考えられる。13は、見込みにコンニャク印判と考えられる五弁花を施し、時期は18世紀から19世紀と考えられる。14は、外面に半菊文が施され、時期は18世紀後半から19世紀前半と考えられる。15は、内面に二重格子文が施される。時期は19世紀代と考えられる。19は、外面に二重網目文が施されるくらわんか碗である。時期は18世紀代である。

39は、内外面共に文様を施すが、詳細は不明である。43は、内面に草花文を施し、底面にはハリササエが見られる。39・43共に19世紀と考えられる。46は、B区SX1036性格不明遺構から出土し（第11図）、内面に文様を施すが、詳細は不明である。時期は18世紀と考えられる。

(3) 生産地不明陶器（第24図、表5・6、写真図版10・13）

8点を掲載した。器種は、擂鉢（4～6・35）、鉢（7）碗（33・34）、器種不明（38）である。

4～6は、内外面共にロクロ成形で内面に卸目が付される。4は櫛目が粗く、5・6は、密である。3個体共に生産地は不明であるが、4・5は18世紀から19世紀、6は19世紀と考えられる。

7は、内外面に灰釉を施し、漆接ぎが見られる。時期は近世と考えられる。

33は18世紀頃、34は近世と考えらる。35は、鉄釉を施し、時期は近世と考えられる。38は、外面に鉄釉、内面には灰釉を施す。器種特定には至っていないが、時期は19世紀以降と考えられる。

(4) 生産地不明磁器（第26図、表6、写真図版10～13）

6点を掲載した。器種は碗（20・25・40・41）、皿（27）、瓶（48）である。

20は、外面に草花文を施す。時期は18世紀から19世紀代と思われる。25は、外面の文様が不明であるが、内面は圏線を施す。時期は19世紀代と考えられる。27は、型打ち成形による白磁角皿で、時期は幕末から明治と考えられる。

40は、外面に雷文、41は外面に草花文、48は外面に文様を施すが詳細は不明である。3個体共に時期は19世紀代と考えられる。

(5) 銭貨（第26図、表7、写真図版12）

29は、江戸時代から幕末まで広く流通していた寛永通宝である。裏面は錆が進んでいるため、内容は確認で

きないが表面の字体から 1697 年以降鋳造の新寛永と考えられる。

D　近現代の遺物

出土遺物は、生産地不明陶磁器、石製品である。以下に詳細をまとめて記述する。

(1) 生産地不明陶器（第 24 図、表 5・6、写真図版 10・13）

出土数は 6 点である。器種は土管（8・9・45）、蓋（36）、急須（37）、器種不明（49）である。8・9 は、SX73 性格不明遺構から出土した（第 8 図）。8 は、外面に横位の沈線が 8 条施される。時期は共に近代以降と考えられる。

36 は、ロクロ調整で胎土・焼成共に良好である。近代に含めたが、近世に遡る可能性も考えられる。37 は、型打ち成形による陶器急須で時期は近代と考えられる。45 は、破片であるため判然としないが陶器土管と考えられ、時期は近代以降と考えられる。49 は、C 区北壁の覆土 1 層から出土した。器種は不明であるが、鉄釉を施す。時期は近代以降と考えられる。

(2) 生産地不明磁器（第 25・26 図、表 6、写真図版 11～13）

出土数は 9 点を数え、器種は、皿（16 ～ 18・22 ～ 24・47）、碗（21・42）である。

16 は、内面に型紙摺絵で文様を施し、見込に目跡が確認できる。時期は近代と考えられる。17 は、内面に銅版転写による銅緑釉の文様を施す。18 は、蛇ノ目凹型高台の磁器皿で見込に目跡があり、内面には楼閣山水文を施す。時期は 17・18 共に近代と考えられる。22 は、内外面共に型紙摺絵による文様を施す。21 は、型押し成形による磁器碗である。外面に蓮弁文を施し、また内外面に鉄釉を施す。時期は近代と考えられる。23・24 は内面に銅版転写による文様を施し、さらに 23 には口紅を施す。共に時期は近代と考えられる。

42 は、外面に松竹梅と思われる文様を施す。47 は、内面に銅版転写による文様を施す。時期は共に近代と考えられる。

(3) 生産地不明瓦質土器（表 6、写真図版 13）

出土数は 1 点（44）である。器種は焜炉で、ナデ調整を施し、胎土・焼成は良好である。近代としているが、近世に遡る可能性もある。

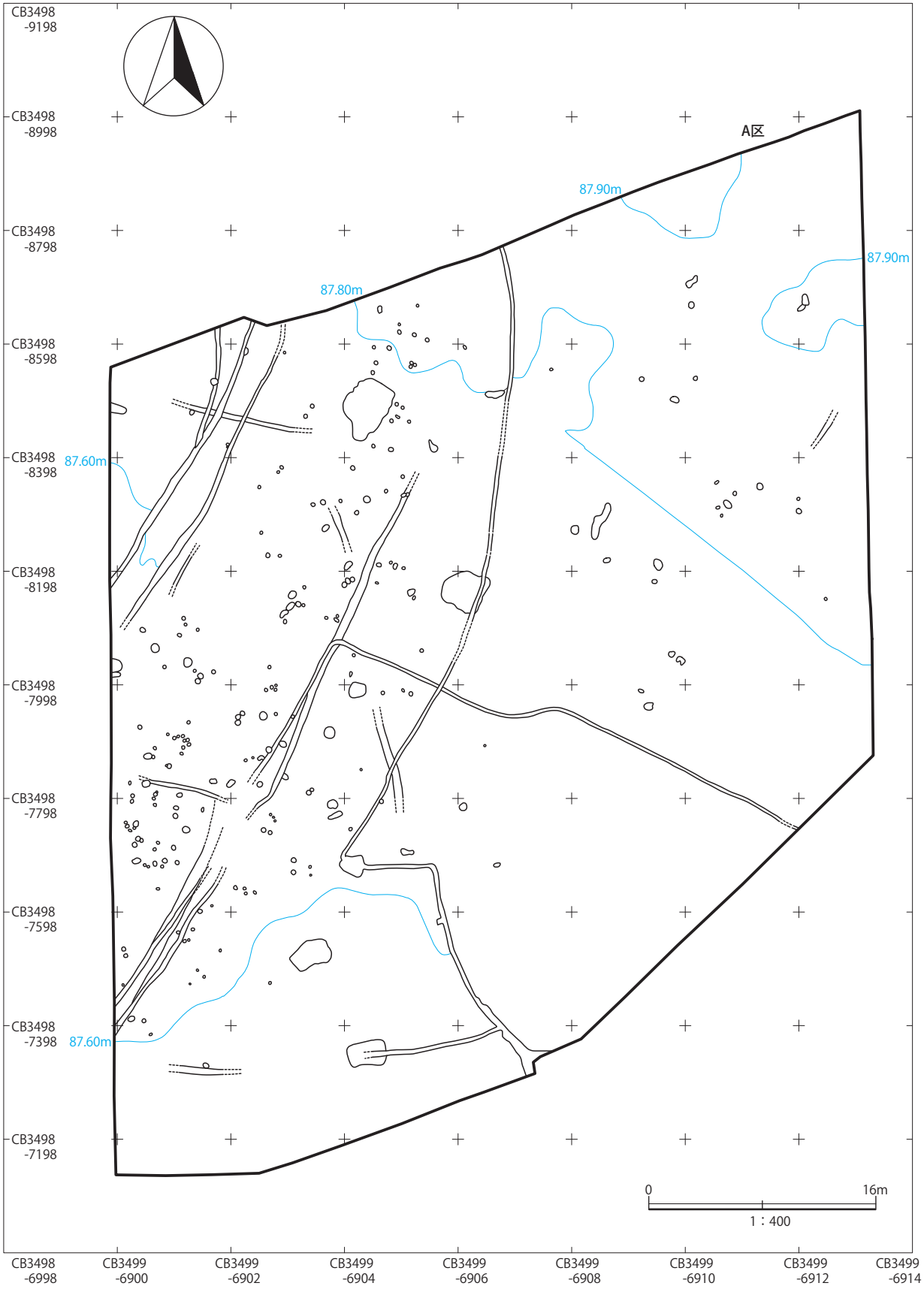
(4) 石製品（第 26 図、表 8、写真図版 12）

30 は、ろう石製の石筆である。上下共に鉛筆状に使用した痕跡が確認でき、残存値は約 26mm を測る。石筆は、明治初期の西洋式教育制度の取り入れを行った時期と同時期に持ち込まれた（日本民具学会 1997）。本来、石板とセットで筆記用具として使用されていたと考えられている。

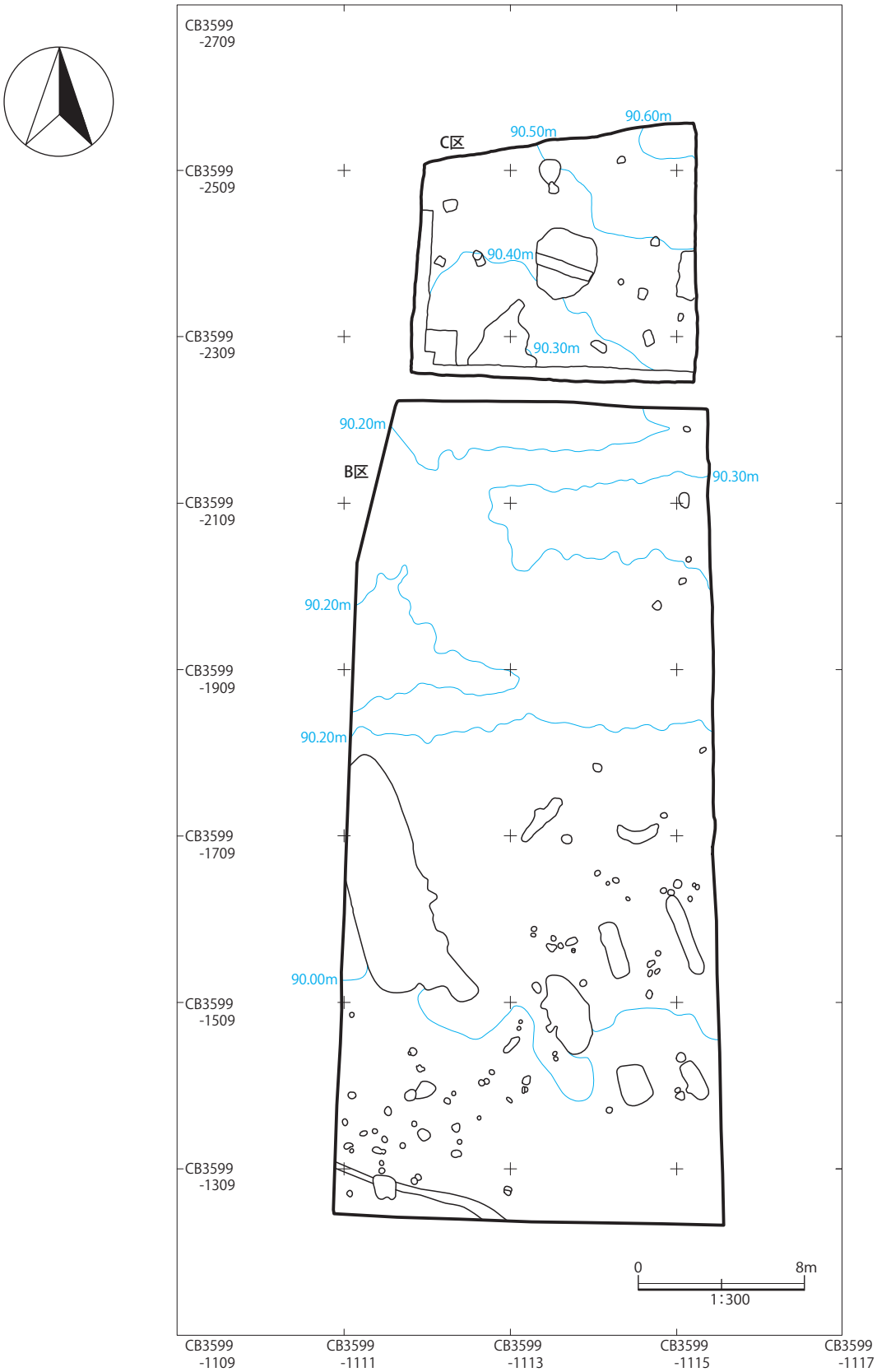
しかし、本遺跡では石板の出土は確認されていない。明治時代のもと考えられる。

引用・参考文献

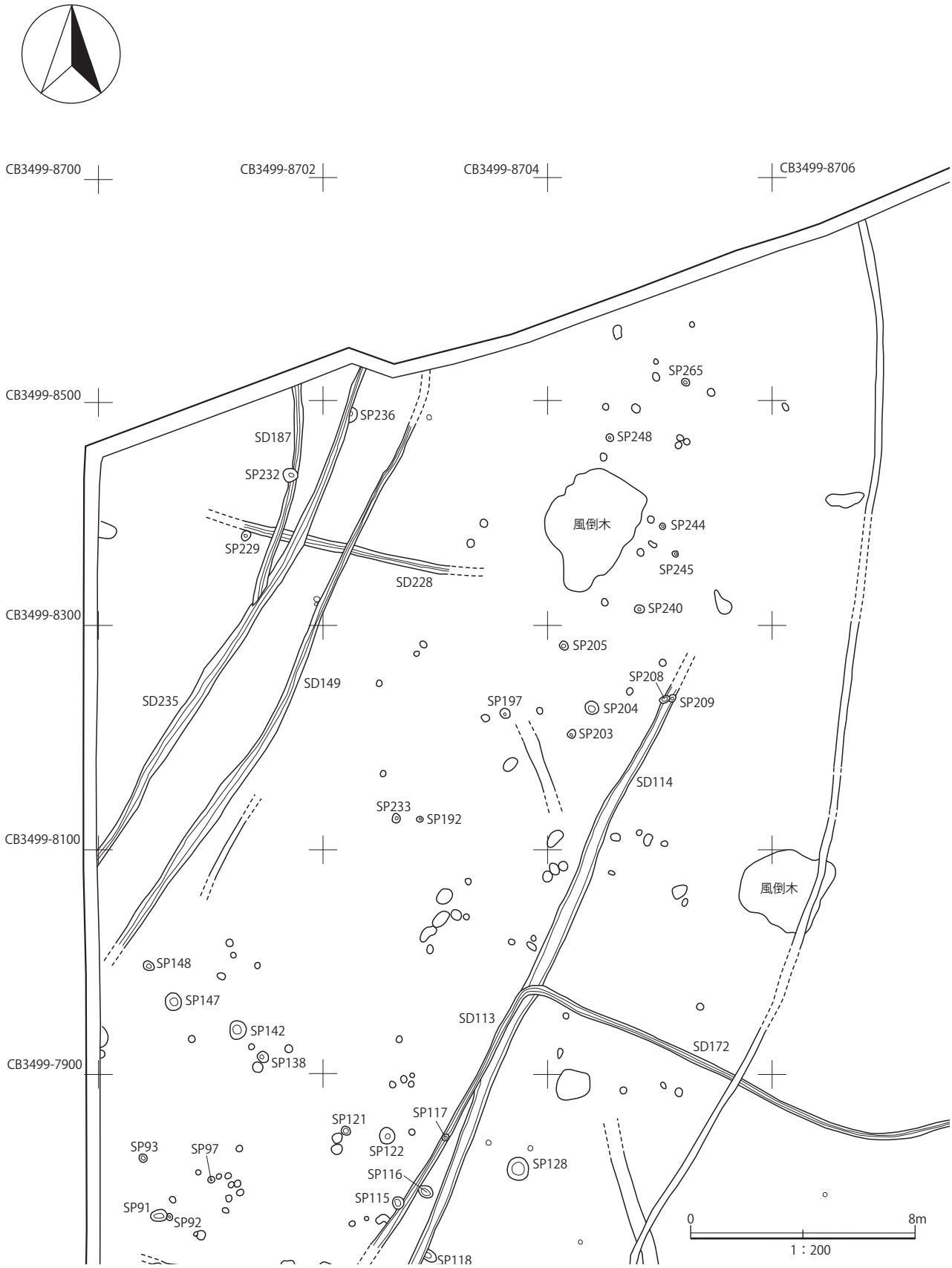
中橋掬泉　1958 『新撰　古銭大鑑』 大文館書店
日本民具学会　1997 『日本民具辞典』 株式会社ぎょうせい


CB3498
-9198
CB3498
-8998
CB3498
-8798
CB3498
-8598
CB3498
-8398
CB3498
-8198
CB3498
-7998
CB3498
-7798
CB3498
-7598
CB3498
-7398
CB3498
-7198
A区
87.90m
87.90m
87.80m
87.60m
87.60m
0
16m
1：400
CB3498
-6998
CB3499
-6900
CB3499
-6902
CB3499
-6904
CB3499
-6906
CB3499
-6908
CB3499
-6910
CB3499
-6912
CB3499
-6914

第４図　調査区全体図（1）

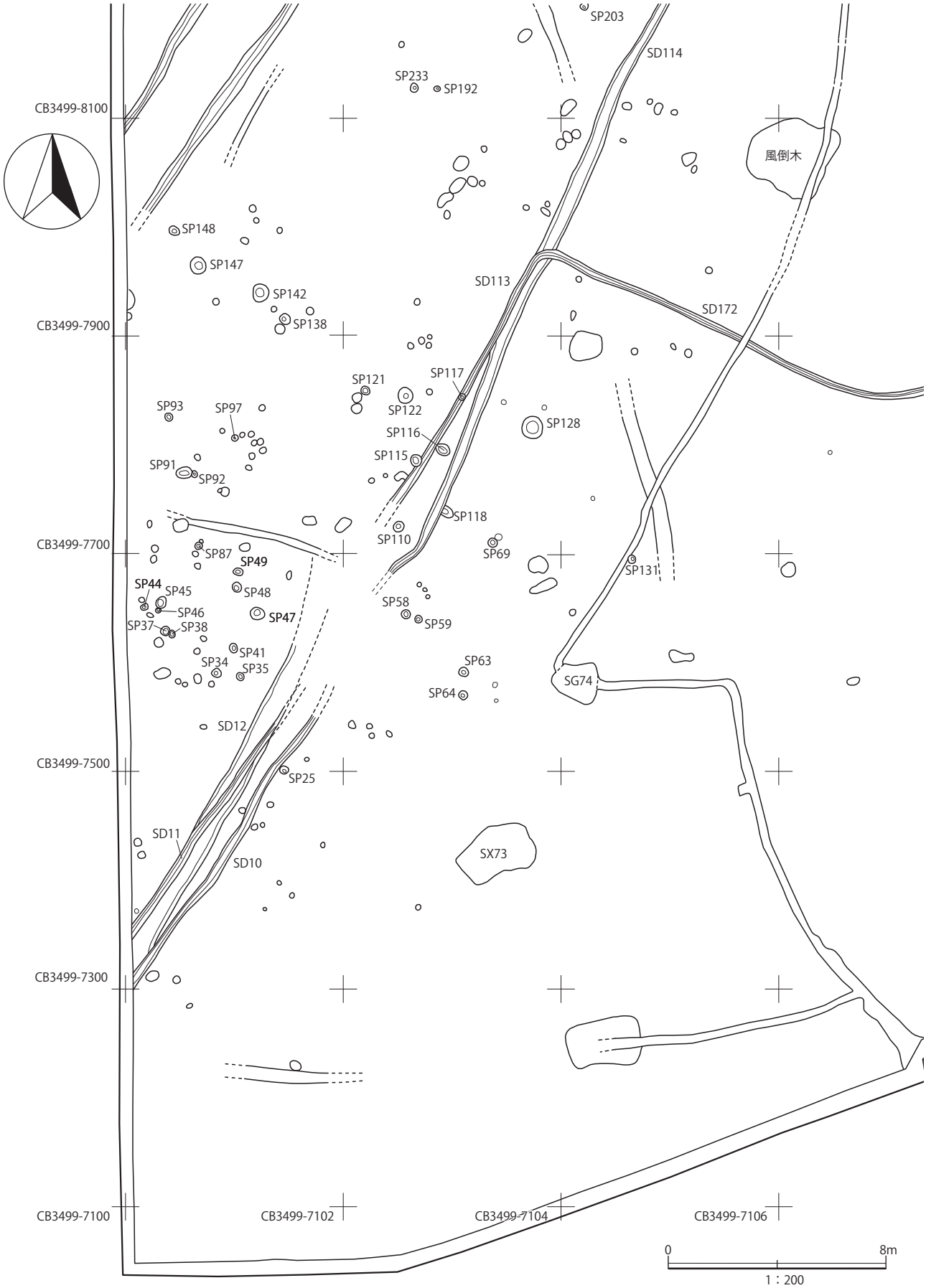

CB3599
-2709
CB3599
-2509
CB3599
-2309
CB3599
-2109
CB3599
-1909
CB3599
-1709
CB3599
-1509
CB3599
-1309
CB3599
-1109
CB3599
-1111
CB3599
-1113
CB3599
-1115
CB3599
-1117
C区
B区
90.60m
90.50m
90.40m
90.30m
90.20m
90.30m
90.20m
90.20m
90.00m
0
8m
1:300

第 5 図　調査区全体図（2）



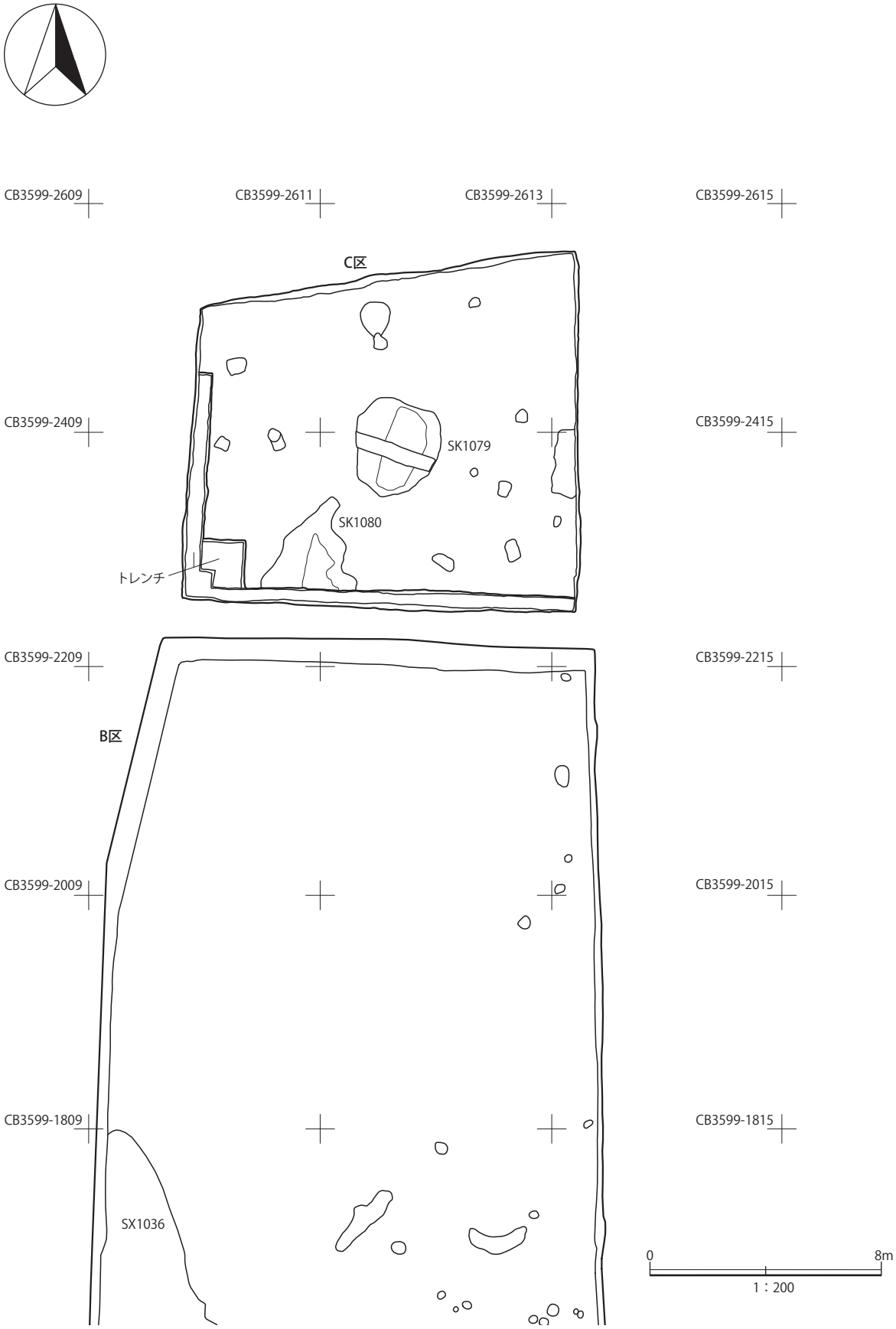
第 6 図　A 区遺構配置詳細図（1）

第７図　A 区遺構配置詳細図（2）

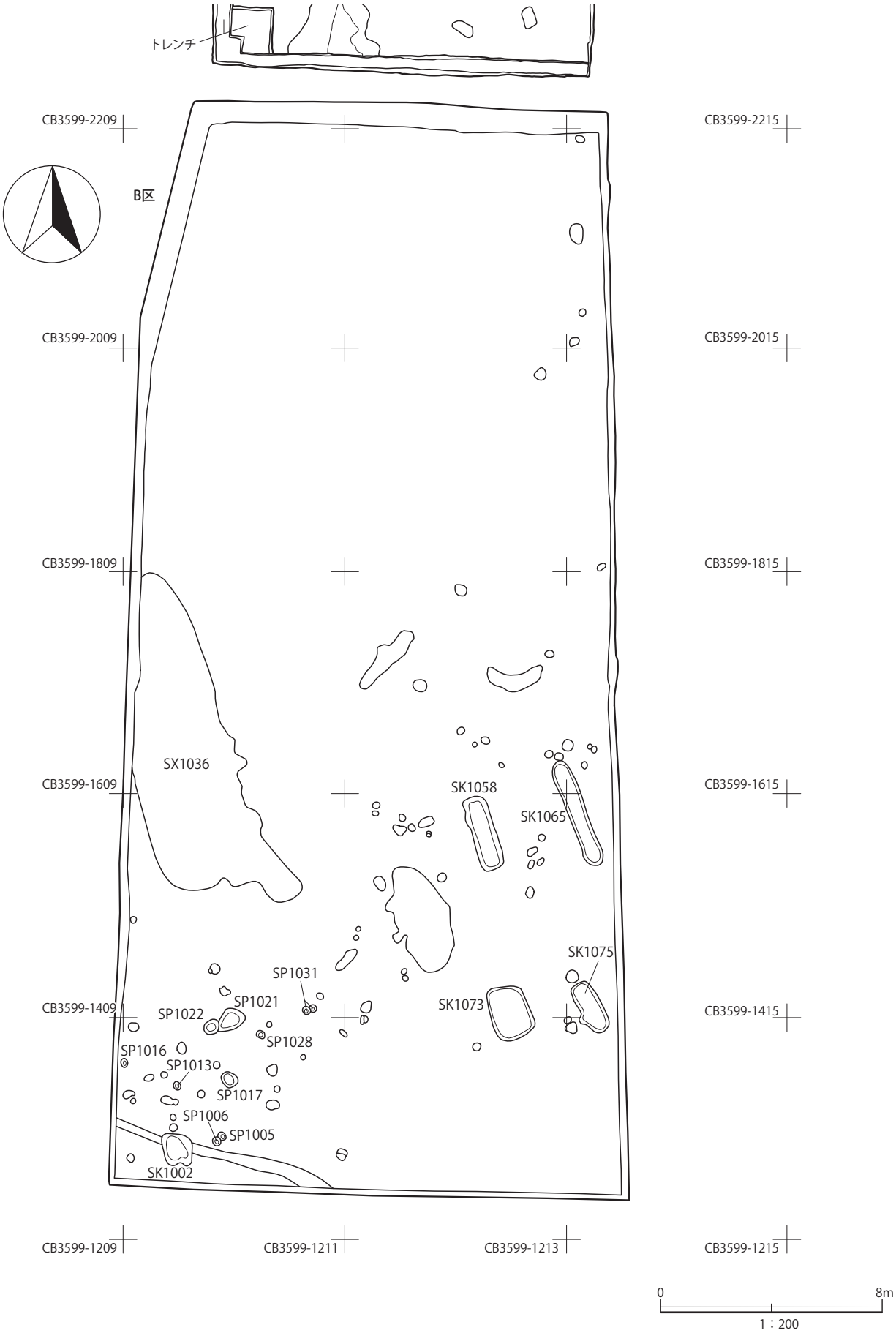


第 8 図　A 区遺構配置詳細図（3）

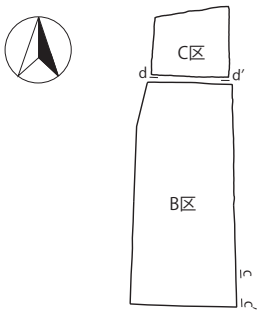
第 9 図　A 区遺構配置詳細図（4）

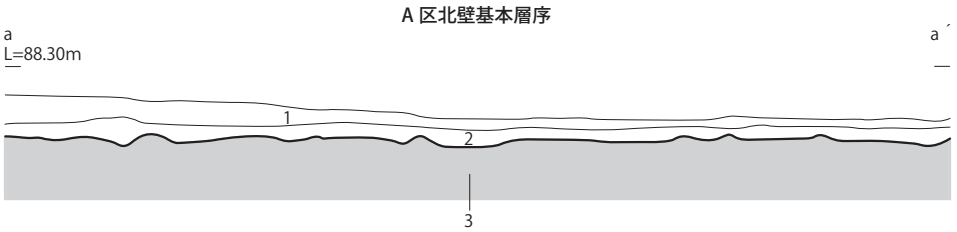


第 10 図　B･C 区遺構配置詳細図（1）



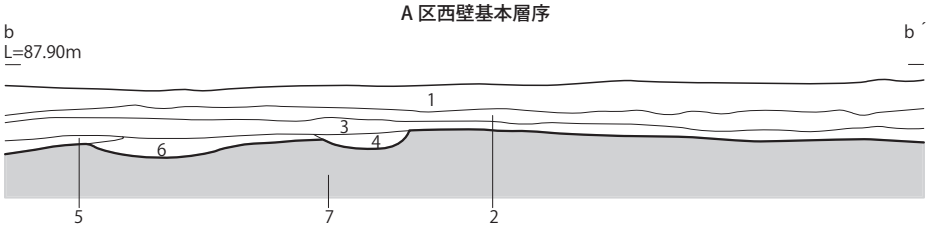
第 11 図　B・C 区遺構配置詳細図（2）





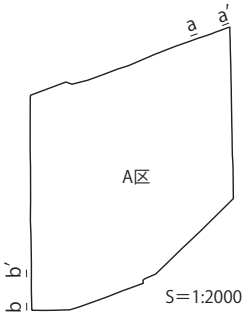
A 区北壁基本層序

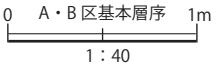
1　10YR3/1 黒褐色シルト（耕作土）
2　10YR2/1 黒色シルト　硬くしまる。
3　10YR5/8 黄褐色粘土（地山）



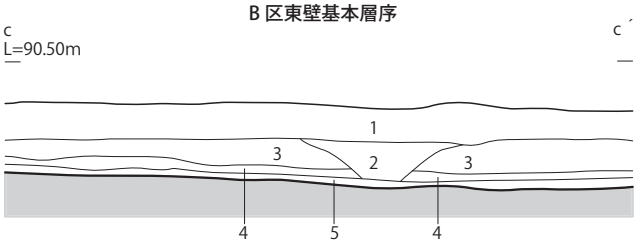
A 区西壁基本層序

1　10YR2/2 黒褐色シルト（耕作土）
2　10YR1.7/1 黒色シルト
3　10YR2/1 黒色シルト　硬くしまる。
4　2.5YR1.7/1 赤黒色シルト
5　10YR2/3 黒褐色シルト
6　7.5YR2/3 黒褐色シルト
7　2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト（地山）



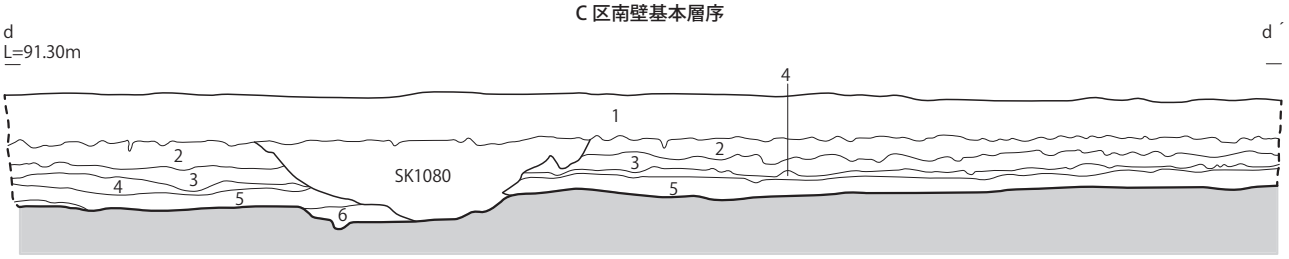


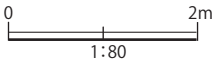
第 12 図　基本層序位置図



B 区基本層序

1	10YR2/1 黒色シルト	磁器片が混じる。しまり弱く、柔らかい。耕作土。
2	10YR2/1 黒色シルト	10YR3/2 黒褐色シルトの小ブロックが極少量混じる。
3	10YR1.7/1 黒色シルト	しまり弱く柔らかい。黒ボク土。
4	10YR2/3 暗褐色シルト	しまるが柔らかい。
5	10YR3/3 暗褐色シルト	しまるが柔らかい。

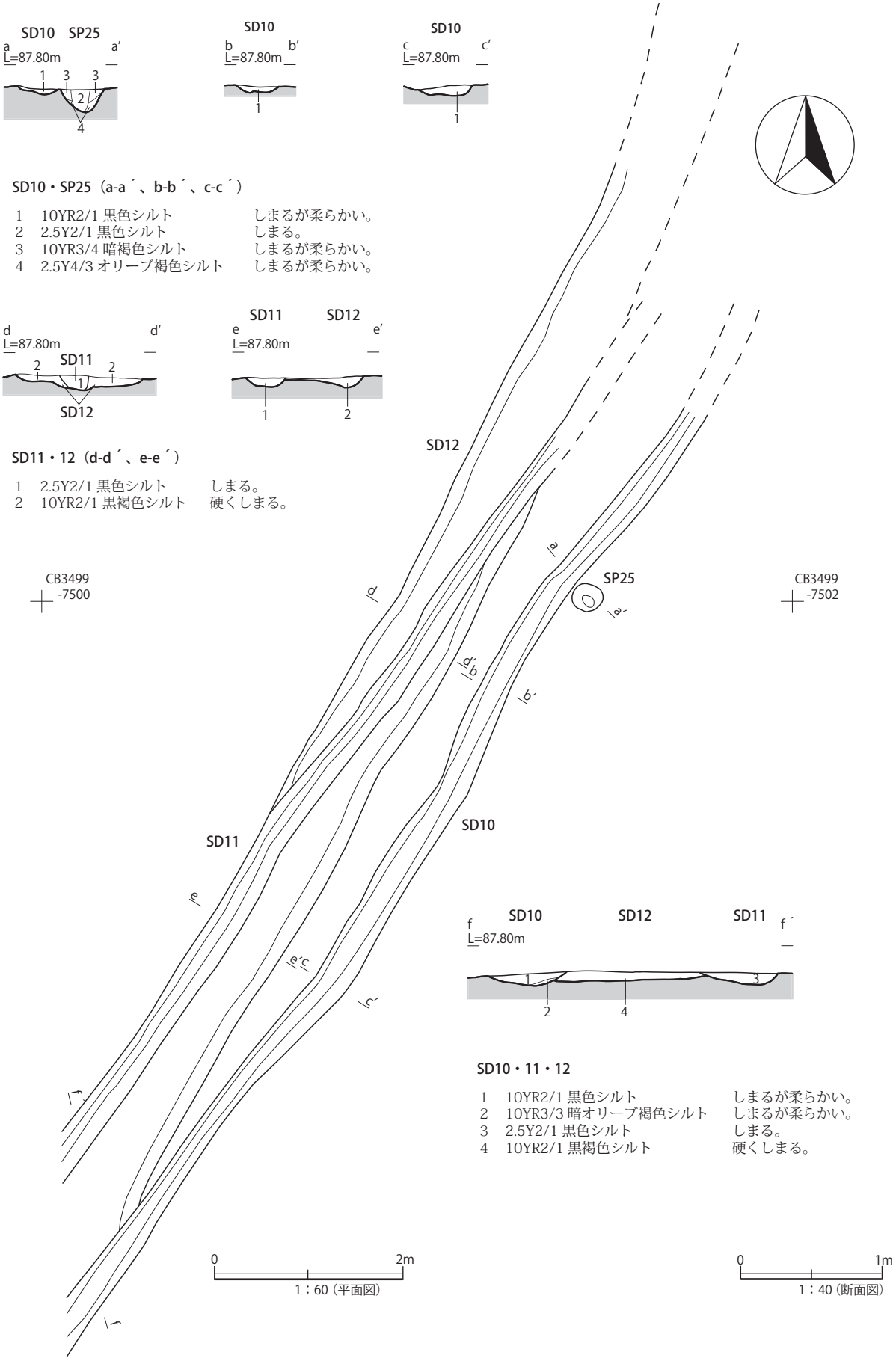




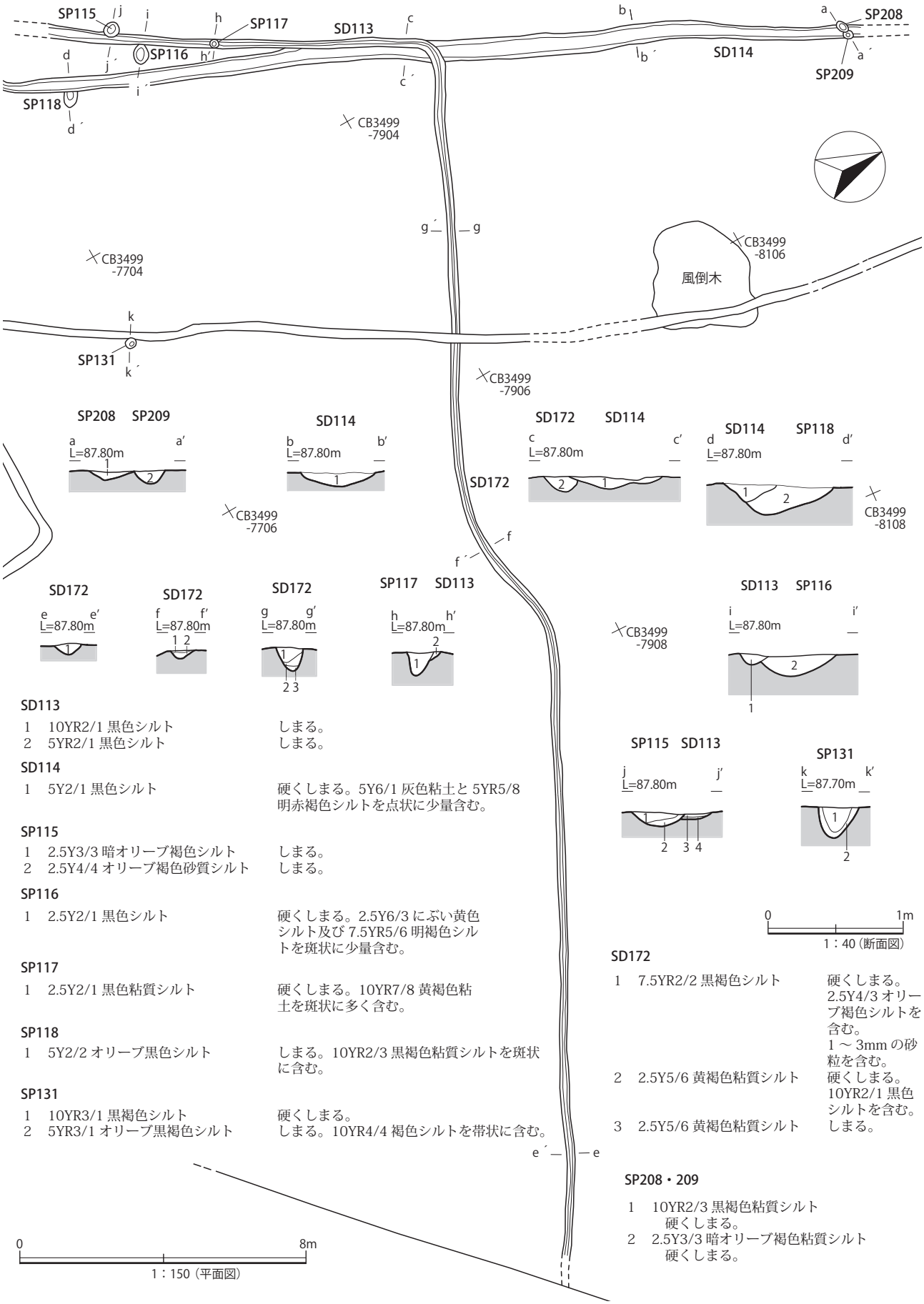
C 区南壁基本層序

1	5YR2/1 黒褐色細砂まじり	しまり中、粘性弱。耕作土。上部が乾燥し軋裂。孔隙が多いため、脆く崩れやすい。軽度の撹乱を受ける。中部は湿り気があり、しまりもややある。下部が孔隙（2 ～ 10mm）が多くみられる。土中に 0.2 ～ 10mm 程の褐鉄を含む。腐植程度は、根や茎が残る程度。細砂は均一に散っている。層界は不規則な波状だが、一部均一な波状が残存する。層間は 3 ～ 4 cm 判然である。
2	7.5YR1.7/1 黒色細砂まじりシルト・黒ボク	しまりやや弱。粘性弱。黒ボク土。湿り気強。 1 ～ 10mm 強の孔隙あり。一部細砂が混じる。腐植は根が少量残る程度。0.2 ～ 1 mm 程の褐鉄を多く含む。 2 ～ 10mm 程のものは含むが少量。層界は不規則な凸凹の形状だが、一部均一な波状もある。下部がグライ化しており、層界が漸変である（下方 3 ～ 6 cm）。
3	7.5YR3/4 暗褐色細砂まじりシルト	しまり強。粘性やや強。黒ボクグライ土。漸位層。湿り気強。 2 ～ 10mm 程の孔隙有。孔隙内に黒色土が残る。褐鉄は 0.2 ～ 0.5mm 程で、全体に散る。層界は不規則で凹凸有。下部に漸変。
4	7.5YR5/8 明褐色軽石まじり細砂シルト	しまり強。粘性中。漸変（層界）で上部にグライ化した黒ボク土が混じる。部分的に褐鉄が集中し、斑紋を含む。形状は不定形な円形。下部に褐鉄の集積あり。
5	10YR6/8 明黄褐色シルト	混じり細砂しまり強。粘性中。湿り気多。10 ～ 50mm 程度の孔隙が全体に散る。層界はやや判然としている。形状は平坦に近い。土中には褐鉄が斑状に散る。
6	2.5YR7/3 浅黄色細砂まじり粘土	下部に帯状に褐鉄が集積している。5 の鉄が溶解し、層界で混じる。疑似畦畔。孔隙は 2 mm のものが少量有。

第 13 図　A ～ C 区基本層序



第 14 図　SD10・11・12 溝跡、SP25 柱穴



SD113

1　10YR2/1 黒色シルト　しまる。
2　5YR2/1 黒色シルト　しまる。

SD114

1　5Y2/1 黒色シルト　硬くしまる。5Y6/1 灰色粘土と 5YR5/8 明赤褐色シルトを点状に少量含む。

SP115

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　しまる。
2　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト　しまる。

SP116

1　2.5Y2/1 黒色シルト　硬くしまる。2.5Y6/3 にぶい黄色シルト及び 7.5YR5/6 明褐色シルトを斑状に少量含む。

SP117

1　2.5Y2/1 黒色粘質シルト　硬くしまる。10YR7/8 黄褐色粘土を斑状に多く含む。

SP118

1　5Y2/2 オリーブ黒色シルト　しまる。10YR2/3 黒褐色粘質シルトを斑状に含む。

SP131

1　10YR3/1 黒褐色シルト　硬くしまる。
2　5YR3/1 オリーブ黒褐色シルト　しまる。10YR4/4 褐色シルトを帯状に含む。

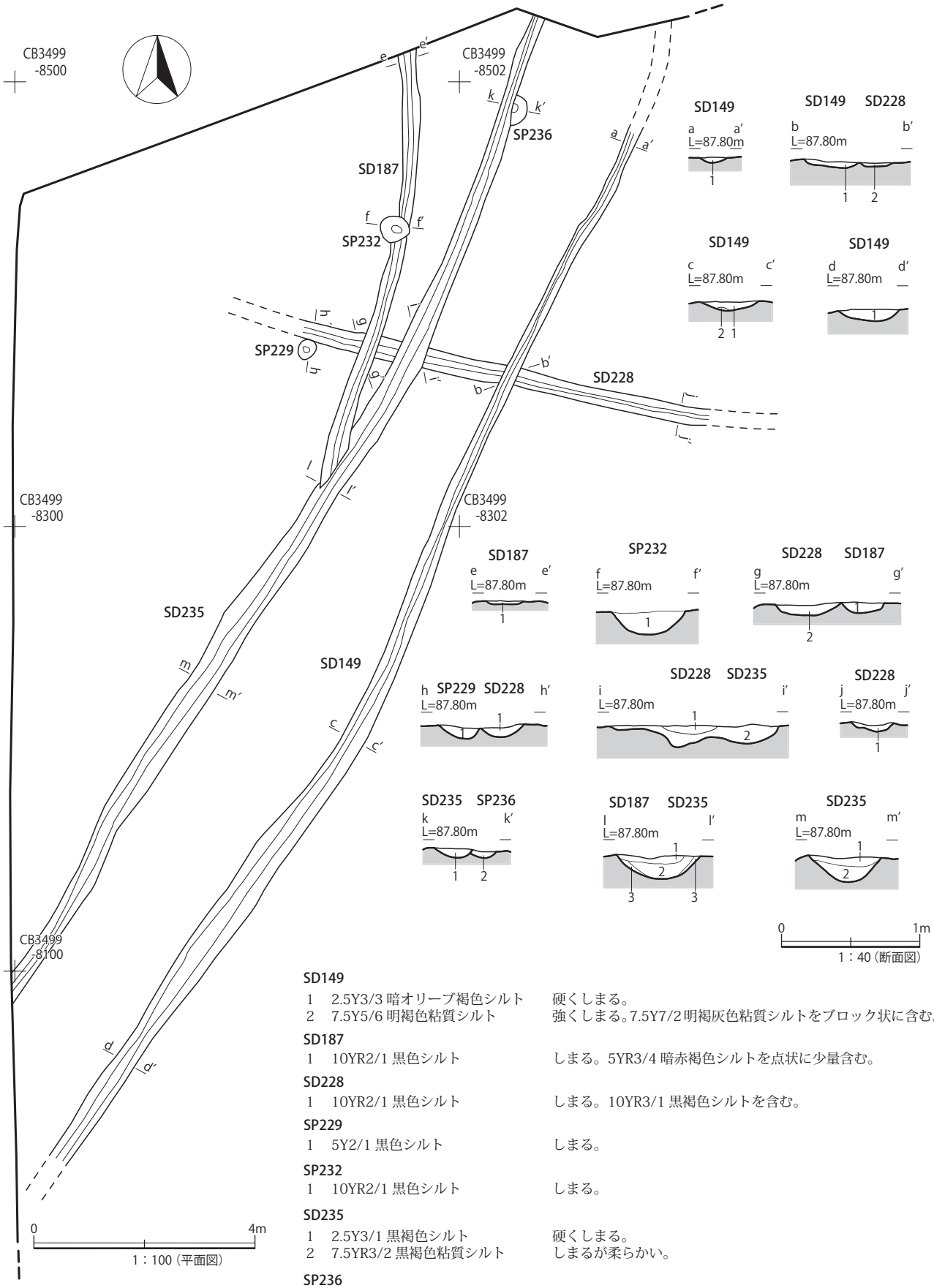
SD172

1　7.5YR2/2 黒褐色シルト　硬くしまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを含む。1 ～ 3mm の砂粒を含む。
2　2.5Y5/6 黄褐色粘質シルト　硬くしまる。10YR2/1 黒色シルトを含む。
3　2.5Y5/6 黄褐色粘質シルト　しまる。

SP208・209

1　10YR2/3 黒褐色粘質シルト　硬くしまる。
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト　硬くしまる。

第 15 図　SD113・114・172 溝跡、SP115 ～ 118・131・208・209 柱穴



SD149

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　　硬くしまる。
2　7.5Y5/6 明褐色粘質シルト　　強くしまる。7.5Y7/2 明褐灰色粘質シルトをブロック状に含む。

SD187

1　10YR2/1 黒色シルト　　しまる。5YR3/4 暗赤褐色シルトを点状に少量含む。

SD228

1　10YR2/1 黒色シルト　　しまる。10YR3/1 黒褐色シルトを含む。

SP229

1　5Y2/1 黒色シルト　　しまる。

SP232

1　10YR2/1 黒色シルト　　しまる。

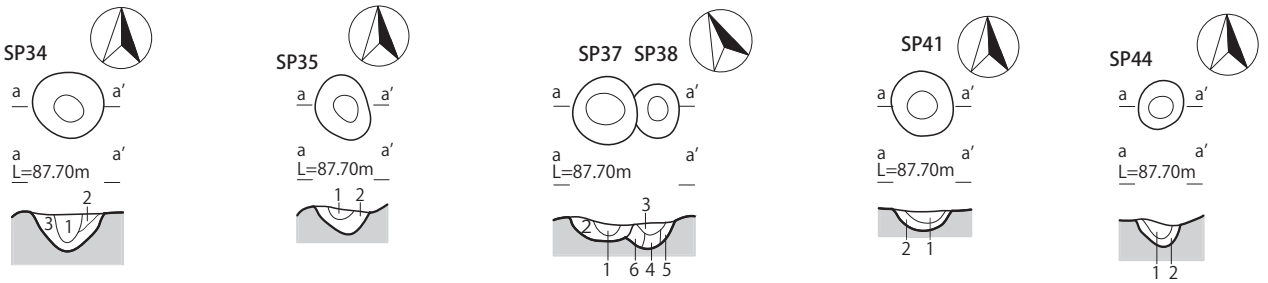
SD235

1　2.5Y3/1 黒褐色シルト　　硬くしまる。
2　7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト　　しまるが柔らかい。

SP236

1　10YR3/2 黒褐色シルト　　硬くしまる。

第 16 図　SD149・187・228・235 溝跡、SP229・232・236 柱穴



SP34

1　5Y2/1 黒色シルト　しまる。
2　5Y3/2 オリーブ黒色シルト　しまる。
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　硬くしまる。

SP35

1　5Y2/1 黒色シルト　しまる。
2　2.5Y4/1 黄灰色シルト　硬くしまる。

SP37・38

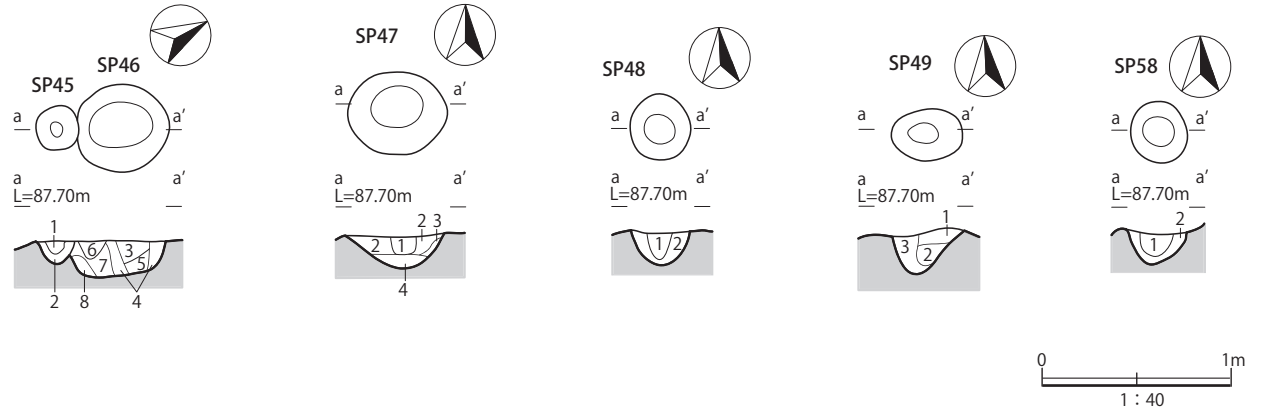
1　5Y2/1 黒色シルト　しまる。
2　2.5Y4/1 黄灰色シルト　硬くしまる。
3　5Y2/1 黒色シルト　しまる。
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　しまる。
5　2.5Y3/1 黒褐色シルト　しまる。
6　10YR4/4 褐色シルト　しまる。

SP41

1　5Y2/1 黒色シルト　しまる。
2　10YR4/4 褐色シルト　硬くしまる。

SP44

1　2.5Y3/1 黒褐色シルト　しまる。
2　10YR3/4 暗褐色シルト　しまる。



SP45・46

1　10YR3/1 黒褐色シルト　しまる。
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　しまる。
3　2.5Y2/1 黒色シルト　しまるが柔らかい。
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　しまる。
5　10YR3/4 暗褐色シルト　しまる。
6　10YR4/1 褐灰色シルト　しまるが柔らかい。
7　10YR2/3 黒褐色シルト　しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
8　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまる。2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。

SP47

1　10YR2/1 黒色シルト　しまる。
2　10YR4/1 褐灰色シルト　しまる。
3　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまる。
4　10YR5/6 黄褐色シルト　しまるが柔らかい。

SP48

1　10YR3/1 黒褐色シルト　しまる。1 ～ 3mm の砂粒を全体に少量含む。
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　しまる。10YR5/6 黄褐色シルトを斑状に含む。

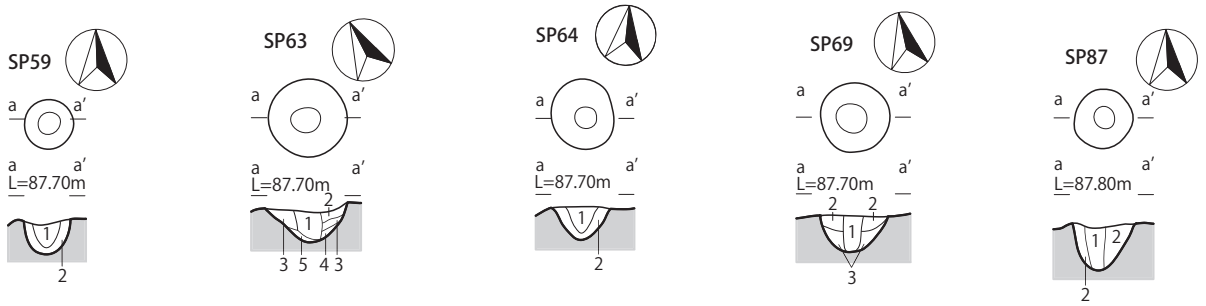
SP49

1　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト　しまる。
2　2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト　しまる。10YR2/1 黒色シルトを斑状に少量含む。
3　2.5Y2/1 黒色粘質シルト　しまるが柔らかい。

SP58

1　2.5Y2/1 黒色シルト　しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に含む。
2　2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト　しまる。2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルトを斑状に含む。

第 17 図　SP34・35・37・38・41・44・45・47 ～ 49・58 柱穴



SP59

1	2.5Y2/1 黒色シルト	硬くしまる。
2	2.5Y5/6 黄褐色シルト	しまる。2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルトを斑状に含む。

SP63

1	2.5Y3/1 黒褐色シルト	しまる。
2	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト	硬くしまる。
3	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	硬くしまる。
4	10YR5/8 黄褐色シルト	しまるが柔らかい。
5	10YR3/4 暗褐色シルト	しまるが柔らかい。

SP64

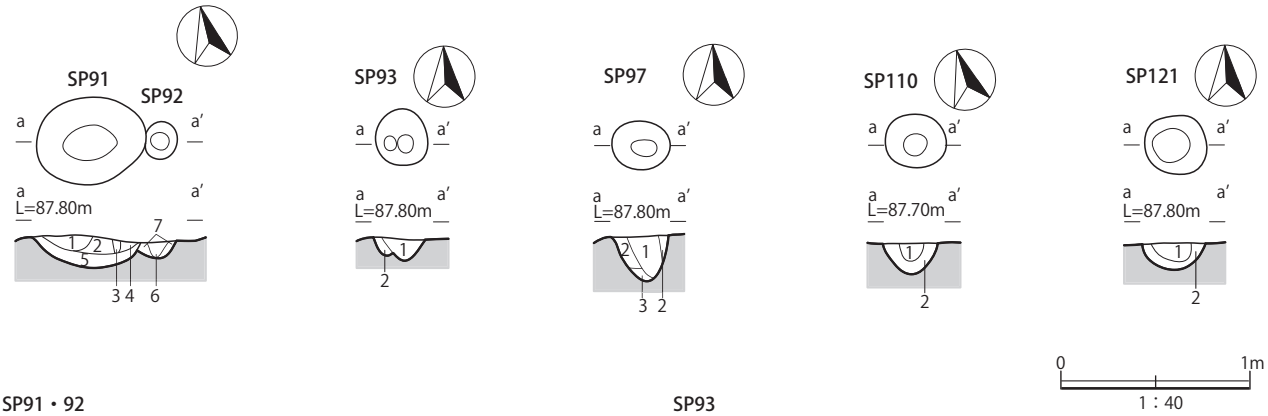
1	10YR2/2 黒褐色シルト	しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
2	10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト	硬くしまる。2.5Y5/6 黄褐色シルトを斑状に多く含む。

SP69

1	5Y2/2 オリーブ黒色シルト	しまる。10YR3/1 黒褐色シルトを斑状に含む。
2	10YR3/3 暗褐色粘質シルト	しまるが柔らかい。
3	2.5Y5/6 黄褐色シルト	しまる。2.5Y3/1 黒褐色シルトをブロック状に含む。

SP87

1	10YR2/2 黒褐色シルト	しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
2	10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト	硬くしまる。2.5Y5/6 黄褐色シルトを斑状に多く含む。



SP91・92

1	7.5YR2/1 黒色シルト	しまるが柔らかい。
2	10YR3/3 暗褐色シルト	しまる。
3	10YR3/1 黒褐色粘質シルト	しまる。
4	10YR4/4 褐色シルト	しまる。
5	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト	硬くしまる。
6	10YR2/1 黒色シルト	しまる。
7	10YR4/4 褐色シルト	しまる。

SP93

1	10YR3/1 黒褐色シルト	しまる。
2	10YR4/4 褐色シルト	しまる。

SP97

1	2.5Y3/1 黒褐色シルト	しまる。
2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト	しまる。
3	2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質シルト	しまる。2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトを斑状に含む。

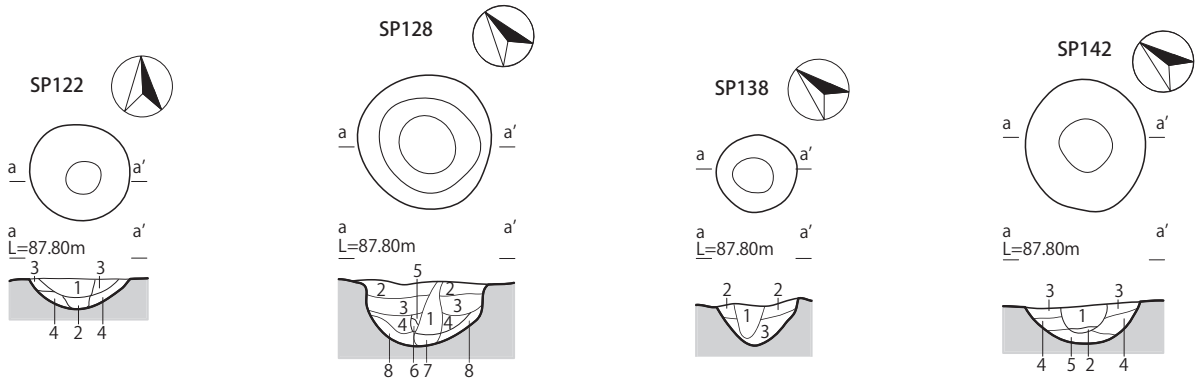
SP110

1	10YR2/1 黒色シルト	しまる。
2	10YR4/4 褐色シルト	しまる。

SP121

1	2.5Y2/1 黒色シルト	硬くしまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
2	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト	しまる。

第 18 図　SP59・63・64・69・87・91 ～ 93・97・110・121 柱穴



SP122

1	2.5Y2/1 黒色シルト	しまる。
2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト	2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
3	10YR2/1 黒褐色シルト	硬くしまる。
4	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	しまる。2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルトを斑状に含む。

SP128

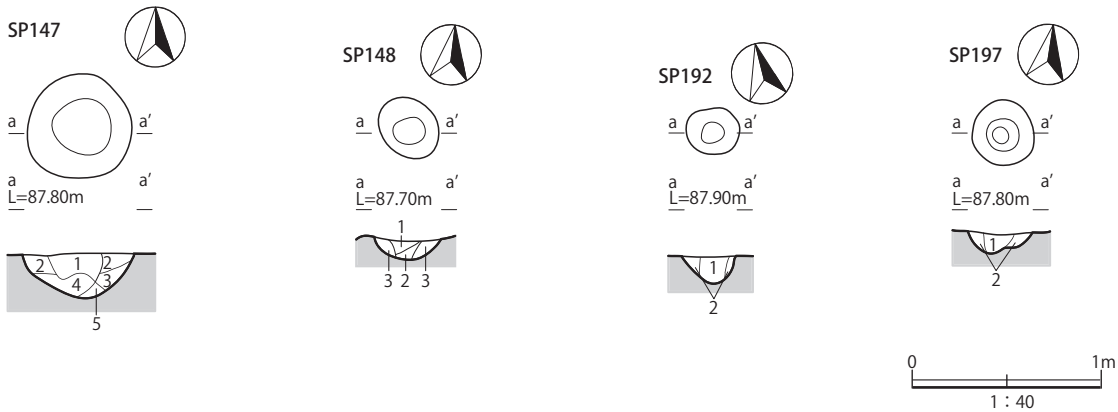
1	5YR2/1 黒褐色シルト	しまる。
2	10YR2/3 黒褐色シルト	しまる。
3	2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト	しまる。5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトを帯状及び斑状に多く含む。
4	10YR5/8 黄褐色シルト	しまる。2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトを斑状に多く含む。
5	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	しまる。
6	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト	しまる。
7	2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト	しまるが柔らかい。5YR2/1 黒褐色シルトをブロック状に含む。
8	10YR5/6 黄褐色シルト	しまる。

SP138

1	5Y3/1 オリーブ黒色シルト	硬くしまる。
2	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	しまる。
3	10YR5/6 黄褐色シルト	硬くしまる。

SP142

1	10YR2/2 黒褐色シルト	しまる。
2	10YR4/2 灰黄褐色シルト	しまり弱く柔らかい。
3	10YR4/4 褐色シルト	しまるが柔らかい。
4	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト	しまる。
5	10YR5/6 黄褐色シルト	しまる。



SP147

1	10YR2/1 黒色シルト	硬くしまる。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	しまる。2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトを斑状に含む。
3	10YR3/2 黒褐色シルト	しまる。
4	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	しまるが柔らかい。
5	2.5Y5/6 黄褐色シルト	しまり弱く柔らかい。

SP148

1	10YR2/2 黒褐色シルト	しまるが柔らかい。
2	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	しまるが柔らかい。
3	10YR2/3 黒褐色シルト	しまるが柔らかい。

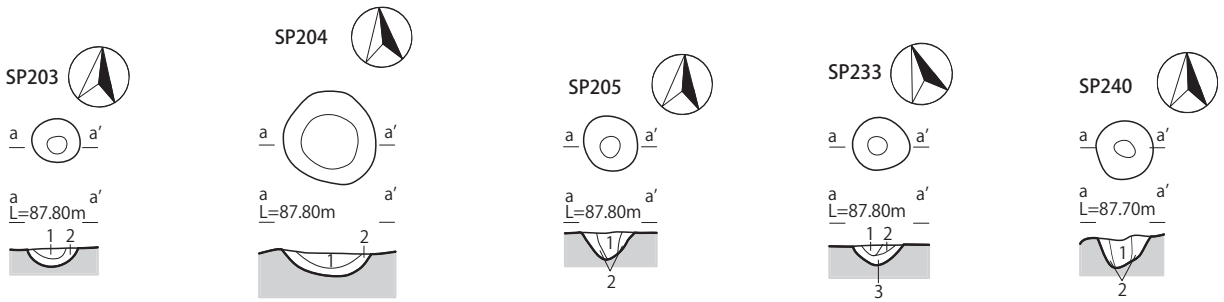
SP192

1	10YR2/1 黒色シルト	しまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に少量含む。
2	10YR4/4 暗褐色シルト	しまるが柔らかい。

SP197

1	10YR2/1 黒色シルト	しまる。
2	10YR3/3 暗褐色シルト	しまるが柔らかい。

第 19 図　SP122・128・138・142・147・148・192・197 柱穴



SP203

1　10YR2/1 黒色シルト　しまる。
2　10YR4/2 灰黄褐色シルトしまる。　10YR3/4 暗褐色シルトを斑状に少量含む。

SP204

1　2.5Y3/1 褐色シルト　硬くしまる。
2　10YR2/3 黒褐色シルト　しまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。

SP205

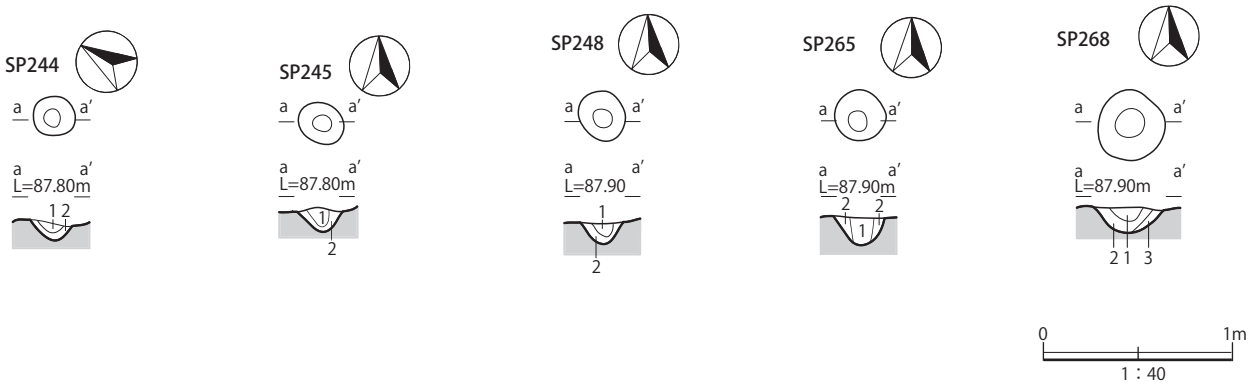
1　2.5Y2/1 黒色シルト　硬くしまる。
2　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト　しまる。

SP233

1　10YR2/1 黒色シルト　硬くしまる。
2　2.5YR2/2 黒褐色シルト　しまる。
3　2.5YR3/3 暗オリーブ褐色シルト　しまる。

SP240

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　硬くしまる。
2　10YR4/4 褐色シルト　しまる。



SP244

1　2.5Y3/1 黒褐色シルト　硬くしまる。
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト　しまるが柔らかい。

SP245

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト　硬くしまる。
2　10YR4/4 褐色砂質シルト　しまる。

SP248

1　10YR2/2 黒褐色シルト　しまるが柔らかい。
2　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまる。

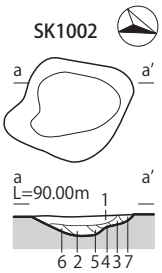
SP265

1　10YR3/1 黒褐色シルト　しまる。
2　2.5Y5/6 黄褐色シルト　しまる。

SP268

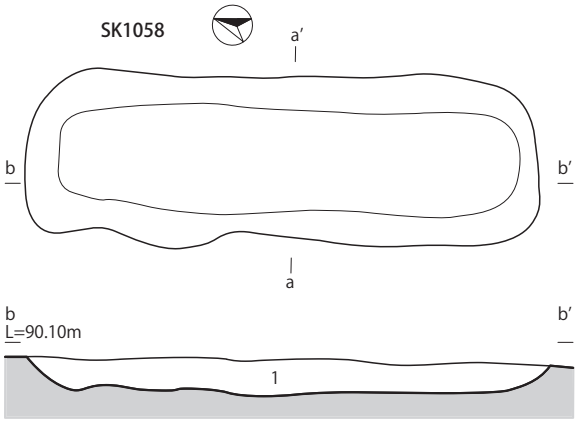
1　2.5Y3/1 黒褐色シルト　硬くしまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。
2　2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト　硬くしまる。2.5Y4/2 暗灰黄色シルトを斑状に多く含む。
3　2.5Y5/6 黄色褐色砂質シルト　硬くしまる。

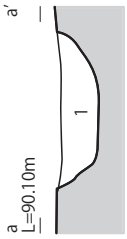
第 20 図　SP203 ～ 205・233・240・244・245・248・265・268 柱穴



SK1002

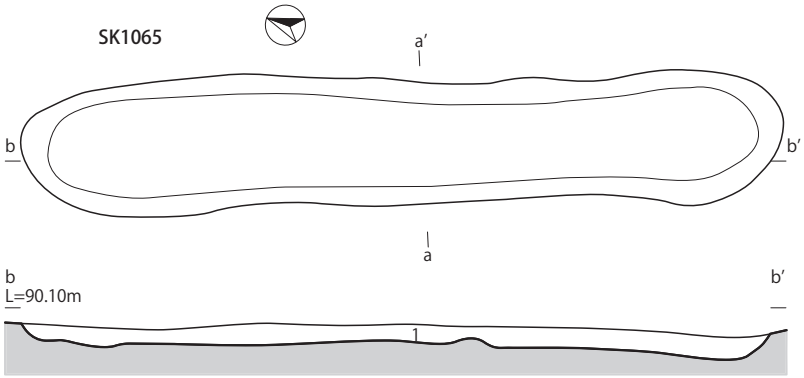
1　10YR1.7/1 黒色シルト
2　10YR2/1 黒色シルト
3　10YR2/2 黒褐色シルト　　10YR6/6 明黄褐色シルトの小ブロックが少量混じる。
4　10YR3/2 黒褐色シルト　　10YR6/6 明黄褐色シルトの小ブロックが少量混じる。
5　10YR2/2 黒褐色シルト
6　10YR2/1 黒色シルト
7　10YR2/1 黒色シルト

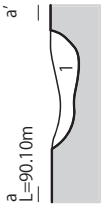




SK1058

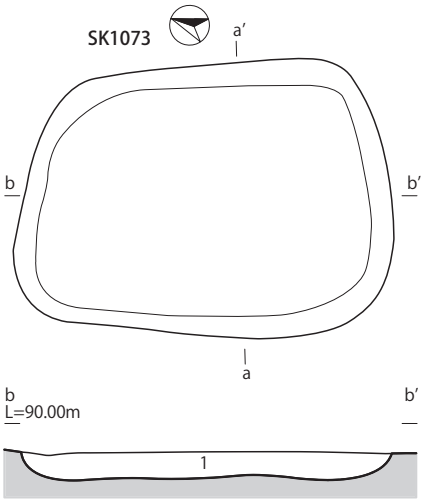
1　10YR1.7/1 黒色シルト　　10YR6/6 明黄褐色砂質シルトを多量に含む。

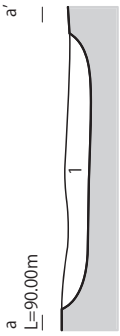


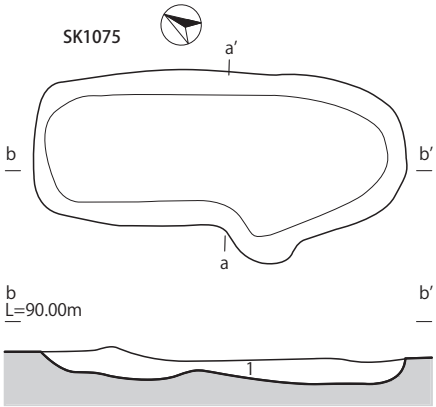


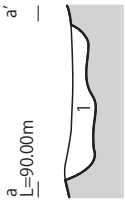
SK1065

1　10YR2/1 黒色シルト
10YR6/6 明黄褐色シルトの小ブロック（地山）を下層に極少量含む。







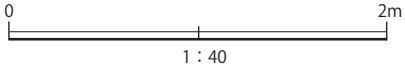


SK1075

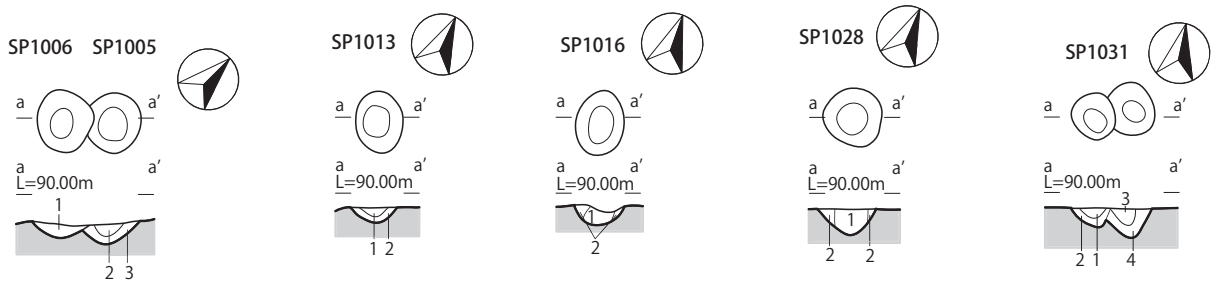
1　10YR1.7/1 黒色シルト　　10YR6/6 明黄褐色砂質シルト（地山）小塊を多く含む。

SK1073

1　10YR1.7/1 黒色シルト　　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（地山）の小ブロックが混じる。



第 21 図　SK1002・1058・1065・1073・1075 土坑



SP1005・1006

1　10YR2/2 黒褐色シルト
2　10YR3/4 暗褐色シルト
3　10YR3/2 黒褐色シルト

SP1013

1　10YR2/2 黒褐色シルト　5YR5/8 明赤褐色シルトの小ブロックが極少量混じる。
2　10YR3/3 明褐色シルト

SP1016

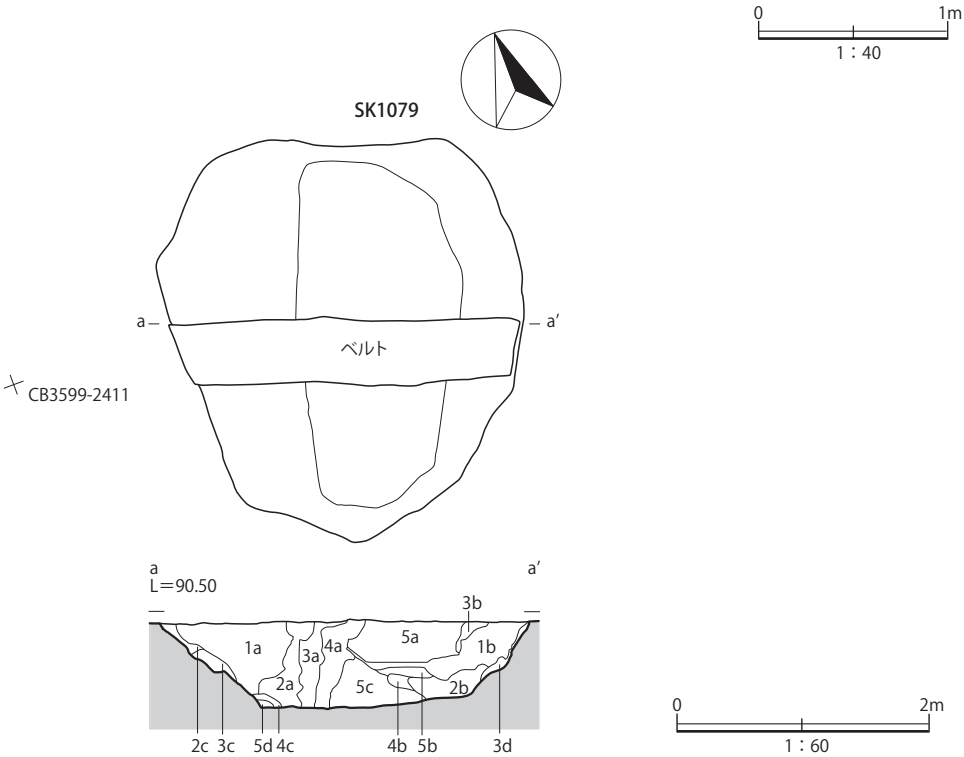
1　10YR2/2 黒褐色シルト　5YR5/8 明赤褐色シルトの小ブロックが極少量混じる。
2　10YR3/3 明褐色シルト

SP1028

1　10YR2/1 黒色シルト　5YR5/8 明赤褐色シルトの小ブロックが極少量混じる。
2　10YR2/3 黒褐色シルト

SP1031

1　10YR2/2 黒褐色シルト
2　10YR3/3 暗褐色シルト　5YR5/8 明褐色シルトの小ブロックが極少量混じる。
3　10YR1.7/1 黒色シルト
4　10YR2/3 黒褐色シルト



SK1079

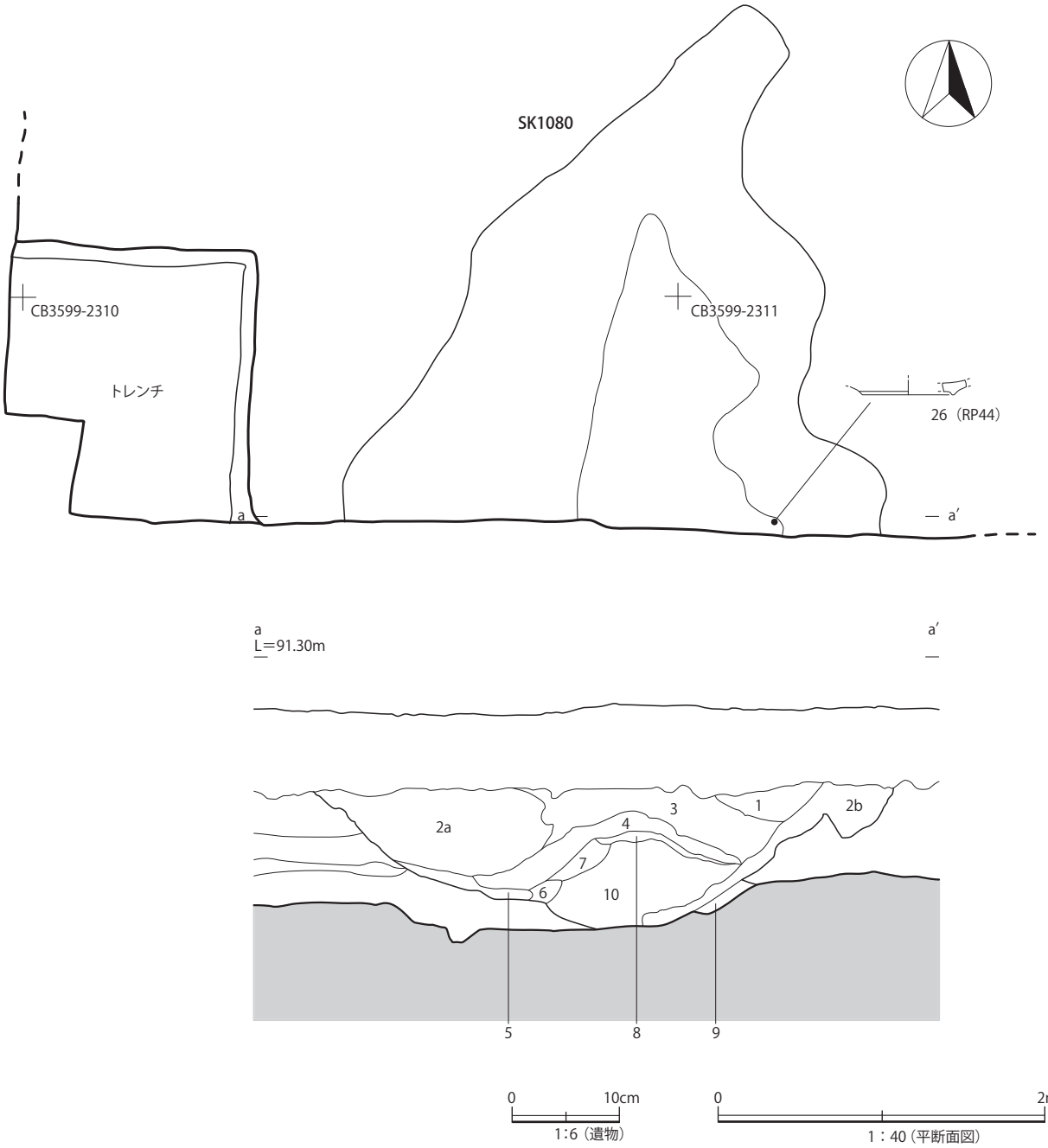
1a	7.5YR1.7/1 黒色シルト	しまり弱。孔隙（筒状）。下部に粒状の褐鉄が少量散らばる。細砂まじりのシルト（粘性弱）。
1b	7.5YR1.7/1 黒色細砂シルト	孔隙内に細砂が入り込む。下部に小粒状の褐鉄が混じる。5a ～ b、4a に接するところまで土が入り込んでいる。
2a	10YR2/1 黒色細砂シルト	しまり弱、粘性やや弱い。下部 3 側に褐鉄の集積がみられる。
2b	10YR4/3 にぶい黄褐色細砂シルト	粒状の褐鉄を少量含む。（5c 側に集中部あり）
2c	7.5YR3/3 暗褐色細砂シルト	しまり弱、粘性あり。下部に粒状褐鉄を含む。
3a	10YR2/1 黒色シルト	下部に斑状の褐鉄集積がみられる。孔隙（筒状）内に黒色土が入り込んでいる。2 が混じる。漸位層
3b	10YR3/2 黒褐色細砂シルト	細砂シルトに黒色が混じる。小粒の褐鉄をまばらに含む。
3c	10YR3/4 暗褐色細砂シルト	下部に褐鉄の集積を含む。
3d	7.5YR5/6 明褐色細砂軽石シルト	しまり強、粘性弱。下部に 7.5 の YR5/6 明褐色土を含む。1b 側に黒色土を含む。その下部に褐鉄集積を含む。2b 付近になるにつれ、軽石を含むようになる。
4a	10YR4/6 褐色細砂軽石シルト	しまり強。粘性弱。5 側に褐鉄の集積と斑紋あり。孔隙内に黒色土が混じる。
4b	7.5YR4/4 褐色細砂軽石シルト	1b 側に褐鉄が集積する。
4c	10YR4/6 褐色細砂軽石シルト	下部に褐鉄集積あり。
5a	10YR8/3 浅黄橙白色粘土	しまりあり、粘性強。ヒビに黒色土が入り込む。斑状の褐鉄を 3 側に含む。3b 側に集積あり。
5b	10YR7/2 にぶい黄橙色白色粘土	粘土には細砂を含む。1b、2b 側に褐鉄の集積あり。中部には 1b の黒色土が混じる。
5c	7.5YR8/3 浅黄橙色細砂粘土	粘性強。3 側下部に褐鉄集積あり。上部に黒色土が入り込む。
5d	10YR8/4 黄橙色細砂粘土	上部に軽石を含む。褐鉄の集積あり。礫を多く含む。

第 22 図　SP1005・1006・1013・1016・1028・1031 柱穴、SK1079 倒木痕

表 3　柱穴観察表

※「>」＝ >A、A を切る。「<」＝ <B、B に切られる。

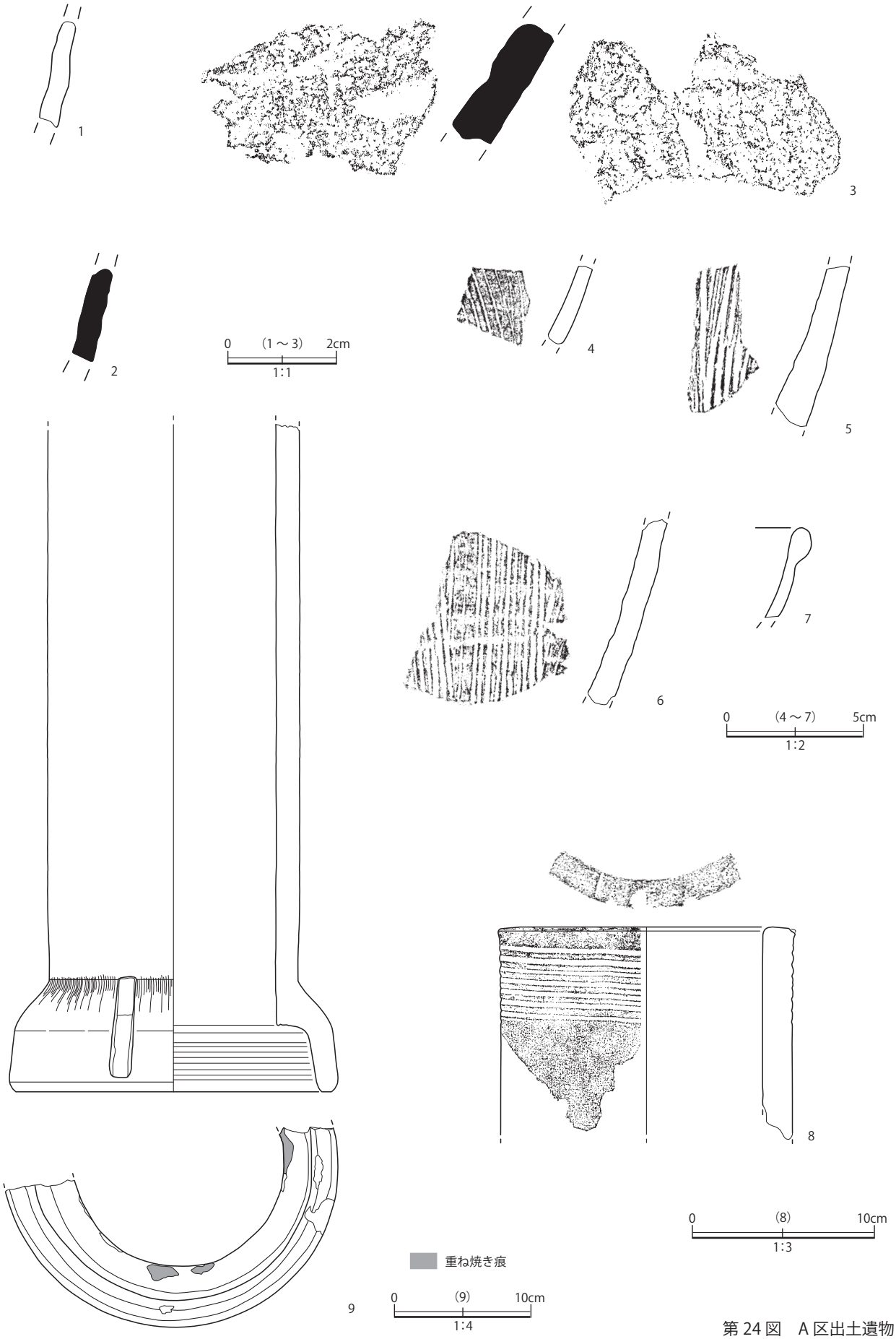
図版番号	遺構番号	地区	グリッド	計測値（cm/（）は残存値） 長径	短径	深さ	重複関係※	備考
14	SP25	A 区	CB3499-7501	33	30	16		
17	SP34	A 区	CB3499-7500	37	34	20		
	SP35	A 区	CB3499-7501	34	28	13		
	SP37	A 区	CB3499-7600	34	32	10	>SP38	
	SP38	A 区	CB3499-7600	26	(22)	16	<SP37	
	SP41	A 区	CB3499-7600	34	32	10		
	SP44	A 区	CB3499-7600	27	22	13		
	SP45	A 区	CB3499-7600	24	22	14	>SP46	
	SP46	A 区	CB3499-7600	49	47	19	<SP45	
	SP47	A 区	CB3499-7601	52	44	16		
	SP48	A 区	CB3499-7601	35	21	18		
	SP49	A 区	CB3499-7601	37	22	27		
	SP58	A 区	CB3499-7602	31	27	16		
18	SP59	A 区	CB3499-7602	26	16	25		
	SP63	A 区	CB3499-7503	40	39	16		柱痕跡あり
	SP64	A 区	CB3499-7503	37	33	18		
	SP69	A 区	CB3499-7703	36	36	20		柱痕跡あり
	SP87	A 区	CB3499-7700	31	30	23		柱痕跡あり
	SP91	A 区	CB3499-7700	57	46	17	>SP92	
	SP92	A 区	CB3499-7700	20	15	9	<SP91	
	SP93	A 区	CB3499-7800	30	26	12		
	SP97	A 区	CB3499-7801	30	24	24		柱痕跡あり
	SP110	A 区	CB3499-7702	32	28	16		
15	SP115	A 区	CB3499-7702	55	43	10	>SD113	
	SP116	A 区	CB3499-7702	51	40	14		
	SP117	A 区	CB3499-7803	24	22	17	>SD113	
	SP118	A 区	CB3499-7702	(50)	39	22	<SD114	
18	SP121	A 区	CB3499-7802	33	31	14		
19	SP122	A 区	CB3499-7802	51	50	16		
	SP128	A 区	CB3499-7803	70	70	34		柱痕跡あり
15	SP131	A 区	CB3499-7604	32	30	22		
19	SP138	A 区	CB3499-7901	42	40	22		
	SP142	A 区	CB3499-7901	69	62	20		柱痕跡あり
	SP147	A 区	CB3499-7900	57	55	24		
	SP148	A 区	CB3499-7900	36	30	10		
	SP192	A 区	CB3499-8102	27	24	14		
	SP197	A 区	CB3499-8203	25	22	10		
20	SP203	A 区	CB3499-8204	25	24	10		
	SP204	A 区	CB3499-8204	50	48	12		
	SP205	A 区	CB3499-8204	29	28	14		
15	SP208	A 区	CB3499-8205	28	28	6	>SP209・SD114	
	SP209	A 区	CB3499-8205	28	(20)	10	SP208>SP209>SD114	
16	SP229	A 区	CB3499-8402	40	30	9		
	SP232	A 区	CB3499-8401	50	48	17	>SD187	
20	SP233	A 区	CB3499-8102	30	28	10		
16	SP236	A 区	CB3499-8402	50	(28)	6	<SD235	
20	SP240	A 区	CB3499-8304	31	30	14		
	SP244	A 区	CB3499-8305	21	20	10		
	SP245	A 区	CB3499-8305	25	21	12		
	SP248	A 区	CB3499-8404	28	22	11		
	SP265	A 区	CB3499-8505	27	26	15		
	SP268	A 区	CB3499-8510	38	35	14		
22	SP1005	B 区	CB3599-1209	32	(24)	11	<SP1006	
	SP1006	B 区	CB3599-1209	39	32	8	>SP1005	
	SP1013	B 区	CB3599-1309	33	24	9		
	SP1016	B 区	CB3599-1309	34	24	10		
	SP1028	B 区	CB3599-1310	41	40	14		
	SP1031	B 区	CB3599-1510	42	26	16		



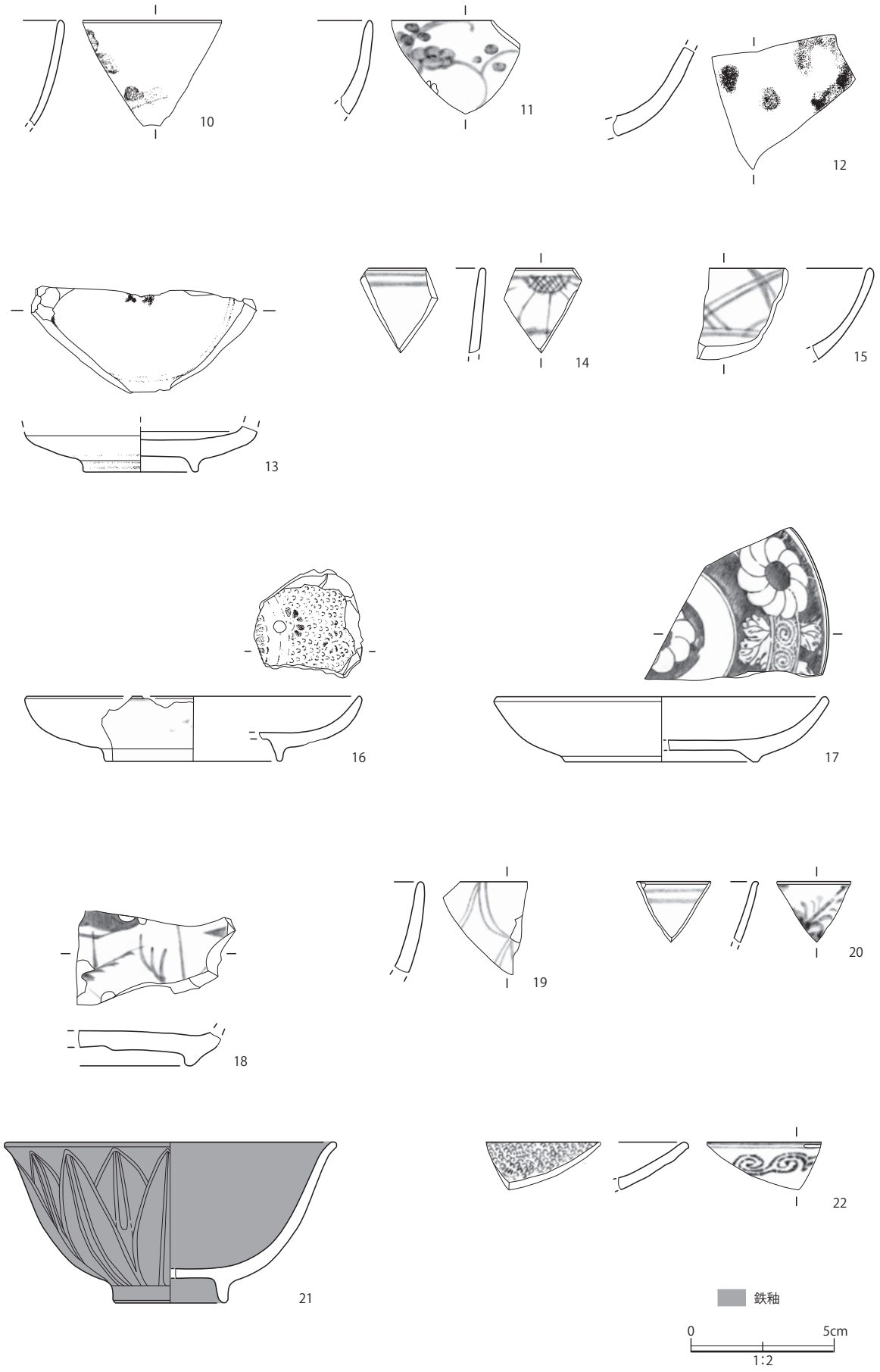
SK1080

1	5Y2/1 黒色細砂まじりシルト	しまり弱。粘性中。下部に粒状の褐鉄が混じる。2mm 以上の粒が一部集中。
2a	10YR1.7/1 黒色細砂まじりシルト	1 ～ 30mm の孔隙有。内部に黒色土が入り込んでいる。粒状の褐鉄を下部に含む。
2b	10YR1.7/1 黒色細砂まじりシルト	しまり弱。粘性弱。0.2 ～ 2mm の孔隙をまばらに含む。粒状の褐鉄を全体に含む。下部に斑状の褐鉄を含む。
3	7.5YR4/4 褐色粗砂・細砂・小礫	しまり強。粘性中。筒状の孔隙内に黒色土が入り込む。褐鉄は 0.2 ～ 2mm の粒状で、割合 7 %前後で広がる。
4	7.5YR6/4 にぶい褐色細砂・粘土質シルト	しまり強。粘性強。褐鉄が斑状なり分散する。φ 1 ～ 5 mm の孔隙内に黒色土が混じる。
5	10YR2/1 黒色細砂シルト	しまり中。粘性弱。孔隙をまばらに含む。下部に粒状の褐鉄が集中する。
6	10YR3/4 暗褐色細砂シルト	しまり弱。粘性弱。脆く崩れやすい。下部に褐鉄の集積。上部に黒色土を含んだ孔隙あり。
7	10YR4/6 褐色軽石・細砂・粗砂シルト	8 側に褐鉄の集積あり。土中に褐灰色土を含む。根が残る部分に黒色土を含む。
8	2.5YR3/2 黒褐色軽石含むシルト	黒色土が混じる。下部に細砂、粗砂、褐鉄が集積する。
9	2.5YR7/3 浅黄色粘土	しまり強。粘性強。6 に似た土質。マンガンを含む。
10	5Y8/4 淡黄色粘土	しまり強。粘性強。上部に褐鉄の斑紋、集積あり。灰白色土が混じる。

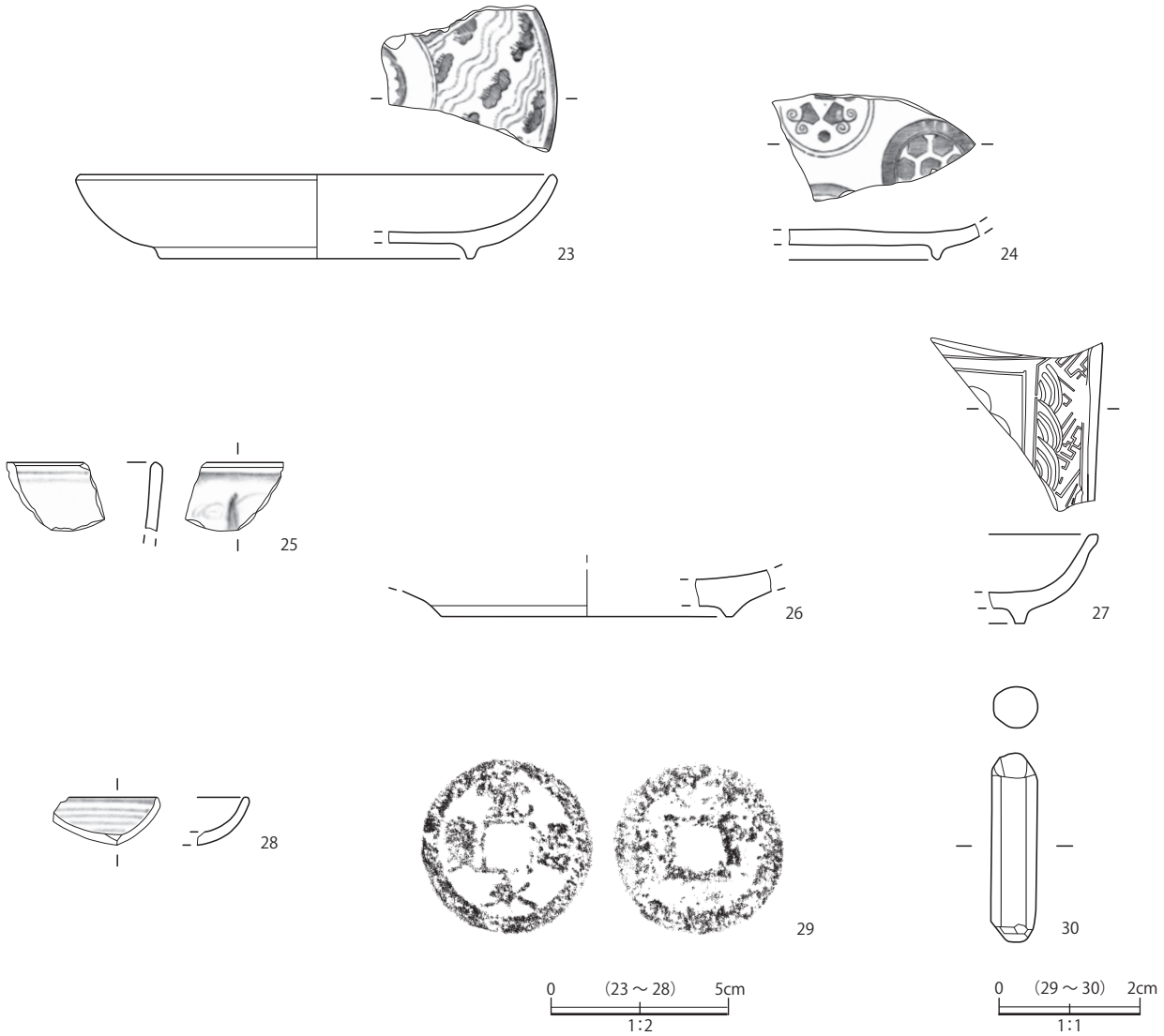
第 23 図　SK1080 倒木痕



第 24 図　A 区出土遺物



第 25 図　A・B 区出土遺物



第 26 図　B・C 区出土遺物

表 4　土師器・須恵器観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別	器種	地区	出土地点	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	底部	胎土・焼成	備考
24	1	10	土師器	坏	A 区	SG74				3.1	ロクロ	ロクロ		細砂混入・やや良	
	2	10	須恵器	坏	A 区	XO				3.5	ロクロ	ロクロ		微砂混入・やや良	
	3	10	須恵器	甕	A 区	XO				7.2	ロクロ タタキ	ロクロ アテ		細砂・石英混入 やや不良	
	31	13	土師器	坏	A 区	XO					ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	
	32	13	土師器	不明	A 区	XO					ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	

表 5　陶磁器観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別器種	生産地	地区	出土地点	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	胎土・焼成	文様・釉薬・年代・備考
24	4	10	陶器擂鉢	不明	A 区	XO				5.2	ロクロ	卸目 ロクロ	緻密・良好	櫛目粗い・18～19C
	5	10	陶器擂鉢	不明	A 区	XO				5.2	ロクロ	卸目	緻密・良好	櫛目密・18～19C
	6	10	陶器擂鉢	不明	A・B 区	XO				8.2	ロクロ	卸目 ロクロ	緻密・良好	櫛目密・19C
	7	10	陶器鉢	不明	A 区	XO				7.6	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	灰釉・近世か・漆接ぎ
	8	10	陶器土管	不明	A 区	SX73				16	ナデ	ナデ	緻密・良好	近現代
	9	10	陶器土管	不明	A 区	SX73		228		17	型打ち成形		緻密・良好	近現代

表 6　陶磁器観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別器種	生産地	地区	出土地点	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	胎土・焼成	文様・釉薬・年代・備考
25	10	10	磁器碗	肥前系	A 区	XO				2.9	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）草花文・17C 後半～ 18C
	11	10	磁器碗	肥前系	A 区	XO				5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）雪輪梅木文・18C くらわんか碗
	12	10	磁器碗	肥前系	A 区	XO				6.4	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	18C
	13	11	磁器染付筒型碗	肥前系	A 区	XO		（38）		6	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）コンニャク印判か、底部：見込 18 ～ 19C
	14	11	磁器筒型碗	肥前系	A 区	XO				3.4	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）半菊文・18C 後半～ 19C 前半
	15	11	磁器皿	肥前系	A 区	XO				4.7	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）二重格子文・19C
	16	11	磁器皿	不明	A 区	XO	（117）	（60）	22.8	6.1	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）型紙摺絵・見込に目跡・近代
	17	11	磁器皿	不明	A 区	XO	（116）	（66）	22.5	5.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）銅版転写・銅緑釉・近代
	18	11	磁器皿	不明	A 区	XO				6.7	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）楼閣山水文・見込に目跡・近代 蛇ノ目凹型高台
	19	11	磁器碗	肥前系	B 区	XO				5.2	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）二重網目文・18C くらわんか碗
	20	11	磁器碗？	不明	B 区	XO				2.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）草花文・18C ～ 19C?
	21	11	磁器碗	不明	B 区	XO	（119）	（38）	55.5	4.7	型押し成形		緻密・良好	（外面）蓮弁文・鉄釉・近代
	22	12	磁器皿	不明	B 区	XO				4.0	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内外面）型紙摺絵・近代
26	23	12	磁器皿	不明	B 区	XO		（86）	23.8	5.1	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）銅版転写・近代・口紅
	24	12	磁器皿	不明	B 区	XO				4.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）銅版転写・近代
	25	12	磁器碗か	不明	C 区	表土				3.2	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）不明（内面）圏線・19C か
	26	12	陶器小皿	瀬戸・美濃	C 区	SK1080		（81.5）		7.2	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	灰釉・中世・RP44
	27	12	磁器皿	不明	C 区	表採				4.5	型打ち成形		緻密・良好	幕末～明治・白磁角皿
	28	12	磁器皿	不明	C 区	表採				3.2	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	近代か・RP42
	33	13	陶器碗	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	18C 頃
	34	13	陶器碗	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	近世か
	35	13	陶器擂鉢	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	鉄釉・近世
	36	13	陶器蓋か	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	時期不明
	37	13	陶器急須	不明	A 区	XO					型打ち成形		緻密・良好	近現代
	38	13	陶器	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）鉄釉（内面）灰釉 19C 以降・器種不明
	39	13	磁器碗	肥前系	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	文様不明・19C
	40	13	磁器碗	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）雷文・19C
	41	13	磁器碗	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）草花文・19C
	42	13	磁器碗	不明	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（外面）（松竹梅）・近代
	43	13	磁器皿	肥前系	A 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	（内面）草花文・19C・ハリササエ
	44	13	瓦質土器焜炉	不明	A 区	XO					ナデ	ナデ	砂粒混入良好	時期不明
	45	13	陶器土管？	不明	B 区	XO					ナデ	ナデ	緻密・良好	近現代
	46	13	磁器皿	肥前系	B 区	SX1036					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	文様不明・18C
	47	13	磁器皿	不明	B 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	銅版転写・近代
	48	13	磁器瓶	不明	B 区	XO					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	19C か・文様不明
	49	13	陶器	不明	C 区	CB3559 ― 2411 北壁 F1					ロクロ	ロクロ	緻密・良好	鉄釉・近現代か・器種不明

表 7　金属製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別	地区	出土地点	計測値（mm/ g）長さ直径	幅	厚さ	重量	備考
26	29	12	銭貨（寛永通宝）	A 区	XO	24		1.6	3.0	1697 年以降・新寛永

表 8　石製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別	地区	出土地点	計測値（mm）長さ	幅	厚さ	石材	備考
26	30	12	石筆	A 区	XO	26.5	6	5.5	ろう石	明治

Ⅳ　理化学分析

1　土壌理化学分析（1）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、B区遺構東側から検出された平安時代の長方形の土坑4基について、遺体埋納、動物遺体等の痕跡の有無を土壌理化学分析（リン酸、カルシウム全量）により検証する。

1　試　　料

分析調査対象とされた土坑は、B区遺構東側のSK1058・1065・1073・1075の長方形土坑4基である。試料は、それぞれの土坑で採取された覆土土壌各1点計4点で、全点を分析に供した。

野外土性（ペドロジスト懇談会編、1984）は、それぞれLiC（軽埴土）である。土色はSK1058で10YR2/3黒褐であり、他の土坑サンプルは10YR2/1黒と腐植が多い土壌である。

2　分析方法

ここでは、土壌中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸はとくに骨に多量に含まれ、土壌中では比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから、その濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。

全リン酸、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法（土壌標準分析・測定法委員会、1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1）試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料1.00 gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3　結　　果

土壌理化学分析結果を表9に示す。リン酸含量は、SK1058で3.23mg/g、SK1065で4.55mg/g、SK1073で3.87mg/g、SK1075で3.94mg/gである。カルシウム含量は、SK1058で1.87mg/g、SK1065で2.74mg/g、SK1073で3.05mg/g、SK1075で3.22mg/gである。リン酸含量はSK1065で最も高い値を示し、カルシウム含量はいずれの土坑も低い値である。

表9　土壌理化学分析結果（1）

試料名		土性	土色	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備考
田向遺跡 B区	SK1058	LiC	10YR2/3 黒褐	3.23	1.87	
	SK1065	LiC	10YR2/1 黒	4.55	2.74	
	SK1073	LiC	10YR2/1 黒	3.87	3.05	
	SK1075	Lic	10YR2/1 黒	3.94	3.22	

備考

（1）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外性による。

LiC…軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～15）

（2）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林水産省技術会議監修、1997）による。

4　考　　察

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり（Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980; 川 崎 ほ か,1991; 天 野 ほか,1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g（川崎ほか、1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1 ～50mg/g（藤貫、1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これら天然賦存量は、動物遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要であるが、天然賦存量以下であっても遺体埋納を全て否定するものとは言えない。すなわち、遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことがあるからである。

今回の分析調査結果では、土坑覆土試料はいずれも天然賦存量の上限である約3.0mg/g を上回るリン酸が検出された。これより、土坑覆土試料でみられたリン酸の富化は、土色に見られる土壌腐植の量比による影響や動物遺体による影響、さらに耕作など土地利用によるリン酸の固定化などの要因による可能性がある。ただし、今回腐植含量について調査していないため、リン酸の由来が上記のいずれかについて詳細な評価は難しい。また、いずれの土坑覆土試料もカルシウム含量は天然賦存量の範囲内であり、リン酸の富化に対応していない。これについては、上述したように時間経過と共にカルシウムの流亡が進んだものとも考えられるが、現状では評価が難しい。

今後、脂質分析や微細遺物鑑定などの他の調査手法を併用することや、周辺での類例における分析事例を蓄積することにより、過去の土坑内容物について詳細がさらに明らかになることが望まれる。

引用文献

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967 『新版標準土色帖』
藤貫　正 「カルシウム」『地質調査所化学分析法 52』 1979　p.57 ～ 61
Bolt,G.H・Bruggernwert,G.M　1980 『土壌の化学　岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳』 p.309　学会出版センター
Bowen,H.J　1983 『環境無機化学－元素の循環と生化学－浅見輝男・芽野充男訳』 p.297　博友社
ペドロジスト懇談会　1984 「野外の判定」『ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック』 p.39 ～ 40　博友社
土壌標準分析・測定法委員会編　1986 『土壌標準分析・測定法』 p.354　博友社
天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.28 ～ p .36
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.23 ～ 27

2　土壌理化学分析（2）

パリノ・サーヴェイ株式会社

は じ め に

本遺跡では、これまでにも B 地区で検出された土坑の覆土について、遺体埋納について検討するためにリン酸含量およびカルシウム含量が測定されている。今回の分析調査では、田向遺跡 B 区、および松橋遺跡において採取された 4 資料についてリン酸含量、カルシウム含量を測定し、前回との調査結果と比較することにした。

1　試　　料

分析調査対象とされた土坑は、B 区遺構東側のSK1058（試料5）、SK1065（試料6）、SK1073（試料7）、SK1075（試料8）の長方形土坑4 基である。試料は、それぞれの土坑で採取された覆土土壌各1 点計4 点を分析に供した。

野外土性（ペドロジスト懇談会編、1984）は、SK1058、SK1065、SK1075 でSiCL（シルト質埴壌土）、SK1073 でSCL（砂質埴壌土）である。土色はSK1058、SK1075 で

10YR2/1 黒、SK1065 で2.5Y2/1 黒、SK1073 で2.5Y3/1 黒褐である。SK1073 は他の試料と比較すると、砂質であり腐植が乏しい。他の試料は、腐植が多い土壌である。

2　分析方法

今回の調査では、土壌中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸は骨に多量に含まれ、土壌中で比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。

全リン酸は、硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは、硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会 1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。粉砕土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3　結　　果

土壌理化学分析結果を表 10 に示す。なお、表 10 には、平成 22 年度の調査結果も併せて表記する。

今回の分析結果は次の通りである。リン酸含量は、試料番号 1 が 5.81mg/g、試料番号 2 が 5.38mg/g、試料番号 3 が 2.07mg/g、試料番号 4 が 4.45mg/g である。

カルシウム含量は、試料番号 1 が 3.13mg/g、試料番号 2 が 3.69mg/g、試料番号 3 が 1.24mg/g、試料番号 4 が 2.54mg/g である。

リン酸含量は試料番号 1 で最も高い値を示し、カルシウム含量はいずれの土坑も低い値である。

4　考　　察

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量は、いくつか報告事例があり（Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか 1991、天野ほか 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。さらに、化学肥料の施肥といった人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、

表 10　土壌理化学分析結果（2）

調査年次	遺跡名	調査区等	試料番号	層位	土性	土色		全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム酸 CaO (mg/g)	備考
H25 年度	田向遺跡	B 区　CB3599-1513	試料 1	3 層	SiCL	10YR2/1	黒	5.81	3.13	H22 年度遺構群東側
		B 区　CB3599-2313	試料 2	1 層	SiCL	2.5Y2/1	黒	5.38	3.69	H23 年度調査区南端
	松橋遺跡	第 2 次調査区北東隅	試料 3	3 層	SCL	2.5Y3/1	黒褐	2.07	2.07	
			試料 4	4 層	SiCL	10YR2/1	黒	4.45	4.45	
H22 年度	田向遺跡	B 区　SK1058	試料 5	遺構覆土	LiC	10YR2/3	黒褐	3.23	3.23	
		B 区　SK1065	試料 6	遺構覆土	LiC	10YR2/1	黒	4.55	4.55	
		B 区　SK1073	試料 7	遺構覆土	LiC	10YR2/1	黒	3.87	3.87	
		B 区　SK1075	試料 8	遺構覆土	Lic	10YR2/1	黒	3.94	3.94	

備考

（1）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編　1984）の野外土性による。

SiCL…シルト質埴壌土（粘土 15 ～ 25%、シルト 45 ～ 85%、砂 0 ～ 40%）

SCL …砂質埴壌土（粘土 15 ～ 25%、シルト 0 ～ 20%、砂 5 ～ 85%）

LiC …軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）

（2）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修 1967）による。

5.5mg/g（川崎ほか 1991）という報告例がある。また、当社がこれまでに実施した分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50mg/g（藤貫 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これら天然賦存量は、動物遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要であるが、天然賦存量以下であっても遺体埋納を全て否定するものとは言えない。すなわち、遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことがあるからである。

今回の分析調査結果では、試料番号 3 を除いた試料で天然賦存量の上限である約 3.0mg/g を上回るリン酸が検出された。これよりリン酸の富化は、土色に見られる土壌腐植の量比による影響や動物遺体による影響、さらに耕作など土地利用によるリン酸の固定化などの要因による可能性がある。一方、カルシウム含量はいずれの試料も天然賦存量の範囲内であり、リン酸の富化に対応していない。

ここで前回の分析結果と比較すると、カルシウム含量に大きな変化がないものの、前回調査した土坑覆土のリン酸含量は今回の測定値を下回る資料が多い。また、前回の調査では土色が黒褐色を示す SK1058 採取試料のリン酸含量が最も低かったが、今回の分析においても土色が黒褐色を示す試料番号 3 のリン酸含量が最も低い。すなわち、リン酸含量と土色に何らかの関連がある可能性が高い。また、東海林（1992）によると、山形県村山地域の水田土壌内の黒ボク土系におけるリン酸含量は、2.59mg/g ～ 9.57mg/g と一定の傾向でなく、幅広いリン酸保持量になると報告されている。これらのことを考慮すると、今回および前回の調査で得られたリン酸含量は元来持つ地力によるリン酸との見解が持たれ、土壌腐植に由来する可能性が高い。

以上、今回の結果からみても、前回調査した 4 基の土坑（SK1058、SK1065、SK1073、SK1075）に遺体が埋納されていた痕跡を明らかにすることができなかった。したがって、墓坑以外の用途として利用されていた可能性も考慮し、脂質分析や微細遺物鑑定などの他の調査手法を併用すること、さらに今後は土壌腐植の影響を除いて検討する必要、すなわちリン酸含量とともに全炭素含量を測定して相関関係を調べることが有効であると思われる。

引用文献

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967 『新版標準土色帖』
藤貫　正 「カルシウム」『地質調査所化学分析法 52』 1979　p.57 ～ 61
Bolt,G.H・Bruggernwert,G.M　1980 『土壌の化学　岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳』 学会出版センター
Bowen,H.J　1983 『環境無機化学－元素の循環と生化学－浅見輝男・芽野充男訳』 博友社
ペドロジスト懇談会　1984 「野外の判定」『ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック』 p.39 ～ 40　博友社
土壌標準分析・測定法委員会編　1986 『土壌標準分析・測定法』 博友社
天野洋司ほか　1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.28 ～ p .36
川崎　弘ほか　1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.23 ～ 27
東海林　覚　1992 「山形県の水田土壌におけるリン酸蓄積の実態とその有効活用」『山形県農業試験場特別研究報告 21 号』 p.1 ～ p.38

V　総　　括

1　調査のまとめ

本遺跡は、第1・2次調査を平成22・23年の2カ年にわたって4,700㎡の発掘調査を実施した。その結果、平安時代と考えられる溝跡、土坑、柱穴、中世と考えられる倒木痕、平安時代の土師器・須恵器、中近世・近代以降の陶磁器、瓦質土器、銭貨、石製品が出土した。断続的ではあるものの長期にわたる時代の変遷が確認できる。

A区は、平成22年度に調査を行った地区で調査面積は3,700㎡である。遺構は溝跡、柱穴などを検出した。出土遺物は第Ⅲ章に先述した通りであるが、A区のみ少量の土師器・須恵器片が出土している。またA区東側は昭和40年代のほ場整備により削平を受けており、遺構は確認されなかった。

先述した通り遺構からの出土遺物は少量であり、明確な遺構の時期特定には至っていない。

溝跡は、10条確認され、そのほとんどが西側に集中している。共通する特徴は、土層は黒色シルトを基調とし、深さ5～20cmを測り、あまり深いものではない事が挙げられる。また数条の溝（SD10～12・113・114・149・235）は北西方向を主軸としている。後述するが、これらは主軸方向が同方向の観点から道路に付される側溝（SD114･149･235）の可能性が考えられる。

柱穴は、約60基を検出した。平面形は、円形・楕円形を呈する。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり逆台形を呈するもの、壁面がやや外傾するもの、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面が丸みを持つU字型を呈するものが確認された。

しかし、半数以上が柱穴と考えられるが判然としないピットであり、堆積状況から柱痕跡が明確に確認できるものは6基（SP63・69・87・97・128・142：表3を参照）と少数であった。それぞれの位置関係はSD113・114の左右に位置し、北東方向を主軸とした柱列状に位置している（第27・28図）。柱間距離は、SP128・69・63は北から4.5m、5mを測り、主軸方向はN－15°－Eとなる。SP142・97・92は北から6m、4.3mを測り、主軸方向はN－12°－Eである。いずれも柱間距離約4～6mを測る。ただし、両柱列は建物跡を構成するには至らない。

B区はA区同様、平成22年度に調査を実施し、調査面積は800㎡である。検出した遺構は土坑、柱穴などである。

検出した土坑は、5基確認され、その中の4基（SK1058・1065・1073・1075）の土坑は堆積状況から墓壙の可能性が考えられ、業務委託による土壌理化学分析（第Ⅳ章）を行った結果、4基共にリン酸含量は天然賦存量の上限値約3.0m/gを上回る数値であった（表9）。その要因はいくつかあるものの明確ではない。カルシウム含量は天然賦存量の上限値範囲内であり、リン酸の富化には対応していないという。しかし、カルシウム含量が上限値範囲内でも墓壙の可能性が排除されるわけではく、その要因は時間経過と共にカルシウムの流亡など理由は様々であるが、現状としては判断が難しい。

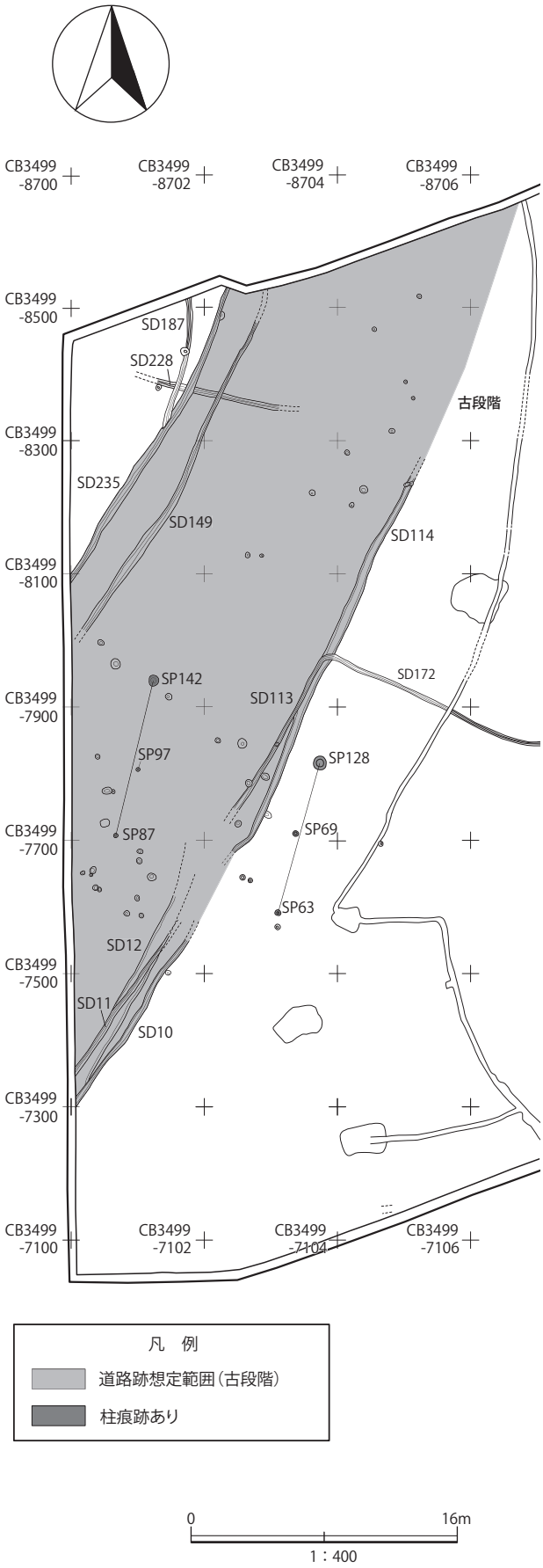
C区は、平成23年度に第2次調査としてB区の北隣の調査区で200㎡を調査した。遺構は、倒木痕2基を検出した。堆積状況から西方へ倒木したことが確認され、SK1080倒木痕から中世の瀬戸美濃産陶器小皿が出土している。このことからSK1080は中世に倒木したことが言える。

本遺跡の遺構の分布域はB区を北限とし、最西端であるA区西側から遺構の密集が高いことから、調査区全体が削平されているもののさらに西側に遺構の分布域は広がるものと考えられる。今回の調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡は確認されなかった。

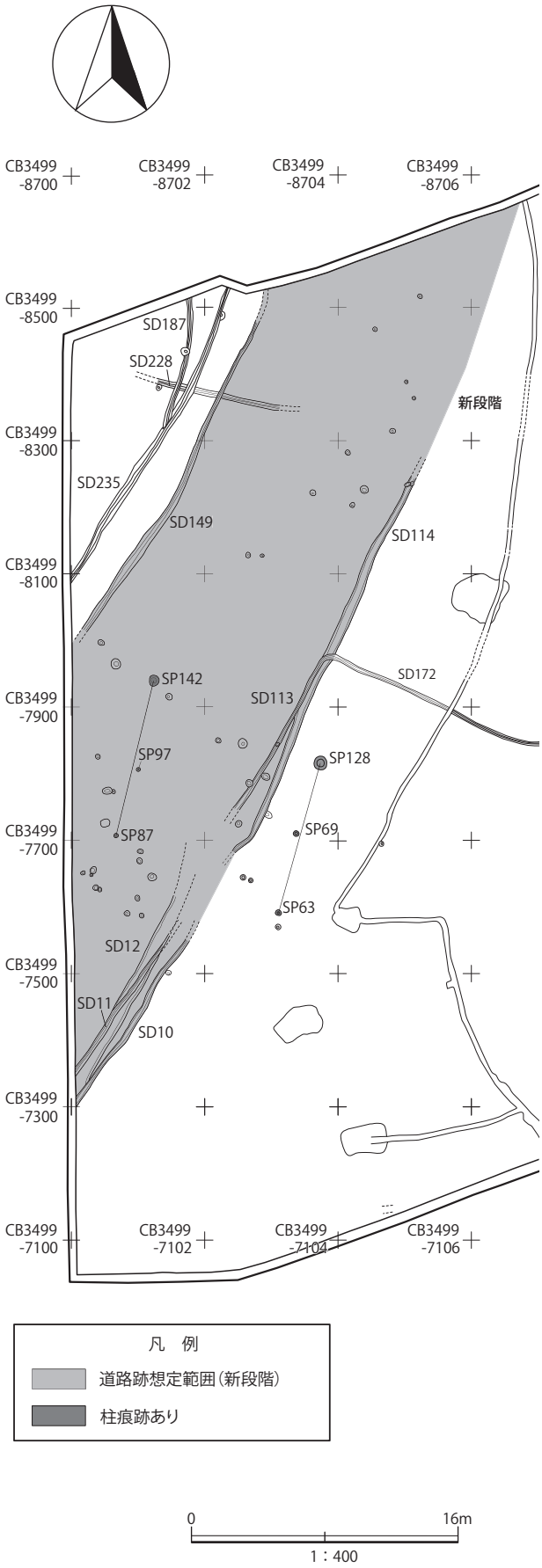
2　SD114・149・235について

先述した通りSD114・149・235溝跡は、主軸方向が同方向であることから道路跡に付される側溝の可能性が考えられる。以下に詳細を述べる。

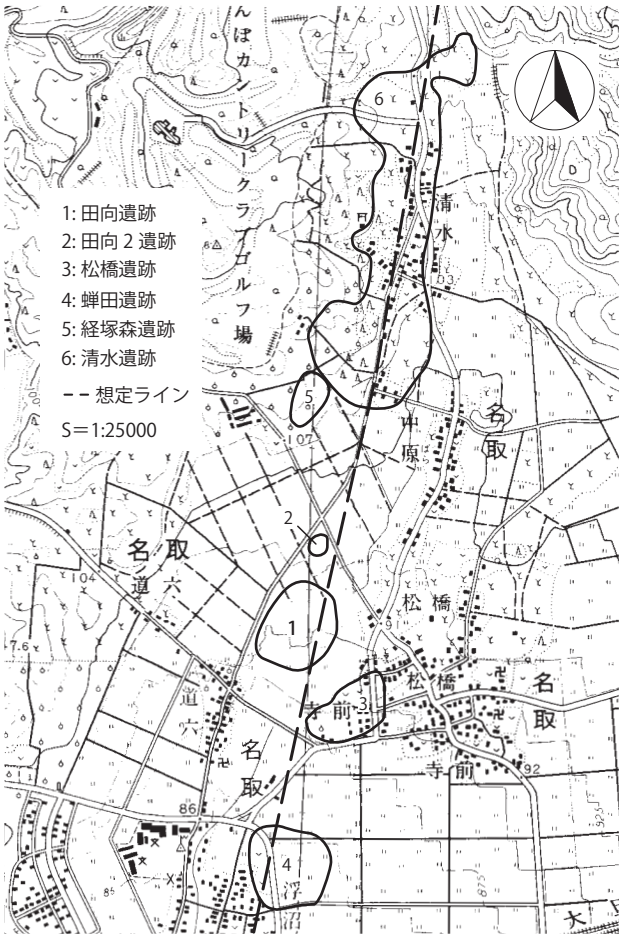
3条の溝跡は、A区北西隅に位置し、それぞれ主軸方向が北東方向を示す。それぞれの溝跡から遺物は出土し



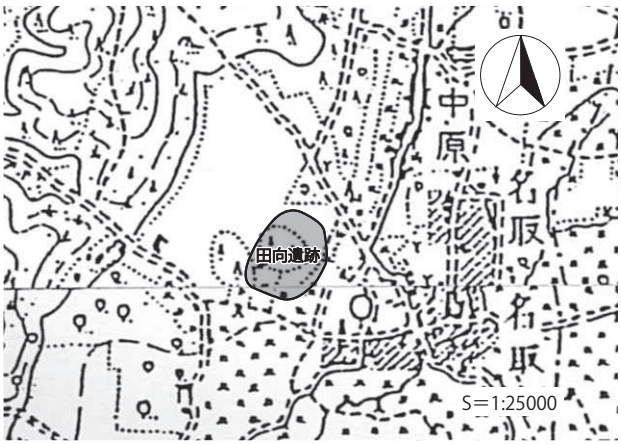
第 27 図　SD114・149・235 道路跡想定図（古段階）



第 28 図　SD114・149・235 道路跡想定図（新段階）



第 29 図　道路跡想定ライン図



第 30 図　明治 34 年測量地形図

第 31 図　明治 34 年測量昭和 40 年修正地形図

※大日本帝国陸地測量部発行５万分の１の地形図「楯岡」「尾花沢」に加筆・修正（第 30・31 図）
※国土地理院発行２万５千分の１地形図「富並」「延沢」「谷地」「楯岡」に加筆・修正（第 29 図）

ておらず、時期特定には至っていないが、周辺遺構から古代（平安時代）に帰属するとみなしたい。

SD114・149・235 は、道路に伴う側溝の可能性があり、道幅を画定する役割を担っていたと推測される。道幅は、SD114 ～ 235 溝跡間の芯々距離が 14 ～ 15m、SD114 ～ 149 間が 12 ～ 14m、SD149 ～ 235 間が 2 ～ 3m であることから、12m 前後と考えられる。路面は、昭和 40 年代のほ場整備により削平を受けており、確認する事はできなかった。しかし溝間に点在する小溝やピットなどが横位に並ぶことから路面を構築する際に版築した波板状凹凸面の可能性も考えられる。小溝とピットの深さは約 10 ～ 20cm である。ただし、削平を受けているため、断定はできない。波板状凹凸（硬化）面は、埼玉県所沢市に所在する東（あずま）の上（うえ）遺跡をはじめ、全国各地で確認されている遺構で、その特徴は円形・楕円形の土坑が一定間隔で並ぶ特殊な工法であり、路面舗装のための路床として構築されたと第一に考えられている。その他の説としては、枕木やコロの痕跡、路床の改良、牛馬の歩行痕跡などいくつかの説が提示されている（文化庁 2013）。現在のところ、用途は明確ではないという。

本遺跡の成果から言えることは、それぞれの溝間は路面（道路跡）の可能性があるものの、明確に道路跡とは言い難く、今回は道路状遺構として留めておく。

SD114・149・235 溝跡を道路状遺構と想定した場合、以下の事が考えられる。

３条の溝跡の組み合わせは明確ではないが、それぞれが北西方向を主軸とし平行して位置する。古代道路の特徴として、時間経過と共に道路幅が狭くなる傾向が指摘されている。このことから SD114 ～ 235 間を古段階（第 27 図）、SD114 ～ 149 間を新段階（第 28 図）と仮定した。

本遺跡周辺には田向２遺跡、松橋遺跡、蝉田遺跡、経塚森遺跡、清水遺跡などの古代の集落跡が確認されて

いる（第 29 図）。終始地点は確認できないが、溝の主軸方向は清水遺跡の方に向いており、集落間における道路または街道として整備された可能性も想定できよう。

明治 34 年測量の地形図（第 30 図）を見ると、当該期の地目は明記されておらず、針葉樹林が並ぶ地であり、南北方向に細長い地割りが見られる。調査区西側の道路は通っていないが、昭和 40 年修正図（第 31 図）を見ると、現存する道路を確認した。しかし、昭和 40 年以前の地形図には記載されていないことから、清水遺跡への道に想定の可能性を残すものの、本遺跡で確認された道路跡は、明治以前に廃絶し、調査区西側に現存する道路へ造り替えられた可能性がある。

現在までの知見から幅員 12m 前後を有する道路跡（駅路）は、7 世紀後半から 8 世紀末・9 世紀初頭に廃絶する。この駅路（道路跡）のことを中村太一氏は「前期駅路」と呼称している。その特徴は道路幅 12m 前後で、全体的に極めて直線的としている（中村 2000）。SD114・149・235 溝跡は、溝間の芯々距離の観点だけから見れば、12m 前後の値を示す。しかし SD114・149・235 溝跡については、一部、先の特徴と合致するが、現在のところ、出羽国（山形県）の官道（駅路）は本遺跡から東方に想定されているため、伝路や道路跡などの可能性と共に検討を加えなければならない課題としたい。

引用・参考文献

木下　良　1996 『古代を考える　古代道路』 吉川弘文館
近江俊秀　2013 『古代道路の謎－奈良時代の巨大国家プロジェクト』 祥伝社
髙桑弘美　2004 「出羽国－山形県」『日本古代道路事典』 八木書店
中村太一　2000 『日本の古代道路を探す　律令国家のアウトバーン』 平凡社
文化庁文化財部記念物課監修　2013 『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』 同成社
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1997 『塔の腰遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1999 『四ツ塚遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2000 『四ツ塚遺跡第 2 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 74 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2001 『四ツ塚遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004 『達磨寺遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集

写真図版

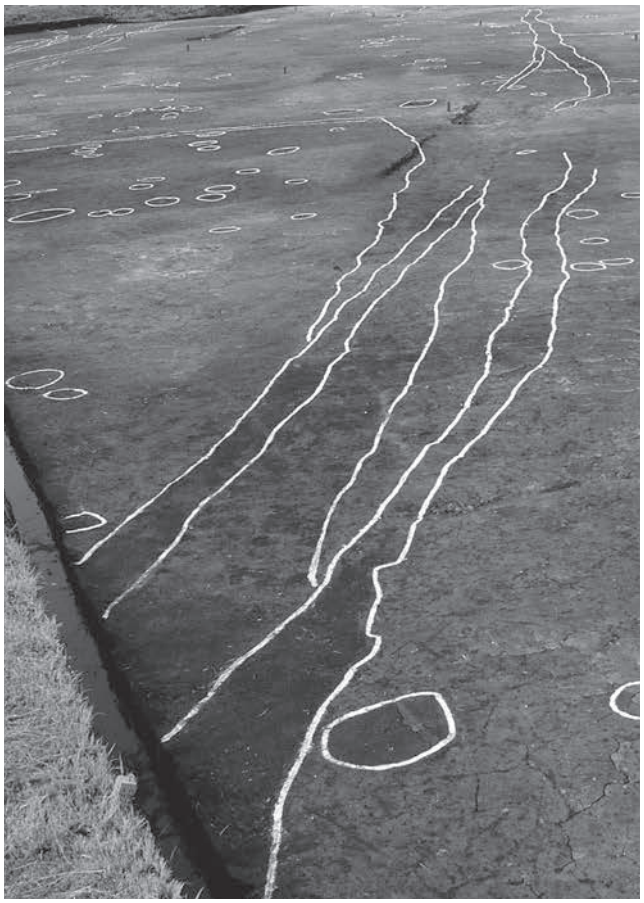
A区調査前全景（南から）

A区北壁基本層序（南から）

A区東側遺構検出状況（北から）

A区西側遺構検出状況（北から）

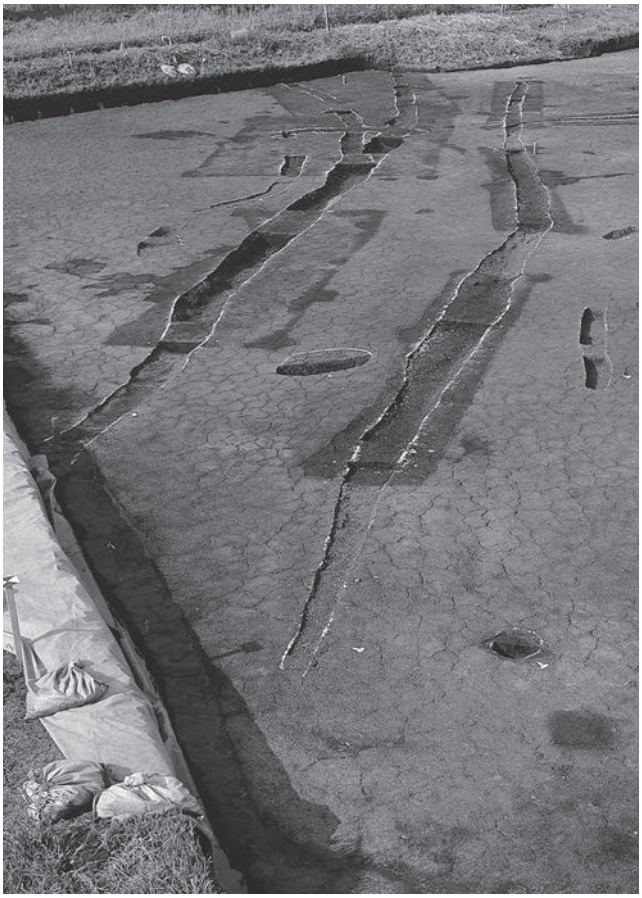
A区完掘状況（南から）



SD10 ～ 12 検出状況（南西から）

SD149・187・228・235 検出状況（南西から）

SD10 ～ 12 完掘状況（南西から）



SD149・187・228・235 完掘状況（南西から）

SD113・114 検出状況（南西から）

SD114・SP118 断面ｄ - ｄ ´（南から）

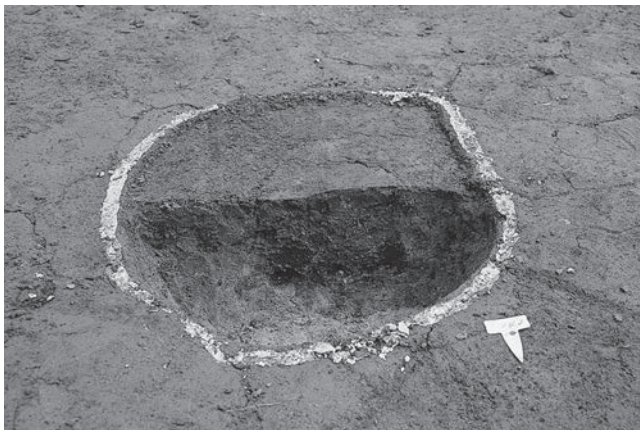
SD149・228 断面ｂ - ｂ ´（南西から）

SD149 断面ｃ - ｃ ´（南西から）

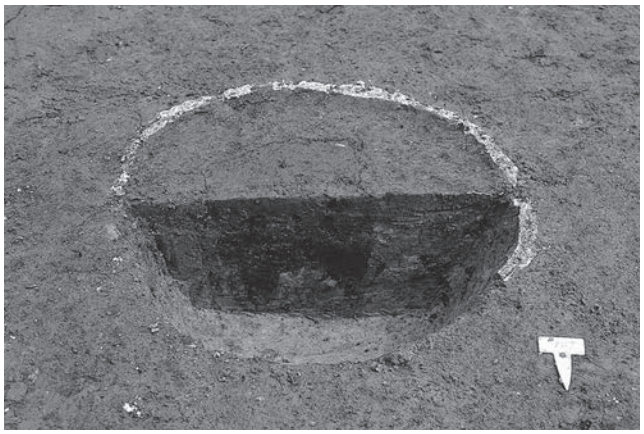
SD187・228 断面ｇ - ｇ ´（南西から）

SP128 断面（南から）

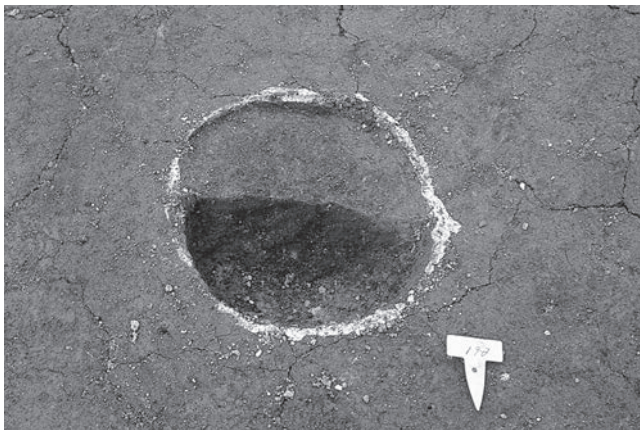
SP131 断面（南西から）



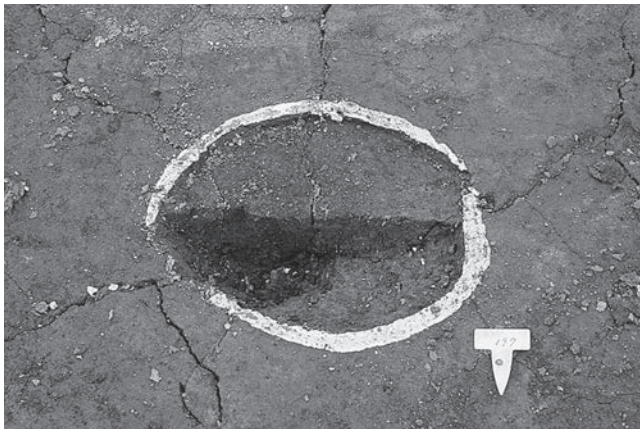
SP142 断面（南西から）



SP147 断面（南から）



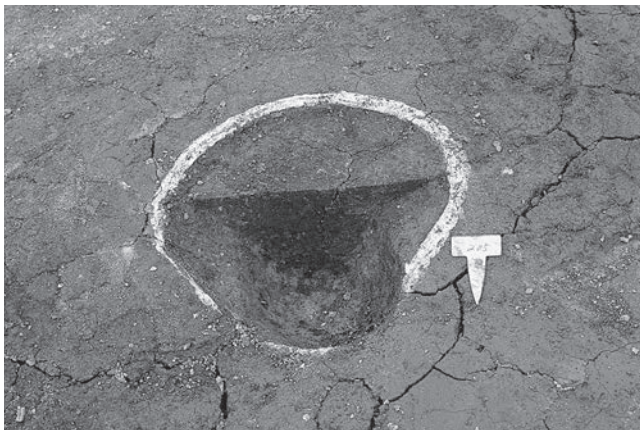
SP192 断面（南から）



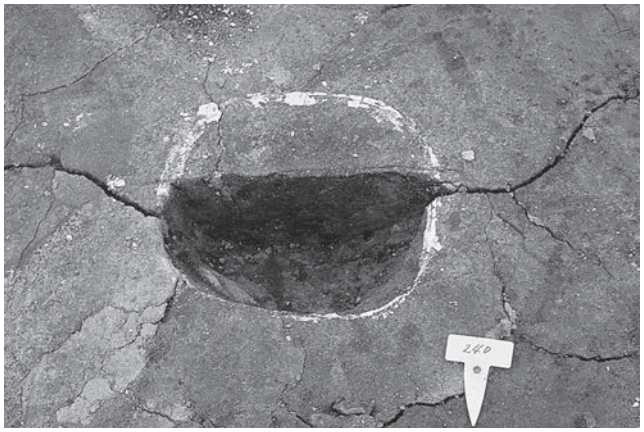
SP197 断面（南から）

SP203 断面（南から）

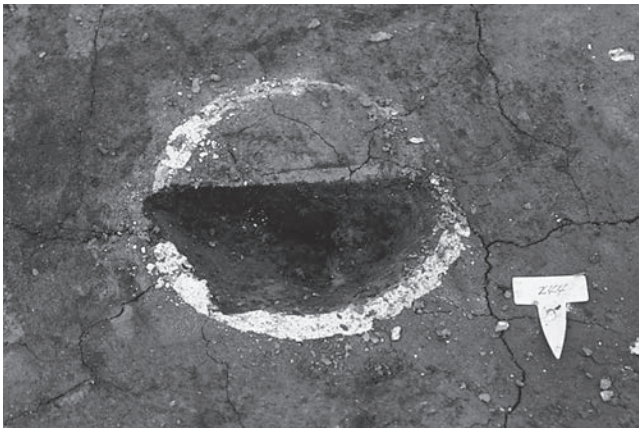
SP204 断面（南から）



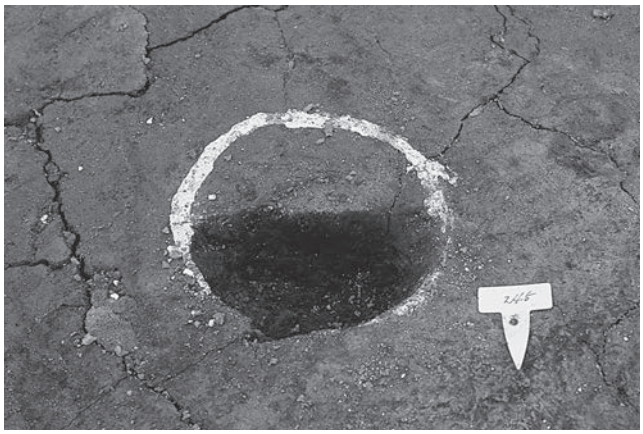
SP205 断面（南から）



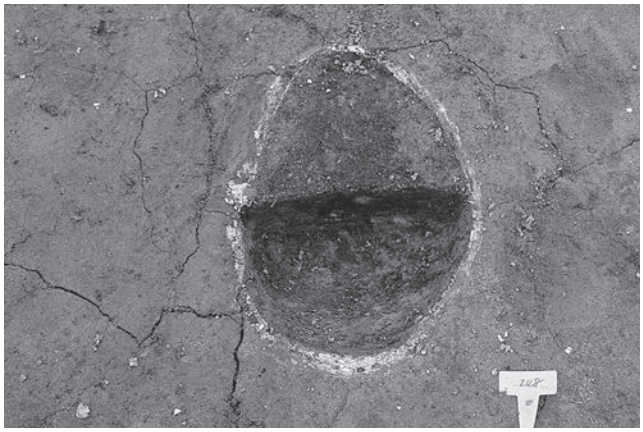
SP240 断面（南から）



SP244 断面（南西から）



SP245 断面（南から）



SP248 断面（南から）

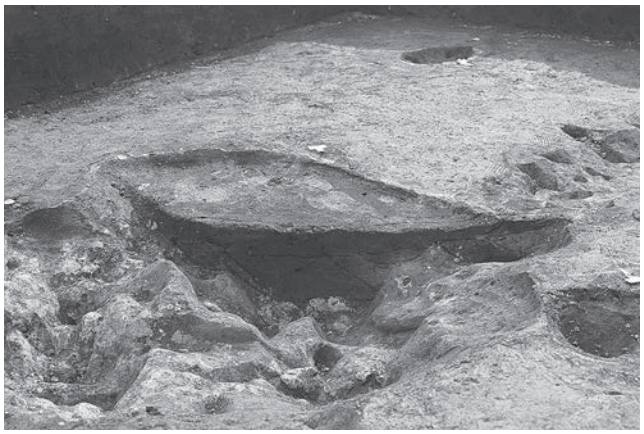
SP268 断面（南から）

B 区東壁基本層序（西から）

B 区北側遺構検出状況（南西から）

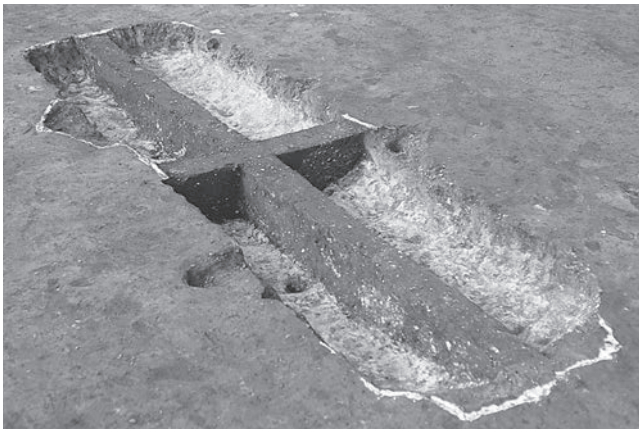
B 区南側遺構検出状況（北東から）

B 区完掘全景（南から）



SK1002 断面（北東から）

SK1002 完掘状況（北東から）



SK1058 断面（南西から）

SK1058 完掘状況（南東から）

SK1065 断面（南東から）

SK1065 完掘状況（北西から）

SK1073 断面（南東から）

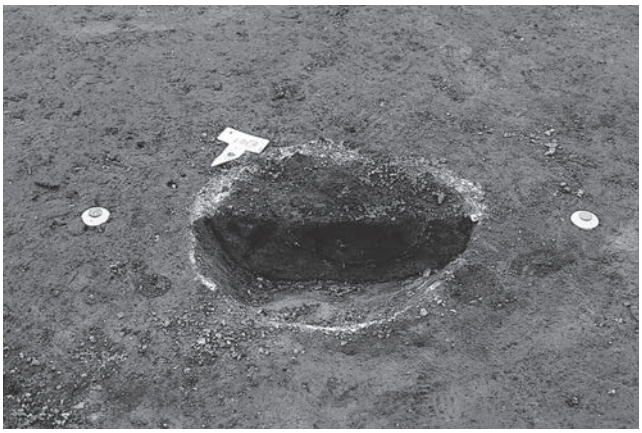
SK1073 完掘状況（北西から）

SK1075 断面（北東から）

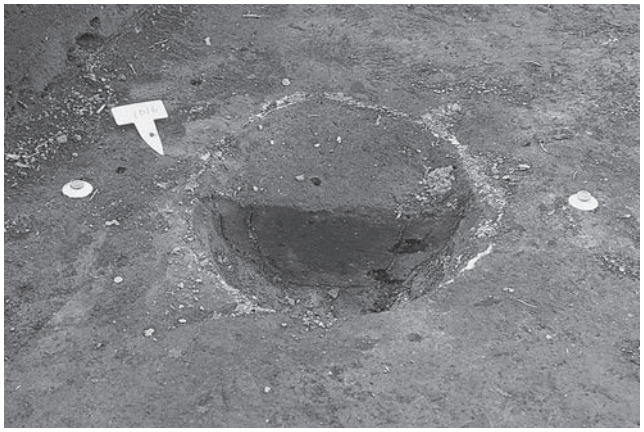
SK1075 完掘状況（北西から）

SK1058・1065・1073・1075 完掘状況（東から）

SP1005・1006 断面（南西から）

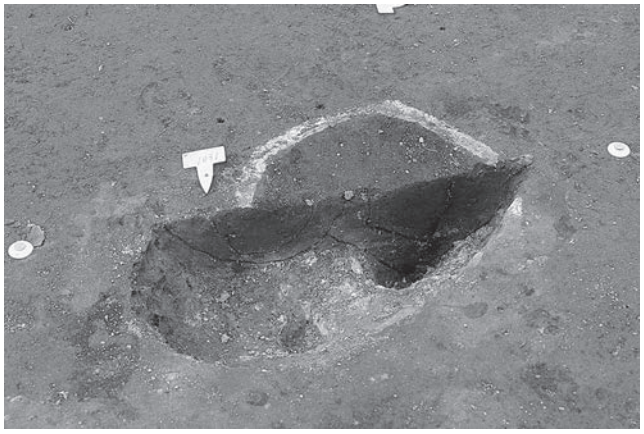


SP1013 断面（南西から）



SP1016 断面（南西から）

SP1028 断面（南西から）



SP1031 断面（南西から）

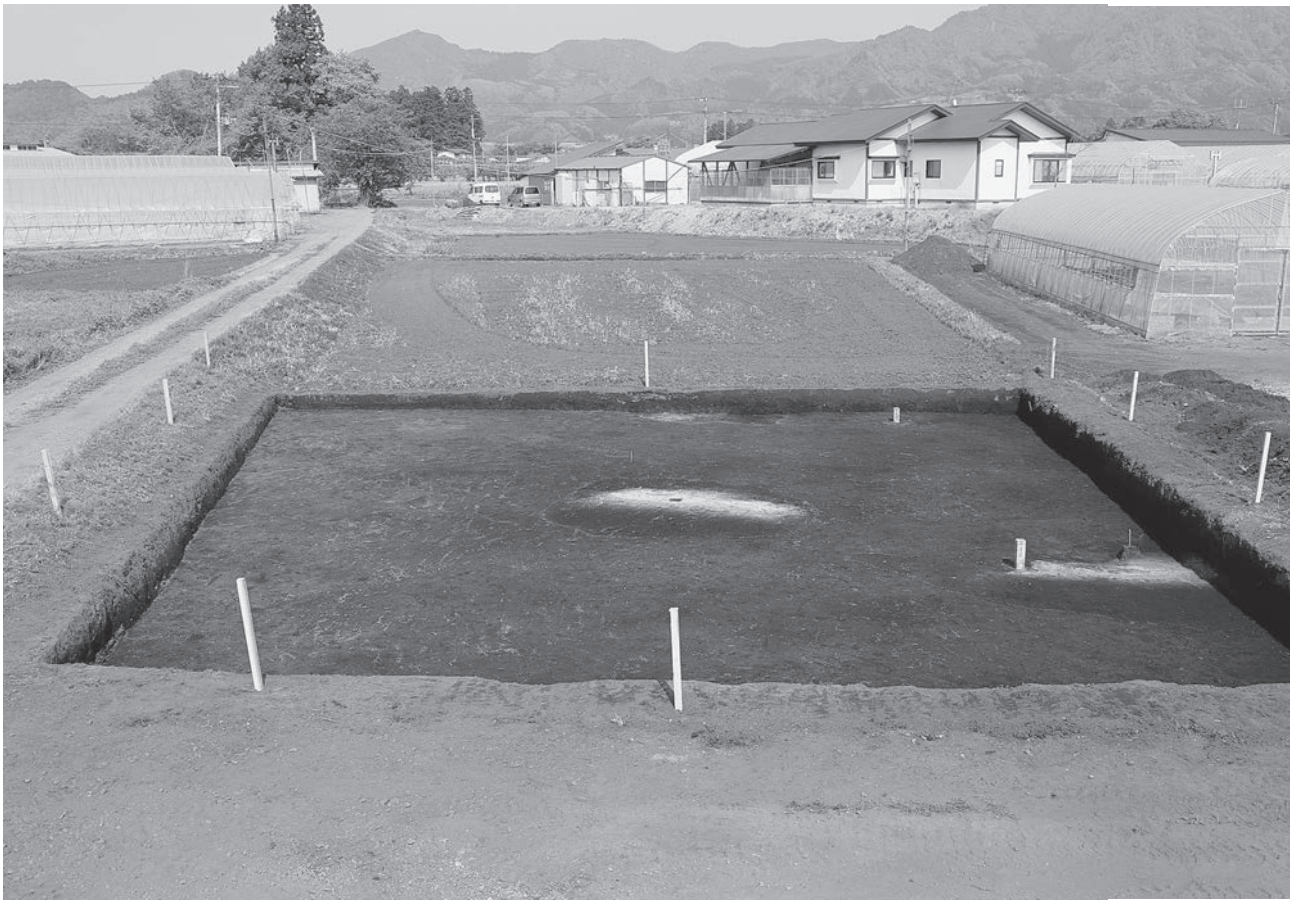
C 区調査前全景（北から）

C 区南壁断面（1）（北西から）

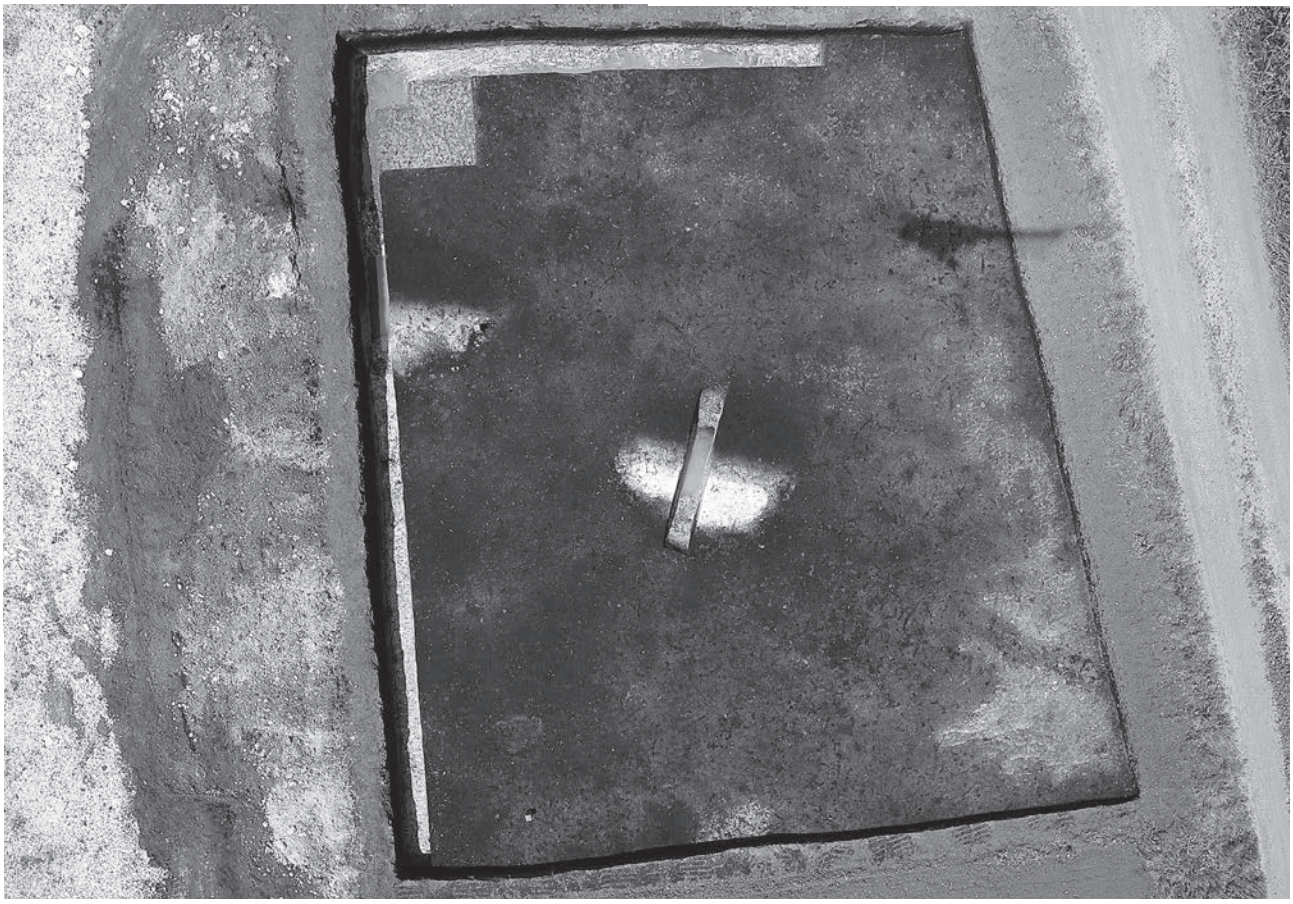
C 区南壁断面（2）（北から）

SK1079 断面（南から）

SK1080 断面（北東から）

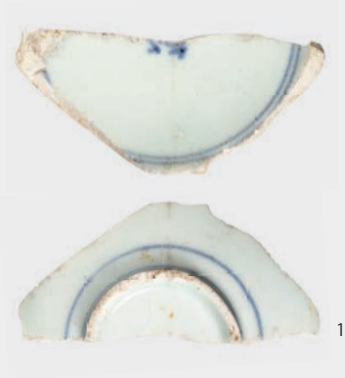


Ｃ区遺構検出状況（西から）



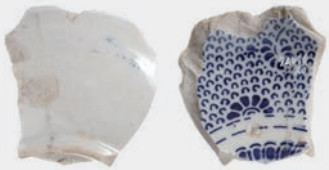
Ｃ区完掘状況（東から）

A 区出土遺物


13

14

15


16

17

18

19

20

21

A・B 区出土遺物

22

23

24

25

27

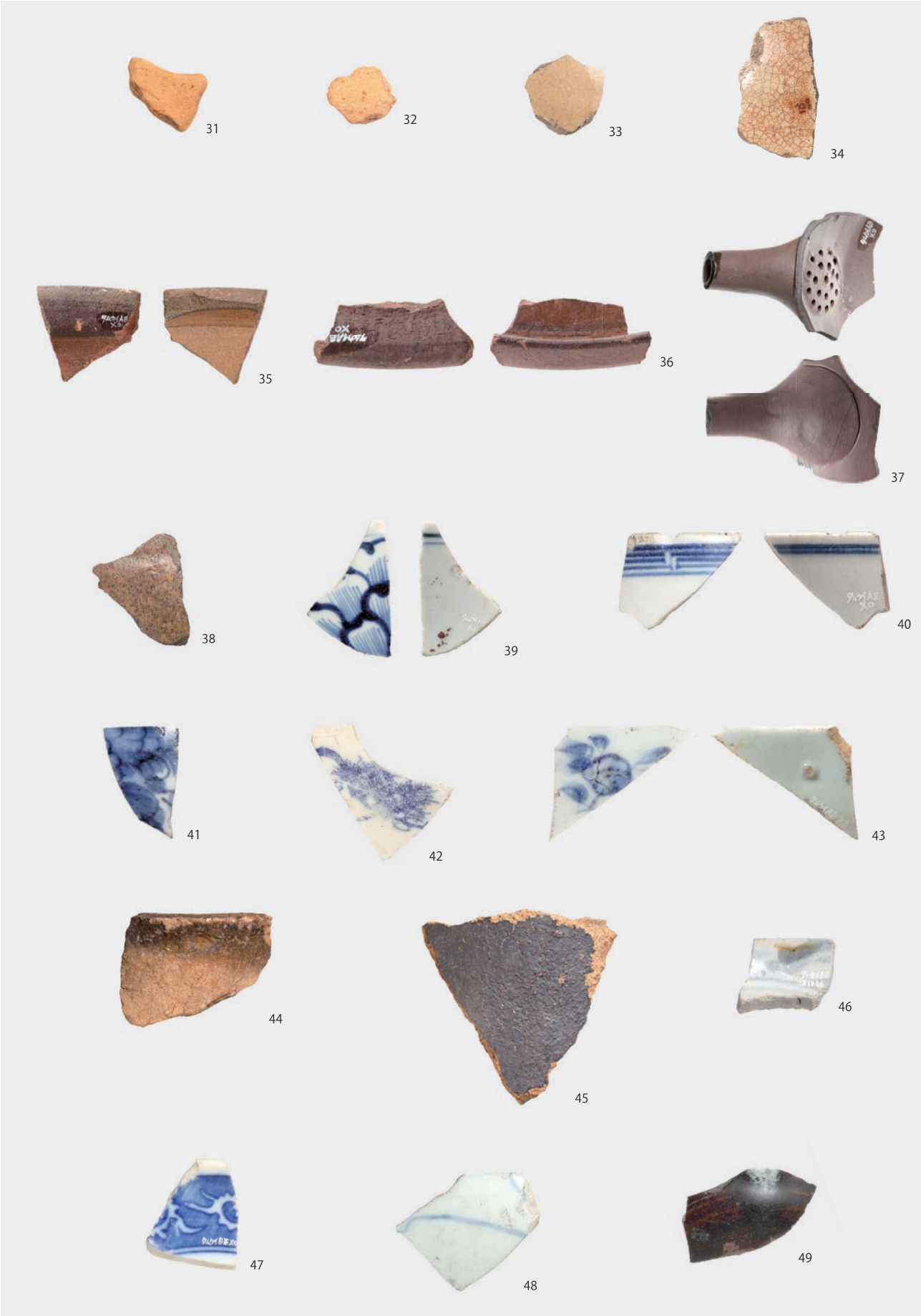
26

28

29

30

A・B・C区出土遺物（1）



A・B・C 区出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	たむかいいせきだい１・２じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	田向遺跡第１・２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第217集
編著者名	安部将平　渡邉安奈
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷5608番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2015年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
たむかいいせき 田向遺跡	やまがたけん 山形県 むらやまし 村山市 おおあざなとり 大字名取 あざたむかい 字田向	208	132	38°　30′　17″	140°　22′　12″	20100517 ～ 20100824 20101026 ～ 20101129	4,500	東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業
						20110516 ～ 20110613	200	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たむかいいせき 田向遺跡	集落跡	平安時代	溝跡 土坑 柱穴・ピット	土師器 須恵器	（文化財認定箱数：2）
		中世	倒木痕	陶器	
		近世 近代		陶磁器　　銭貨 瓦質土器 石製品	

要約	田向遺跡は、最上川右岸の河島山段丘の南麓につながる標高約90mの低地部に立地する。 第１次調査は、調査面積4,500㎡、第２次調査は200㎡を調査した。遺構は、溝跡、土坑、柱穴、倒木痕などが確認されたが、遺構からの出土遺物は少量であったため、遺構の時期特定には至っていない。溝跡は10条確認され、数条の溝跡は主軸方向が同方向であることから道路に付される側溝の可能性が考えられる。柱穴は約60基確認され、柱痕跡を確認したのは６基と少数であったが、これらは北西を主軸方向とした１列３基構成の２列の柱列状に位置し、柱列の可能性も考えられる。遺跡の遺構の分布域はＢ区を北限とし、またＡ区東側は昭和の開墾により削平を強く受けており、遺構はあまり確認されかった。Ａ区西側が遺構の密集度が高いことから、さらに調査区西側に遺構が広がると考えられる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 217 集

田向遺跡第 1・2 次発掘調査報告書

2015 年 3 月 31 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023-672-5301
印刷　田宮印刷株式会社
〒 990 - 2251　山形県山形市立谷川 3 丁目 1410 番 1 号
電話　023-686-6111